

教授法が 大学を変える

2014 年度版

日本私立大学協会

教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

深化する アクティブ・ラーニング

昨年に引き続き、アクティブ・ラーニングの事例を募集し、他大学でも活用できるユニークなものについては、日本高等教育開発協会の協力を得て教育学術新聞において紹介し、また事例を電子化し、各大学のFD活動の参考にして頂くため「教授法が大学を変える」を企画した。結果、24大学から26事例の応募を頂いた。

アクティブ・ラーニングが、全国の大学で幅広く、また、多様に展開されつつある。今後はアクティブ・ラーニングによって、学生はどのくらい深い学びができたのか、あるいは、何ができるようになったのかという「深さ」や「アウトカム」に注目が集まるのではないだろうか。

ピックアップ

●聖隷クリストファー大学「精神障害作業療法学」 実践力・専門性を育成する”ハイブリッド型PBL”

帝京大学高等教育開発センター 教授 井上史子

●金城大学「基礎演習Ⅱ」

学生同士の学びを通じてスタディ・スキルを
修得する大人数授業における協同学習

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

●金城学院大学「WLⅠ」

PBLを使った協調型リーダーシップ教育

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

(教育学術新聞2599号(平成27年3月18日付)掲載)

愛知学泉大学

青森大学

朝日大学

大阪工業大学

大手前大学

九州産業大学

京都文教大学

金城学院大学

金城大学

神戸学院大学

神戸松蔭女子学院大学

尚綱学院大学

女子栄養大学

桐山女学園大学

聖隷クリストファー大学

相愛大学

東京薬科大学

東北工業大学

福山大学

文化学園大学

宮崎国際大学

目白大学

森ノ宮医療大学

麗澤大学

初年時教育により自己ビジョンを明確にし、社会人基礎力の発揮法を学ぶ

複数の教員がテーマごとに話題を提供し、グループ討論や調査、発表を行う

商品開発やマーケティング調査など、実践型の演習を実施

TBL (team-based learning: チーム基盤型学習) 方式での学習方法を習得させる

学習者へ作品読解および読み取ったイメージの画像作成を課す

PBLの実践。独自のC-PLATに基づいた目標設定とふりかえり

キャリア・プランを考え、プレゼン・マナーを身につけ、社会人からアドバイスをもらう

プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践する

ディスカッションとプレゼンテーションをふんだんに行わせる

学生同士の学び合い、eラーニングの活用、質問会議を中核とした学習

100人を超える大人数の講義においてグループによる協同学修

企業分析の基本手法、理論を理解し、企業研究を行う

地域での交流、グループワーク、プレゼンテーションを通じた商品企画等の実践

住民意識調査や被災住民への支援を伴うアクション・リサーチを実施

前半は授業を行い、後半は学生による調査・発表

学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付ける

ハイブリッド型PBL

企業等のゲストスピーカーを迎え講義。市場見学や調理実習など

グループ討議ならびにプレゼンテーションを取り入れた参加型学習

卒業生を講師にしたオムニバス形式の講義。

商店街活性化の取り組みを通し、CGソフトの操作や方法論等を理解

ファッションショー形式で公開発表

Just in Time Teaching” (JiTT) という教授法による授業

資料等を分析・解釈する方法を講義し、分析・解釈を学生が協力しながら行う

臨学共同参画センターを活用した教育

企業経営ゲームを通して経営人としての総合的な能力の育成を目指す

聖隷クリストファー大学

「精神障害作業療法学」

学生の実践力と専門性を育成する
「ハイブリッド型PBL」授業

帝京大学高等教育開発センター 教授 井上史子

【はじめに】

聖隷クリストファー大学は、看護学部、リハビリテーション学部、社会福祉学部の3学部7学科と大学院からなる保健医療福祉の総合大学であり、建学の精神であるキリスト教精神による「生命の尊厳と隣人愛」のもと、「学を究め、こころとわざを磨く」をスローガンに、医療保健福祉分野における専門職業人の育成に力を注いでいる。そして、聖隷クリストファー大学では、人を対象とする援助の学問はサイエンスでありアートであると考え、専門的援助はサイエンスに裏打ちされた高度な知識、技術、そして豊かな感性と鋭い科学的観察眼をもって、温かい心でアートとして創意工夫をこらして行うものであるとする。

本稿で紹介するリハビリテーション学部では、学部が開設された当初よりPBL(Problem-based Learning: 問題基盤型学習、以下PBL)教育を導入することを前提としてカリキュラム編成や施設・設備の整備が行われており、大学としてもそれを支援する体制が整えられていた。現在は、1年生の必修科目(前期、「作業療法概論」)で先ずPBLを経験させ、専門に関する授業が始まる2年生(後期)から、3年生前期、3年生後期(実習前)へと、段階的にPBLによる学習が深まるようカリキュラム設計されている。

【授業概要】

「精神障害作業療法学(I・II)」は、3年次に履修する専門科目に位置づけられ、総合臨床実習に出るためにはこの科目を含む作業療法専門科目に合格していることが必須である。授業の到達目標は、「①精神障害の特性を掴み、おおよそのイメージができる」、「②精神保健医療福祉の流れと精神障害作業療法の歴史について説明できる」、「③精

神障害作業療法で対象となる疾患の特徴と作業療法の展開方法について説明できる」、「④精神障害作業療法の評価方法と手段が説明できる」、「⑤模擬的に精神障害作業療法における評価とプログラムの立案ができる」、「⑥医療施設以外の作業療法・近接領域の実践を理解できる」の6つであり、精神障害作業療法の臨床の場で必要な基礎的知識を網羅するとともに、それらをPBLによるアクティブラーニングを通して習得することが最大の特徴である。作業療法士は、初めて担当する対象者に関して必要な情報を収集し、自らの経験と照らし合わせて問題を焦点化し、介入方針を決定する。PBLによる学習経験は、このようなプロセスを模擬的に経験する機会ともなっている。また、担当教員によれば、PBLによる資料収集と得られた知識を統合するプロセスはそのまま予習としても機能しており、学生の準備学習を担保するとともに、講義における理解を深め知識の定着を促すことにつながっている。

【教育理念】

担当教員は、「ティーチングよりもコーチング(決して答えを教えるのではなく、学習のきっかけ作りと、途中の道標を示すことに徹する)」を授業での基本姿勢としており、学生が自分自身で必要な知識にたどり着くための手がかりを示すことが役割であると考えている。このような姿勢は、作業療法の臨床場面における対象者との関係性でも同様であり、学生はPBLにおける教員の行動や態度を通して、将来必要とされる専門性も身につけていく。

【方法】

聖隷クリストファー大学では、80分授業を採用している。1つの疾患(シナリオ)をもとにした学

習は3つの part (PBL→成果発表→講義)で構成されており、はじめのPBLは2コマ連続で2回実施される。(図1参照)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
午前		1限：PBL発表、2限：講義 (3限：講義)			
午後				4限：PBL 5限：PBL	4限：PBL 5限：PBL

図1 PBLで1つの疾患を学ぶプロセス例 (作成：新宮尚人氏)

PBL (4 コマ) の部分では、履修学生は小グループに分かれ「演習室」と呼ばれる小教室 (ホワイトボードや無線 LAN が整備されている) において、「①課題について感じたこと考えたことをあげる、②シナリオについてのブレインストーミング、③ポイントとなる問題を定める、④調べる問題の優先順位を決める、⑤個々の問題について学習計画を立てる、⑥メンバー内での学習計画に関する意思統一、⑦学習課題の分担、⑧情報源に関するブレインスストーミング、⑨情報収集と共有」のステップに沿って話し合いを進める。この際、話し合いは学生主体で進められ、チューター役である教員は、順次各グループを廻っていき、必要な場面で助言を行うという形をとっている。グループで設定した学習課題に関する情報収集は学生が自己学習によって行い、レポートにまとめる。このレポートは提出が必須であり、「フリーライダー」と呼ばれる自己学習をやってこない学生を防ぐ対策にもなっている。

次に、グループの代表者 1~2 名が PBL の成果を発表し、教員や他の学生からのコメントを聞き、意見交換を行う。この成果発表は全員が必ず一度は行わなければならないようにあらかじめ割り振られており、そのことも学生の学習へのモチベーションを維持することに役立っている。

最後に 1~2 コマを使って、教員はその回のテーマとなっている疾患に関するポイント解説や補足説明のための講義を行う。学生は課題に関する自己学習ができているため、落ち着いて講義に臨むことができる。この講義の中で、学習した疾患に関するイメージを確実なものとするため、テーマに沿ったドラマ仕立ての映像教材 (たとえば「働き盛りの鬱」など) を視聴する。これにより学生は学習したテーマをより身近なものとして感じるとともに、楽しみながら学ぶことの経験にもなるよう工夫されている。時間割はその年度によって違いはあるが、学生の自己学習の時間を確保する

よう工夫されている。たとえば図1の例では、PBLは木曜日や金曜日に配置され、土日を挟んで火曜日に成果発表や講義の授業が行われる。

なお、授業で扱う「シナリオ (疾患)」や進め方は、基本的には担当教員が決定する。授業の成績評価は、「筆記試験 (学期末実施)」「レポート提出 (ビデオ映像を視ての要約・分析・考察と感想など)」「ポートフォリオ提出 (すべての資料等をファイリングしたもの)」により行われる。とくにレポートとポートフォリオでは、学習のプロセスを評価することを学生に意識させることにより、学習に取り組むモチベーションにもつなげている。

【成果】

平成 26 年前期に実施された授業評価アンケートでは、授業の内容や進め方に関する項目では平均 4.45~4.71 ポイント (無記名、5 段階評価) であり、概ね高い評価を得ている。自由記述では、「テキストや参考文献を頼りに文章で書かれていることを、一から自分たちで理解することは大変だったが、理解できた時の充実感は大きかった」「重要な点を把握しながら講義を聴けるので理解しやすかった」「ドラマが教材になっており、身近で楽しみながらも疾患の全体像を効率よく把握できてよかった」「疾患がどのようなものであるか、自分が理解したことを相手に伝えることができなければ、実はまだ理解できていないと気付くことができた」「PBL メンバーとの関係が深まり、鍋をしたこともあった」など、本授業の到達目標にも適うようなコメントが寄せられている。また PBL に関するアンケートでは、教員による最後のまとめの講義やビデオ映像の視聴が、学習の定着や興味を引き出すことに効果的であると回答した履修学生が 90% を超えていた (授業評価に関する数値は当該授業の担当者による)。

【おわりに】

本授業の特徴は、近年アジア地域を中心に拡大している「ハイブリッドPBL」と呼ばれる従来型のPBL手法を大学や学生の実態に即して改変したアクティブラーニング形式で実施されていることにある。さらに、堅苦しい授業をいかに楽しく行うかというための工夫が、授業設計や教材作成の中にちりばめられている点にも注目したい。アクティブラーニングは学生の能動的学習が基本であり、いかに学生の関心を引き出し、継続して学

習に取り組ませるかに苦慮している大学教員が多い中、学生が自己学習しやすいような時間割や実際の医療現場に近いストーリーを持つ映像教材の活用など、学生の視点に立った教育が組織的に展開されている好例といえる。また、欧米で開発された手法を日本の大学の実態に合うよう加工し、実践を積み重ねることで、保健医療福祉教育における一つの授業様式として確立されている点にも敬意を表したい。

金城大学「基礎演習Ⅱ」

学生同士の学びを通じてスタディ・スキルを 修得する大人数授業における協同学習

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

【はじめに】

金城大学は石川県にある医療健康学部と社会福祉学部とで構成される私立大学である。今回紹介する「基礎演習Ⅱ」を行っている医療健康学部は、理学療法学科と作業療法学科からなり、それぞれ理学療法士と作業療法士の育成を行っている。同授業は医療健康学部の初年次教育の一つとして位置づけられ、レポート作成やディスカッションといった大学生に必要なスタディ・スキルの習得が目指されている。この授業を今年度担当しているのが、今回のインタビュー調査をさせていただいた意欲ある若手教員5名一渡辺豊明講師、巽雅子准教授、永井将太准教授、犬丸敏康准教授、山本拓哉助教一である。訪問した際には上記先生方へのインタビューの他、授業の最終回の見学と受講生5名へのインタビューも行った。

【概要】

「基礎演習Ⅱ」は金城大学医療健康学部の理学療法学科と作業療法学科が合同で実施する、一年次後期に開講される必修の「基礎教養科目」である。一年次前期に開講される「基礎演習Ⅰ」が医療人に必要なコミュニケーション能力やレポート作成やプレゼンテーションの基礎を修得することを目標としていることを踏まえ、「基礎演習Ⅱ」ではそこで得られた知識や技能を応用し、文章読解や言語運用、文献調査、情報伝達などの能力を修得することを目標としている。もともとは理学療法学科で20名規模のゼミ形式の授業が複数平行して行われていたものを、作業療法学科が設置された2年前にそれらを一つの授業にまとめたことで、100人の受講生に5人の担当教員がつくという形態となった。その結果、大規模授業でありながら、ゼミのようなきめ細かな指導が可能な授業となった。この授業を担当するのは両学科から出された5名の教員であり、この5名は全ての授業の進行や指導を担当する他、講義も一回ずつ担当している。

【方法】

この授業は【表1】のように、60分の講義と30分のディスカッションを組み合わせた授業を3回行い、そこで作成したレポートを学生が採点する振り返りの授業を1回行うことを一つのまとまりとして、それを3回繰り返すことで成り立っている。

【表1】「基礎演習Ⅰ」全体の流れ

第1セット	第2セット	第3セット
①講義+ディスカッション	⑤講義+ディスカッション	⑨講義+ディスカッション
②講義+ディスカッション	⑥講義+ディスカッション	⑩講義+ディスカッション
③講義+ディスカッション	⑦講義+ディスカッション	⑪講義+ディスカッション
④振り返り	⑧振り返り	⑫振り返り

講義は上記の5名の教員の他、両学科の教員の中で1年次の授業を担当しない教員がゲストスピーカーとして1回ずつ担当するオムニバス方式となっている。講義の内容はそれを担当する教員に委ねられており、自分が専門とする分野の中で、

初年次学生に知っておいて欲しい事が選ばれている。平成26年度の授業では「緩和ケア病棟におけるリハビリテーション」「睡眠と健康について」「脳機能と心身機能」などをテーマとした講義が行われた。第1セ

ットの初回には山本拓哉先生による「協同学習」をテーマとした講義が行われているが、これは授業全体の趣旨を学生が理解する事を意図したテーマ選びである。

授業を見学していて驚かされたのが、この60分の講義の間に全ての学生が非常に熱心にメモを取っていたことである。これだけ熱心に講義を聞く学生は見たことがないといっても過言ではない。そしてその理由はその後のグループ・ディスカッションにあった。

ディスカッションを行うグループのメンバーは毎回ランダムに6名程度に割り振られる。【写真1】のように、司

【写真1】



会役の学生の進行で各学生はその授業で学んだこと、気になったことを話し、それを基にレポートのテーマをグループごとに決める。ここで出されたことは書記役がホワイトボードに記入する。こうした活動があるので、講義に対する姿勢も真剣になるのだろう。学生がグループで話し合っている間、5名の担当教員は20近くあるグループを巡回し、適切なテーマ設定がなされるよう、指導する。グループごとにテーマを決めるまでが90分の授業時間内に行われ、1週間後の授業までに学生は参考となる資料を探して、A4で1枚のレポートを作成しなければならない。

こうして毎回作成されたレポートは、文章の体裁や文献の引用方法、内容に関するループリックに基づき採点される。各セットの初回の授業は5名の担当教員が、そしてそれ以降は【写真2】のように学生が相互に採点を行う。このように学生が相互に採点をする時間として、各セットの終わりに振り返りの授業が設けられている。振り返り後の質問については、ミニツッペーパーを使用し、次回の講義ですべての質問に回答し、全員で情報を共有している。

【成果】

この授業を通して、ループリックに基づくレポートの採点結果は初回と最終回を比べると概ね上昇が見られたという。5名の受講生へのインタビューでも、レポート課題に時間がかかり大変だが、講義や振り返りからの気づきが多く、レポートを書く力は大いに身についたと全員が答えて

いる。また、ディスカッションをする力についても、授業の前半は活発な話し合いが行われることはなかったということだが、見学をした最終回の授業では、非常に活発かつ円滑にグループごとの授業のまとめとテーマ選びが行われていた。このような成果の他、グループでの活動が多いことで初年次の段階で学部にも多くの知人ができ、担当教員の5名の他、講義を担当した複数の教員のことも知ることができるという効果もあるという。

【おわりに】

この授業の特徴は授業の振り返りやレポートのテーマ選び、レポートの採点等、学生同士で学び合う協同学習の仕掛けが多く取り入れられていることである。そのため、100人という受講生数の多い授業であるにも関わらず、講義のセッションでも、ディスカッションのセッションでも、授業外の課題でも学生たちは多くの気づきによりアクティブに学んでいるのだろう。もう一つ、訪問調査をして気がついたのは、担当する教員のこの授業に対する熱意である。担当する5名の教員達は、このような授業ができた経緯について、目の前の学生達を育てるために何ができるのかを考えて試行錯誤してきた結果だと述べている。このような試行錯誤ができる担当教員チームがあることが、この実践を支えているとインタビューをしていて強く感じた。

【写真2】



金城学院大学「WLI A～F」

2つのPBLを体系的に配置した 協調型リーダーシップ教育

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

【はじめに】

金城学院大学は愛知県にあるミッション系の女子大学である。今回紹介する国際情報学部の他に文学部、生活環境学部、人間科学部、薬学部があり、そのうち、薬学部は第1回の「教授法が大学を変える」で取り上げられているという実績を持つ。国際情報学部は平成24年に設置され、グローバルスタディーズコースとメディアスタディーズコースの2つのコースがある。同学部は身につけた知識を人生の場で活かせる強さと、周りを気遣い、協働できる優しさを兼ね備えた女性リーダーシップの育成を目指している。そのためのプログラムとして、今回紹介するWLI (Women's Leadership Initiative)とKIT (Kinjo International Training)と呼ばれる海外研修プログラムがあり、これらを二つの柱として学士課程教育が構成されている。この記事を書くにあたり、このプログラムを担当する長谷川元洋教授、岩崎公弥子准教授、時岡新准教授へのインタビューの他、このプログラムを受講した3名の学生に、授業を紹介するプレゼンテーションをしてもらった。

【概要】

WLIは前述のように国際情報学部の女性リーダーシップ育成のためのプログラムと位置づけられ、そのための汎用的能力であるチームワークやコミュニケーション力、問題解決力、個人的・社会的責任、

異文化（他者）理解力、情報リテラシーの育成を教育目標としている。この学部の定義する「女性リーダーシップ」には特徴があり、一部のリーダーが全体を牽引するものではなく、組織にいる誰もがそれぞれの立場で発揮できる「協調型リーダーシップ」の育成を目指している。

【方法】

WLIは【表1】のように1年次から3年次にかけて継続的に行われるプログラムである。AからFの6つの科目によって構成されており、一年次の前期と後期にそれぞれ開講されるWLI_AとWLI_Bは必修で180名が受講し、それ以降は選択科目で10名から25名が受講している。B、C、Dは問題解決型学習（Problem-based Learning）、EとFはプロジェクト型学習（Project-based Learning）が教授法として採用されている。

WLI_Aでは女性のライフキャリア等を題材として、レポートの書き方、情報収集と整理・分析の仕方、全員が入学時に購入しているノートパソコン(MacBook)の操作等の基本的スキルを学ぶ。

【表1】WLIプログラムの概要

プログラム名	開講年次・必修/選択	目標	教授法
WLI_A	1年前期・必修	学び方の基礎を学び、協働学習を体験する。	
WLI_B	1年後期・必修	省察から自らの課題を確認し、解決する。	問題解決型学習
WLI_C	2年前期・選択	学内の問題を取り上げ、その改善提案をチームで考えることを通じて、チームで学習する能力やリーダーシップを養う。	問題解決型学習
WLI_D	2年後期・選択	学外から提示された課題について、改善提案を行うことを通じて、チームで学習する能力や問題解決能力、リーダーシップを養う。	問題解決型学習
WLI_E	3年前期・選択	学外に発信する活動を通じて、チームで学習する能力やリーダーシップをさらに伸長する。	プロジェクト型学習
WLI_F	3年後期・選択	学生だけで行う活動を通じて、リーダーシップをさらに伸長する。	プロジェクト型学習

【写真1】



WLI_Bでは海外で働く女性や地元のパン職人等、社会で活躍する人物についてグループで調べ、その過程で自分自身の生き方、学生生活の送り方を考える。WLI_Cは学内の問題としてWLI_Aの授業を取り上げ、その授業のTAとして参加をしながら、その授業の問題点と改善案をWLI_Aの授業担当者の前でプレゼンをする。【写真1】は受講生達が授業の問題点の分析と改善策の検討を行っている様子を撮ったものである。この写真にもあるように、各学生はパソコンを常時利用しており、無線LANによって常時ネットワークにつながっているため、情報へのアクセスや共有が容易になっている。WLI_Dは愛知県教育委員会から出された高校生の食育の向上に関する課題に対して改善策を考え、プレゼンテーションを行う。WLI_CとDでは問題解決の方法として、KJ法や「質問会議」の手法を用いる。WLI_Eでは、WLI_Dまでの科目を通じて培ったスキルを活かし、講演会の企画と運営を行う。平成26年度にはフォトジャーナリストの女性を講演者に迎え、講演会の司会進行はもちろんのこと、彼女を紹介する動画の作成から講演会の撮影、編集、配信まで行った。WLI_Fは受講生がプロジェクトを企画し、そのプロセスと成果を評価して単位認定するものである。対象となるプロジェクトは社会の問題に対して社会科学的研究方法を用いて分析・考察し、それを印刷物や作品、イベントでの活動などの成果物にする、または学会やフォーラム等で発表するもの、あるいは企業や各種団体からの依頼でアイデアを提示あるいは実践するものである。訪問した際にWLIの受講生が行ったプレゼンテーションは、実際に店頭でプレゼンテーションした「MacBookやiPadを学生生活でどのように活用しているか」についてのものであった。

【成果】

授業への取り組み状況についてWLI_BとDの受講生に複数回答で聞いたところ、1年生で多かった回答は「グループ活動に消極的な人には声をかけて参加を促すようにした」、「他の人の意見を聞き、グループ内で意見の調整をするように務めた」であり、半数を超えた。また、2年生は「他の人の意見を聞き、グループ内で意見の調整をするように務めた」のほか、「分担した作業を責任をもって取り組むよう、心がけた」、「わからないこと、困ったことは、協力して解決するよう心がけた」という回答が6割を超えた。いずれも「協調型リーダーシップ」の特徴といえる。

【おわりに】

このプログラムの特長は科目間の体系性があることである。WLI_AからFまで順に受講することで、学生自身を起点として社会へと、学生の認識と活動の場が発展していくよう構成されており、それを通して「女性リーダーシップ」を育成するものとなっている。それをクラウドサービス等のICT環境を活用しながら実践しているのも、国際「情報」学部ならではのものだろう。このプログラムは今年度に完成年度を迎えたのだが、毎年新しい科目を作り続けてきた担当教員の方々のご尽力は並々ならぬものがあつたと想像する。その成果は、訪問者である筆者を前にして、堂々たるプレゼンテーションを行った学生達にしっかりと現れていたと感じた。

1 年前期：管理栄養士への道

2 年：栄養教育論、栄養教育論実習

愛知学泉大学

家政学部・家政学科 管理栄養士専攻

安藤明美

科目の位置づけ	<p>ディプロマ・ポリシー</p> <p>管理栄養士専攻は、本学の建学の精神に基づき、疾病への栄養管理を中心とした医学的な知識・技術を身につけ、「食と健康」のスペシャリストとして人々の健康をサポートする管理栄養士の養成を目指しています。</p> <p>①疾病の予防、傷病者への栄養管理・栄養指導の知識、技術を身につけ、それらを各職域で総合的に活用することができる。②チームワークの重要性を理解し、他職種とのコミュニケーションを円滑にすることができる。</p> <p>③生活習慣から発生する健康障害に関する課題を発見し、課題解決に向けた適切な栄養教育ができる。</p> <p>④管理栄養士のコンピテンシー（行動特性）を身につけ、人々の豊かな食生活と健康を創造することができる。</p> <p>上記 DP の①～④を達成することを目的に入学直後より「管理栄養への道」は設置され、その目的を達成する支援要素として、社会人基礎力の発揮法を学ぶ。「管理栄養士への道」は、学生のビジョンを明確にすること、管理栄養士として修得した知識スキル、コンピテンシーを修得することにより、将来、管理栄養士職として対象者（傷病者）の健康増進、疾病予防、傷病者への栄養管理、栄養指導を目的として設定されている。また、管理栄養士養成施設の設置基準として「栄養教育論、栄養教育論実習は」は配置されている科目である。</p>
受講（登録）学生数	1 年生：93名 2 年生：78名
科目の到達目標	<p>「管理栄養士への道」</p> <p>① 自己のビジョンを達成するための知識・スキルの必要性を明確にし、将来計画を立てることができる。</p> <p>② 「やる気シート（社会人基礎力の能力要素発揮）」を活用して自己分析し、自己の強みを伸ばし、弱みを育成することができる。</p> <p>「栄養教育論・実習」</p> <p>① 個人、集団の学習者についての生活習慣と栄養状態の実態を把握できる。</p> <p>② 身体状況、臨床検査値、栄養摂取状況、食行動、食環境などの情報より総合的なアセスメントができる。</p> <p>③ ②により問題点を把握し、問題点を改善するための効果的な媒体（パネル、ポスター、リーフレット等）が作成できる。行動変容モデル、プロセス、プリシードモデルが活用できる。</p>

●初年次教育科目から専門科目●初年時教育により自己ビジョンを明確にし、社会人基礎力の発揮法を学ぶ

教育方法の特徴

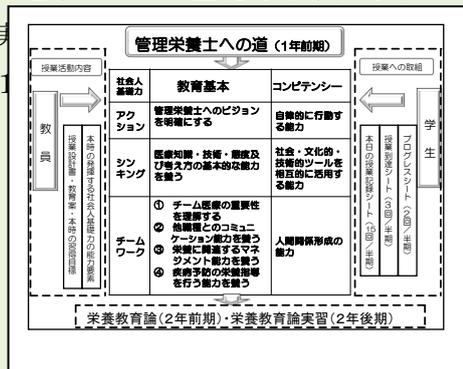
管理栄養士養成施設である本専攻は、初年時教育により自己ビジョンを明確にすることからスタートする。1年次はビジョン達成に必要な知識・スキルおよびコンピテンシーを把握し4年間で修得する目標と手法を明確にする。その手法として社会人基礎力の発揮法を学ぶ。また社会人基礎力は知識・スキルおよびコンピテンシーの伸長コアとなる「自己の持つ潜在能力」を引き出すエネルギー源となることも理解し、意識し行動に移すことを理解する。この学びを基盤に当該科目以外の授業でも4年間、社会人基礎力を発揮する授業を展開する。

教室空間の特徴

収容人数：50名教室（80名 2クラスに分け40名/クラス）
 設備：授業展開内容により教室変更をしている。個人ワークはパソコン室：①パソコン使用可能、1人/台、ソフトはWord、Excel、Power Pint、栄養価算出、インターネット使用可能。②プロジェクター使用可能。③音響装置設置。グループワーク時：細分化され、可動式の机が設置された教室を活用する。本授業は個人→グループワーク（3～4人）→全体討議へと授業展開する。そのために机椅子を自由に可動して、グループ討議できる環境を整えている。また、全体討議では、グループでの討議内容を全体討議へと展開するための、プロジェクターを設置した教室で実施している。また、学生が大きな声を出さなければ、教室全体に伝えられないことを自覚できるように、音響機器は設置されているが、あえて使用しない仕掛けをしている。大きな声を出す訓練をしている。

初年次教育として1年前期は、社会人基礎力の理解と意識付けを「管理栄養士への道」で、2年次通年で社会人基礎力を原動力とした知識・スキルの蓄積法を「栄養教育論・栄養教育論実習」で実

図1



特定の回の授業の流れ・時間配分

初年次教育：「管理栄養士への道」	
授業構成（15回）	
意識	①社会人基礎力の必要性 ②管理栄養士とは ③目指す管理栄養士像とは
理解	④「無限の可能性への道」による社会人基礎力の発揮法 ⑤専門基礎・専門分野の科目関連 ⑥ビジョン達成の知識・スキルは何か ⑦4年生による社会人基礎力の発揮法
実践	⑧将来ビジョンの宣言—講義、実験・実習の学ぶ姿勢— ⑨自己評価—授業振り返りシート実施法の記入

図2

栄養教育論・実習 (2年前期・後期)		
	授業展開	社会人基礎力
2前期	【栄養教育論】 ・ビジョンを明確 ・管理栄養士に必要な知識・スキルは何か ・コンピテンシーは何か	12の能力要素の意識付け、発揮法の理解
2後期	【栄養教育論実習】 <Phase1 個人活動 課題・創造力> メタボリックシンドローム予防の栄養管理 ・食品交換表の活用・食事摂取基準活用 ・食事バランスガイド活用	事前評価
	<Phase2 ベアー活動 課題・創造力> メタボリックシンドローム予防の食行動の変容 ・行動療法の活用/カウンセリングの活用	中間評価
	<Phase3 グループ活動 課題・創造力> 全学生の食生活改善への提案 ・学生の実態調査・問題点の把握・分析 ・改善計画の立案 ・効果的な媒体の提案	事後評価

<図2>管理栄養士への道：初年次教育として平成21年度に立ち上げ（選択科目）、平成25年度より必須科目（1単位）として実施している。

<授業の目的>「自己ビジョン達成のための原動力として社会人基礎力を発揮し、確かな基礎・専門知識とスキルを習得して、人々の食生活から健康を支援できる人間性豊かな管理栄養士の育成」を目指すことである。

る。

<展開>図に示すように4年間で修得する教育基本、管理栄養士に必要なコンピテンシーの両輪を走らせる原動力となる社会人基礎力の必要性和その活用法について習得する。<工夫>

1. 管理栄養士に必要な知識・スキルの理解：4年間で修得する基礎と専門科目の関連性を理解

する。

1. 自己ビジョンと社会的貢献の明瞭化

卒業後の将来像を絵に描き、ビジョン化する(不明確な学生は絵がかけないか、抽象的な絵になる)。2) 同じ職域の学生同士をグループ化し、①自己ビジョンの目的と社会的貢献、②ビジョン達成に必要な知識・スキルは何か、③どんな人材を必要としているか等を「ビジョン達成へのエネルギーと栄養素は？」等のシートを用い個人で考えその後、グループでディスカッションし、自己ビジョンをさらに明確にし、④グループ内での発表後、全体発表をする。

3. 評価：学生は、社会人基礎力の12の能力要素を5段階レベルで評価できる「やる気(振り返り)シート」を用いて授業開始3回め(事前)と15回め(事後)の授業時で実施し、強み、弱みに気づき、弱みの改善法について記入する。教員はその記載内容について、育成コメントを入れて返却する。その後、図中の波線部分の展開となり、2年生の栄養教育論へ進み意識と行動へと進める。

<図3>栄養教育論(2年前期)表1に授業展開と社会人基礎力の発揮の流れを示した

<目的>管理栄養士の教育基本とコンピテンシーを発揮する能力要素は、「課題発見力、創造力それを如何に伝えるか(発信力)」と考えている。したがって毎回の授業の中で課題を見つけ(課題発見)、その課題解決(創造力)をし、その結果を発信することを習慣化することを目的に実施する。

<工夫>前期15回授業で、A4判の上半分は、課題発見シート(本日の授業の課題発見と解決はいつ、どこで、どれくらいの時間をかけて解決したのか記入するシート)と下半分は小テストとし、前回の授業内容の重要ポイントを出題し、自分の知識・スキルの蓄積と社会人基礎力の発揮不足に気づきの繰り返しができるように工夫する。

<図3>栄養教育論実習(2年後期)

<目的>2年前期の栄養教育論の専門知識を活用して、疾病患者を症例に課題発見・課題解決(創造力)・発信力の発揮を目的に実習を展開する。

<工夫>

1. 授業環境：15回の授業を個人・ペアー・グループ活動(成果発表含む)の3区分して、自己の成果をさらに伸ばせる授業環境を整える。

2. 授業計画：学習活動内容、理解目標、関連科目、理解目標のためのリテラシー・授業工夫・ファシリテート・12の能力要素の発揮について15回分の計画書を作成する。

3. 教育案：本日の授業のテーマ、実習項目・時間・能力要素・リテラシー・媒体を毎時間作成する。

4. 授業記録シート：①あなたのビジョン、②本日の授業で理解・習得する内容・理解度・100%理解するために必要なこと、③能力要素「創造力」を如何に発揮したか、他の能力要素とどのように関連づけて発揮したか、④習得した知識・スキルを毎回の授業終了時で記述する。

●初年次教育科目から専門科目 ●初年時教育により自己ビジョンを明確にし、社会人基礎力の発揮法を学ぶ

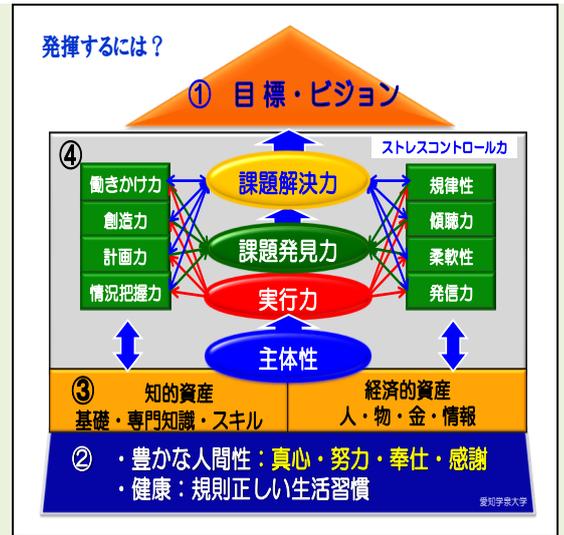
①初年時教育として「管理栄養士への道」は、ビジョンを明確にするためのオリジナルシートで目標を明確にするための意義について説明ツールとして使用している。

図 4

②2年次前期「栄養教育論」は、社会人基礎力の能力要素中の課題発見力を育成することにより、知識・スキルの修得を目的としている。授業終了後に本日授業内容について課題を発見して、その解決法について記述させ次週まで実施できるよう[支援シート]をツールとして使用している。

③2年次後期「栄養教育論実習」は、授業開始時に本時の授業テーマ(目標)を伝え、授業終了時(5~7分前)にどれだけ、目標に到達しているか評価する。また、授業中、目標到達のために創造力をどのように発揮したかも記述する。

授業で特に使用しているツールとその活用法



2年 前期 栄養教育論

課題発見力

課題発見シート

1. 本日の授業より、あなたが「何で、どうして、何故」と思った課題は何でしたか。

2. 1の課題解決に一番発揮する能力要素はなにですか。3つ0を付けてください。
 <アクション> 主体性・働きかけ力・実行力
 <シンキング> 課題発見力・計画力・創造力
 <チームワーク> 発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力
 ・規律性・ストレスコントロール力

① いつやりますか:

② どこでやりますか:

③ 何をしますか:

④ 何分位しますか:

課題に勝ち できた 「どうしたら課題に勝てたか」

課題に負け できなかった「課題に勝つには」

2年 後期 栄養教育論実習

授業記録シート

一授業記録シートー理解度の確認

<創造力>

<記入はホールペン>

管理栄養士専攻 2年 クラス: A B Nk 氏名

1. あなたのビジョンはありますか?
 [1] 将来あなたは、社会でどのようなことがしたいですか。
 [2] あなたは自分の人や社会にどのように役に立ちますか?

2. 評価者: 実習教育論実習 授業日数: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11
 12 13 14 15

3-1 本日の授業の理解・習得内容 3-2 理解内容の達成度(%) 3-3 100%理解するには何が必要ですか。

	100	90	80	70	
	+50				
	50	40	30	20	
	+10	-0			
	100	90	80	70	
	+50				
	50	40	30	20	
	+10	-0			

4. 「創造力」評価を依頼する力
 課題(知らないこと等)に対してすでに修得した知識・スキル・テキスト・インターネット(本、情報源)などを利用して、知らなかったことが解ったり、問題解決の提案をすることができたこと。

<創造力の評価>
 1. 全く発揮できなかった
 2. 多少は発揮できた
 3. しっかりと発揮できた
 4. しっかりと発揮して発案できた
 5. しっかりと発揮して積極的に発案できた

4-1 <自己評価> [1 . 2 . 3 . 4 . 5]

1. 図は、「間栄養士への道」「栄養教育論・実習」受講生全員の社会人基礎力発揮レベルの平均値である。

①「管理栄養士への道」全ての能力は、授業展開前(事前)より15回授業を終了した(事後)で伸長した。

②栄養教育論は管理栄養士への道同様に、事後で伸長している。「課題発見力」を発揮させる授業展開することにより、特に課題発見力、計画力、傾聴力は伸長した。

③栄養教育論実施は①②科目と同様に、事後で伸長している。「創造力」を発揮させる授業展開することにより、特に主体性、働きかけ力、課題発見力、創造力は伸長した。

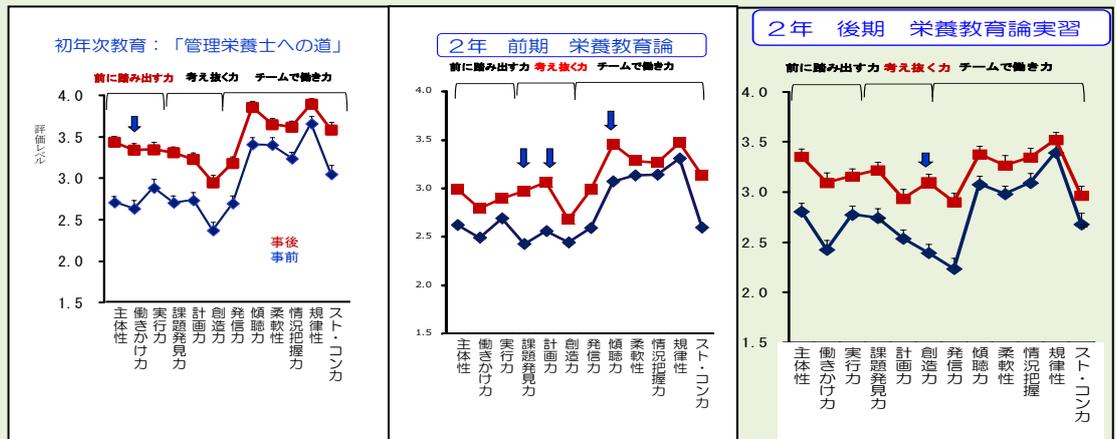
2. 以下の上段の表は2年前期「栄養教育論」時に課題を発見し、その課題解決を実施した回数と成績との関連を見たものである。

①課題の実施回数と成績との関連は、課題実施頻度が多いほど、試験の成績も良い結果(実施頻度平均以上者の点数=70.7点、平均以下者=60.5点と有意に高い)がみられる。

学習成果
(学生は何かできるようになったのか)

●初年次教育科目から専門科目 ●初年時教育により自己ビジョンを明確にし、社会人基礎力の発揮法を学ぶ

②栄養教育論実習の授業中の核能力要素との関連性は、主体性と柔軟性、働きかけ力と発信力、発信力と傾聴力との間には強い相関があることより、各能力要素間で発揮しあっていることが分かる。また、実行している時、計画的に物事に取り組んでいる時は、発信力、傾聴力は下がるこ



とより、教育支援としては、学生作業中に声かけ、アドバイスなどをしても十分な傾聴はできないことが分かる。

③12の能力要素と授業内容の理解度、成績との関連性は、規律性（この対象集団は元々規律性は高い）を除く全ての能力要素を発揮することにより、授業内容の理解度を上げる効果がみられる。

課題の実施回数と成績との関連 (2年 前期 栄養教育)

(実施した=1 実施しない=2) 結果：課題実施頻度が多いと成績もよい (r=0.36 p<0.01)

	n=73	平均	SD	課題・成績 t-test
課題実施回数		1.4	0.2	
平均以上 n=29		1.2	0.1	
平均以下 n=44		1.6	0.2	**p<0.01

本試験の成績結果(点)	64.5	14.2
平均以上 n=29	70.7	11.6
平均以下 n=44	60.5	14.3

**p<0.01

授業中の各能力要素との関連性 (2年 後期 栄養教育論実習)

	発信力	傾聴力	柔軟性
主体性			0.76
働きかけ力	0.75		
実行力	-0.85	-0.68	
計画力	-0.55	-0.81	
発信力		0.68	

12の能力要素(事後評価)と授業内容の理解度、成績との関連性

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	スト・コンカ
理解度	0.36**	0.49**	0.42**	0.45**	0.42**	0.34**	0.33**	0.46**				0.31**
小テスト		0.27*		0.25*				0.31**				
本試験				0.28*				0.30*	0.34**			

**p<0.01 *p<0.05

学習成果の評価・測定の方法

- ①社会人基礎力は評価シートを用いて、自己評価により測定する。
- ②ペーパー試験、発表（ルーブリック評価）により測定する。

本科目についての学生からの評価

「管理栄養士への道」 初年時教育として、自己ビジョンの明確、必要な知識・スキルおよび社会人基礎力の必要性を学ぶことにより、4年間の授業スタイルをつくることができたと評価している。しかし、十分に理解できない学生も3割程いる。「栄養教育論・実習」2年前期は理論・後期は、前期で課題発見について訓練し、後期に活用という流れができており、実習への取組みがしやすかった。また、毎回授業開始前に本時のテーマが提示されることにより、授業中意識して取り組むことができたとの評価をしている。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等

学生の学習姿勢は、何を目的に学習するのか、明確なビジョンを持つことにより上がると考えます。したがって将来設計ができることが最も重要なことだと考える。
成長する課程で資質として、素直さ（いいなりということではない、いったん受容）、そして自己の考えをまとめる力が必要。言い訳、他者へ責任を押し付け、自己責任を回避する習慣が

●初年次教育科目から専門科目 ●初年時教育により自己ビジョンを明確にし、社会人基礎力の発揮法を学ぶ

**に関する、担
当者の基本
的な考え方
(教育哲学)**

いている学生は、中々知識・スキル、コンピテンシーは伸びない。このことに気づかせる支援として、社会人基礎力の育成を実施している。

私の仕事は、誰でも無限の可能性を持っている、眠っている潜在能力を開発し、少しでも学生の成長を支援することである。そして、4年間で修得した知識、スキル、コンピテンシーを社会貢献できるように人材育成をすることである。また、この無限の可能性を信じ、潜在能力を開発する教育は、授業の中で多くのことに気づかせるための課題を投げかけることであり、創造力を働かせ解決する力をつけること。まずは、学生が課題発見できる仕掛けを作り、解決案を出すまで待つ忍耐姿勢が大事であることを私自身も学んでいる。

**授 業 風
景**



●基礎スタンダード科目（教養科目）●複数教員がテーマごとに話題を提供し、グループ討論や調査発表を行う

「学問のすすめ」、「人間と文化」、「社会と環境」

青森大学

経営学部経営学科/社会学部社会学科/

ソフトウェア情報学部ソフトウェア情報学科/薬学部薬学科

鈴木康弘、楢引素夫

科目の位置づけ

「学問のすすめ」、「人間と文化」、「社会と環境」の3科目は、本学独自の教養カリキュラム「基礎スタンダード」の根幹を担う、1年生が最初に出会う4学部必修科目です。

本学は「地域とともに生きる大学」「学生中心の大学」という基本理念を掲げて、ディプロマ・ポリシーには、「3つの力」を備えた人材の育成を明記しています。3つの力とは、①生涯をかけて学び続ける力、②人とつながる力、③自分自身を見据え、確かめる力です。

これら3科目は、大学への導入科目と位置付けられ、教育内容として学問の面白さや地域の諸課題を取り上げ、アクティブ・ラーニングやコーチングといった学生中心の教育方法を用いて、3つの力の育成を強力に促す役割を担っています。

これらの科目は文系理系の4学部が協働して、さまざまな専門分野の教員チームが集まってオムニバス科目として企画運営をしています。そのため、これらの科目で学生たちが経験する学びの作法は、基礎スタンダード科目だけでなく専門科目での学修の土台ともなるように工夫がなされています。

受講（登録）学生数

各科目、約190名

科目の到達目標

「学問のすすめ」では、以下の4つを到達目標にしています。

- ①学問への態度や研究方法に興味を持つことができる。
- ②自分自身と自分を取りまく世界について論理的に考える姿勢を身につける。
- ③他者と意見交換することができる。
- ④自分の考えを筋道立てて表現できる。

「人間と文化」、「社会と環境」では、以下の5つを到達目標にしています。

- ①大学生として主体的に学ぶ姿勢を実践的に身につける。
- ②社会的関心を高め、社会が抱える問題の本質を見抜く力をつける。
- ③学生同士や教員との議論を通じて、相互理解と発表能力を身につける。
- ④地域に関する理解を深め、その魅力や課題を知る。
- ⑤地域の特色や魅力を伸ばす方法や、課題に対処する方法について考える力を身につける。

教育方法の特徴

「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」の授業では、複数の教員がテーマごとに話題を提供し、グループ討論や調査、そして発表といったアクティブ・ラーニングを行います。各グループは、異なる分野に興味を持つ文系理系4学部の学生から成り、刺激的な意見を互いに述べ合い、多様な視点からものごとを捉えられるようになっていきます。

これらの授業では、学部混成による学生のグループワークを中心としたアクティブ・ラーニングを採り入れることで、学生が学修目標へ到達しやすくなっています。

教室空間の特徴

平成25年度私立大学等教育研究活性化設備整備事業により、「集いのスペース」を整備しました。この教室空間は、授業時に学生同士の小グループ討論や発表資料作成などに使いやすいよう、可動式の机を採用しています。さらに、グループごとの討論がしやすいように、ホワイトボードやパーティションを複数設置しています。このような教室は4室あり、各教室60名程度が収容可能となっています。そのうち1室は、床をカーペット敷にしており、靴を脱いで利用するようにしています。これにより、机とイスを収納して、エクササイズや集団活動を行うこともできます。

また、パワーポイントなど、パソコンを使用した授業や学生による発表がしやすいように、各教室にプロジェクターを備え付けています。

「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」では、特にこの教室を使用したアクティブ・ラーニングを有効に利用しています。その他の科目でも、アクティブ・ラーニング時にはこの教室を使用して効果的な授業を行っています。

特定の回の授業の流れ・時間配分

◇「ITを活用して、青森県が抱える課題を解決する」テーマの授業例（「人間と文化」）

- ・出席確認、机の移動、資料配布、提出物返却 10分
- ・授業の全体像とそこでの今回の位置付けの説明 5分
- ・アイスブレイク 10分

グループワークを実施する準備として、話しやすい雰囲気を作るため、簡単なゲームをする。

- ・導入 20分

グループワークで議論するために必要な予備知識を紹介し、課題を示す。

- ・アイデア出し 20分

ブレインストーミングの方法を用いて、アイデア出しを行う。アイデアは付箋紙に書いていく。

- ・アイデアのまとめ 20分

KJ法を用いてアイデアを整理してまとめていく。

- ・まとめ 5分

授業内容のまとめ、ふりかえり用紙への記入と提出

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・移動可能な机と椅子
グループディスカッションと全体説明を聞くときで、それぞれ活動しやすいように配置を変える。
- ・プロジェクターとノートPC
全体説明をするために利用。
- ・付箋紙
ブレインストーミングでアイデア出しをするときにアイデアを記述する。
- ・模造紙
KJ法などで付箋紙を整理して貼り付ける。
- ・マーカー
付箋紙と模造紙への記入。
- ・スマートフォン(学生個人)
模造紙を撮影して学生個人が保存する。
- ・ふりかえり用紙
授業内容を振り返る。また、出席や評価に使用する。

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・文理融合型の複数学部生による共同学習は、多くの成果を上げています。まず、学部が違えば（立場が違えば）スキルや視点が異なることに気づきます。そして、さまざまな知識やスキルを統合していくことの意義を、入学初年度から身をもって体験することになります。
- ・教員による指示のバリエーションは、学生のスキルの幅を広げています。模造紙を使ったポスターセッション、マインドマップの板書、パワーポイントでのオーソドックスなプレゼン等々。この授業を体験した学年と、しなかった学年のスキルの差は、大学祭での展示発表などでも明瞭に現れています。
- ・学部を超えて友人関係を構築できる利点も見逃せません。高校までと異なり、クラスの枠が緩い大学では、部活動やサークル活動に加わっていても、特に理系・文系の交流は生まれにくくなっています。この授業を経験した学生たちはごく普通に言葉を交わしています。例えば、ITのスキルを持つ理系学生に文系学生が技術的協力を依頼するなど、学生同士の主体的学修に取り組む光景がよく観察されるようになりました。
- ・また、本学初のスチューデント・アシスタント（SA）の4年生は、1年生のディスカッションのアドバイスや見守りに努める過程で「このような学習を入学時から体験していれば、就活がだいぶ楽だったはず」と、この授業の学修成果を評価しています。また、SAからは授業の改善に関する有効なアドバイスも得られています。

学習成果の評価・測定
の方法

- ・各教員による、自分の担当授業および学生の発表に関する評価
- ・学生グループ単位でのアンケート（グループ組み替えをはさみ、中間に1度、期末に1度実施。実名）
- ・学生個人のアンケート（グループ組み替えをはさみ、中間に1度、期末に1度実施。匿名）

<p>本科目についての学生からの評価</p>	<ul style="list-style-type: none">・授業評価アンケートによれば、授業内容の理解については、大半の学生が「達成できた」「やや達成できた」と回答しました。グループワークについては、「あまり達成できなかった」という学生もおり、今後に課題を残していますが、多くの学生は「達成できた」「やや達成できた」と回答している一方で、「あまり達成できなかった」という学生もおり、教員のスキルアップについて今後に課題を残しています。・自由記述には、「他学部生と仲良くなれた」「役割分担して取り組めた」「話し合いができた」という肯定的評価が目立ち、人間関係の広がりやコミュニケーション・スキルの向上が自覚されていました。
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>基礎スタンダードの根幹を担うこの3科目は、本学の教育哲学を代表する科目です。基礎スタンダードの目指している教養教育とは、幅広い教養よりも「確かな教養」を、そして教養をもとに様々な課題に取り組む「実践スキル」を、さらには「自己開発力」を身に付けることです。青森大学基礎スタンダードは、カリキュラム・ポリシーに示す、未来を拓く実践力の育成を実現するために、本学独自の教育内容とアクティブ・ラーニングの方法を採用しています。</p> <p>この科目を企画した背景には、グローバル化の進展によって、ますます地方が世界と直結していく時代を迎えて、地方で学ぶ学生はここが世界の変化の中心であることを意識して学び、活動しなければならないという認識があります。</p> <p>「学問のすすめ」「人間と文化」「社会と環境」は、青森大学の教育の正面玄関ともいうべき導入科目です。文理4学部から成る本学の長を生かし、高校までのように教科書どおりの正解を捜すことよりも、正解のない現実の問題に取り組み、その原因や解決策を探求する力が求められます。そこで、それぞれの科目では、学生が将来、予期できない状況や問題に遭遇するとき、それに対応する教養と実践力発揮できる人材の育成を目指して、学生達が当事者意識を持って主体的に学び、探求し、経験を積む機会と環境を設ける工夫をしています。</p> <p>担当教員チームにも工夫があります。本学の十数名の教員が、それぞれの学問分野から新入生に学んで欲しいトピックを一つ選んで学問の世界に招待します。学生たちは、地域に関連する現在進行形の学問研究に触れ、教員や他の学生と対話しながら、一つのテーマやものごとについて、多面的な視点からアプローチするアクティブ・ラーニングの必要さと楽しさに触れて、大学生としての学びの作法を修得することができます。</p>
<p>授業風景</p>	<ul style="list-style-type: none">・学生たちは、「人間と文化」「社会と環境」の8つのテーマの授業に参加します。・「森の力」をテーマにした授業では、学生たちが森林の面積の増減や活用法について、ディスカッションし、その結果を模造紙にまとめて、グループごとにポスターセッションを行いました。限られた時間内ながら、イラストを盛り込んだり、配色に工夫を凝らしたりして、アナログなメディアの特性を活用したプレゼンテーション力が育つ様子が見て取れました。・「21世紀の課題を探る」「世界と青森県の課題」をテーマにした授業では、

●基礎スタンダード科目（教養科目） ●複数教員がテーマごとに話題を提供し、グループ討論や調査発表を行う

パワーポイントでの発表が義務づけられ、巧拙の差はあるものの、どのグループも図表やデータを駆使した力作を紹介していました。

- ・「青森とは」の授業では、原発の再稼働の是非をテーマにディベートを行い、それぞれの立場から現状と課題を分析・考察しました。
- ・「地域の自律性とNPO・ソーシャルビジネス」をテーマにした授業では、黒板をいっぱい使って、巨大なマインドマップを手分けして書き込みながら、発表役の学生がその内容を懸命に解説するといった場面がありました。
- ・活発にディスカッションを繰り広げるグループもあれば、元気なリーダーが議論をリードし、手際よくまとめていくグループ、言葉少なくポスターを緻密に書き上げていくグループなど、メンバーの個性がグループ活動に反映されていました。
- ・学期末には総仕上げとして、全グループが参加してのポスターセッションを行い、学生たちは8テーマから選んだ個別テーマについて内容をまとめました。

その他の特記事項

「人間と文化」「社会と環境」では、前期末に「スーパーポスターセッション」を開催し、各グループが受講した8テーマから1テーマを選んで、ポスターを作成して発表しました。全40グループのポスターを学長と4学部長が採点して、優秀グループを表彰し、これらのグループは、全グループの前でプレゼンテーションを行いました。

前期の活動の様子は、「基礎スタンダードニュース」にまとめて発行しています。（全4回）。

専門演習Ⅳ（消費者心理コース）

朝日大学

経営学部ビジネス企画学科

中畑千弘 他3名

科目の位置づけ	専門演習Ⅳの消費者心理コースでは、1年次から3年次前期までに学修した教養科目、専門科目（必修、選択）を土台として、商品開発やマーケティング調査など、社会に出てから体験することを先取りする実践型の演習を実施しています。25年度は、地元の瑞穂市商工会と連携し、和洋菓子店の特産品開発における課題（製品化のための消費者評価、販売促進案の作成など）を学生が商工会や商店主と協同して解決していくプロセスを体験的に学びました。こうした商店が抱えるマーケティング課題について学生が主体的に解決方法を考え、実践することで、経営学部のDP（ディプロマ・ポリシー）である「ビジネスマインドを備え、地域と事業の発展に寄与し経営の一翼を担う知識と技量を身に付けた人材の育成」に資する中心的科目となっている。
受講（登録）学生数	48名（4つの演習クラスに分かれ、12名ずつ4名の専任教員が担当）
科目の到達目標	本演習における到達目標は、以下の3つとした。 ① 商工会、商店との連携を通じ、実際の企業活動を体験することで、社会人基礎力の向上を図り、社会における「適応力」を育むこと ② 商工会職員や商店主から直接、課題についてオリエンテーションを受けることで、地域の抱える課題に真摯に向き合い、将来、地域を支える前向きな姿勢や意欲を引き出すこと ③ 学生が主体的考えて、主体的に実践する取り組みを進め、グループで協働する能力、企画・プレゼンテーションする能力を身につけること
教育方法の特徴	この演習では、商店の実際の特産品開発スケジュールに沿って、プログラムを組んだ。その中で、学生に具体的な課題を与え、主体的に取り組むようにした。消費者心理コースに属する4つの演習クラスがコンテストとして競争する状況を演出し、現実起きる提案型コンペを再現した。 具体的な課題は以下の2点とした。 ・特産品開発事業として、地域を代表する富有柿を使った新メニュー（和菓子、洋菓子）を開発し、製品化する過程で、①学生による商品評価、②地元のお祭りを利用して「500名試食調査」を行った。その中でアンケート調査のプロセスを学び、集計結果をまとめて試作菓子の改善点を提案し、商店に商品改良を促した。 ・瑞穂市商工会からのオリエンテーションに基づき、販売促進の提案をまとめてプレゼンテーションを行った。具体的に提出物の仕様を定め、企業が求めるレベルを実感させた。（Power Point A4 5ページ以上、ターゲット、流通（販売場所）を示し、商品の認知、購買を高めるための「販売促進手段」を提案すること、そしてその理由を述べること、データによる根拠を示

●専門科目（必修） ●商品開発やマーケティング調査など、実践型の演習を実施

	<p>すこと、既存の菓子を参考とした場合は、その内容を盛り込むことなど)</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>演習は連携に基づく一連のプロセスの中で実施されているため、適宜、最も適した場所を選択して行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションは瑞穂市商工会に訪問（大会議室） ・学生による試食評価は、大学のカフェテリアを利用 ・地元のお祭りでの500人試食調査は現地ブースで実施 ・演習クラスごとのグループ検討は演習室や図書館にあるラーニングcommonsを利用 ・4つの演習クラスが集まる関連講義、プレゼンテーションでは、プロジェクターを備えた教室を利用
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>演習は連携に基づく一連のプロセスの中で実施されているため、各回の演習の流れ（全体像）を示すこととする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 商工会によるオリエンテーション（平成25年10月2日） 特産品開発経緯、概要、今後の進め方などの説明、課題についてオリエンテーションを受けた ② 学生による試食調査の実践（平成25年10月22日） 地元のお祭りでの試食調査のトレーニングとして学生同士が試食調査を実施し、その方法と調査票記入についてのポイントを体験的に学んだ ③ 地元のお祭りでの500人試食調査を実施（平成25年11月3日） お祭りに訪れた人をブースに呼び込み、500人に試食をお願いし、アンケートに回答してもらった ④ 調査集計結果の報告（平成25年11月12日） 調査データを集計し、その結果を商工会に報告した。その結果を商店主が共有し、商品改良に活用した ⑤ 販売促進提案に向けてのオリエンテーション（平成25年11月19日） 瑞穂市商工会からオリエンテーションを受けるとともに、地元のお祭りでの500人試食調査の結果について考察した ⑥ 提案の検討（平成25年11月26日） 販売促進の方法についての関連講義（冒頭30分）を行った後、演習クラスに分かれて提案の検討を行った (類似商品、他の地域の地元特産品の販促先進事例などをグループ検討) ⑦ プレゼンの作成（平成25年12月3日、12月10日、12月17日） 販売促進の内容案を提案書にまとめ、複数案を作成した演習クラスは、クラス内で発表を行い、提案をブラッシュアップした ⑧ プレゼンテーション、講評（平成25年12月24日） 消費者心理コースの4つの演習クラスによるプレゼンを実施（各10分）を行い、瑞穂市商工会、教員による評価発表、講評をいただいた
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションおよびプレゼンテーション用のパワーポイント ・アンケート集計用としてのExcel ・お祭りブースでのアンケート調査時に使用した調査記入ボード

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・岐阜市に隣接する瑞穂市の旧来の商店街は大きく衰退し、乗降客が多い東海道線穂積駅周辺にも、人を引きつけるような商品販売拠点はなく、魅力ある商品も乏しく、ほとんどの駅利用客は駅と自宅を往復するだけの通過点となっている。高齢化した生産者、活路を見出せぬまま低迷している製造・販売事業者では、市場に受け入れられる事業や商品の開発が進まず、顧客ニーズを的確に掴むマーケティングの発想に乏しいという課題があった。こうした地域の抱える課題を理解し、その解決方法を具体的な特産品開発に携わることで体験的に学修した。
- ・上記の取り組みの中で、各演習クラスのメンバーがグループで協議し、提案を生みていく過程で協調性と役割分担の重要性を身につけた。
- ・学外の社会人に対してプレゼンテーションを行ったり、協働でアンケート調査を実施したりして、コミュニケーション力を磨いた。
- ・試食調査実施に際して、アンケートの作成、集計表の作成、集計表の読み込み、提案へのデータ活用など、リサーチリテラシーを高めた。
- ・現実に行われている販売促進の方法を土産店やサービスエリアなどの売店などで自分の目で観察することを通じて学ぶことができた。
- ・整理した情報を元に、提案書にまとめるプロセスを体験した。そして、パワーポイントの使い方、提案書の書き方や工夫、実践的なプレゼン力を磨いた。

**学習成果の評価・測定
の方法**

- 以下の項目をもとに総合的に評価した。
- ① 学生試食調査、地元お祭りの500人試食調査などグループワークへの参画度、貢献度
 - ② 販売促進案の提案内容、プレゼンテーション評価
 - ・アイデアの新規性、進歩性
 - ・実現可能性
 - ・提案の効果度
 - ・データエビデンスの活用度
 - ・プレゼンテーションの表現力（わかりやすさ）
 - ・プレゼンテーションによる説得力

**本科目についての学生からの
評価**

- 振り返りアンケートにより寄せられた学生からのコメントは総じて、興味喚起、理解促進にプラスに寄与したことを示す結果であった。
- ・教室で学んだマーケティングや商品開発の知識を実践して行うことで、理解が深まった。
 - ・地域の特産品開発を通じて、地域の抱える課題が少しわかった気がする。
 - ・アンケートする際に、すべての回答者が丁寧に、漏れなく回答してくれるものでなく、フォローしながら回答してもらうことが大切だということがわかった。
 - ・企画提案を考えるとときに地域の実情がわかっていないピンボケな提案になってしまったり、大企業の戦略になってしまったりして、PR側の企業状況やメディア環境を知る必要があることをやってみて初めて実感した。

学生の学習のあり方や教授法

- ・マーケティングの理論はさまざまなケースを研究するところから生まれたものが多く、かつ実際のビジネスに活かせることが大切であることから、学生が

●専門科目（必修） ●商品開発やマーケティング調査など、実践型の演習を実施

の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

実践的なケースで現実を目の当たりにすることが重要であると考え。お膳立てされた現実にはそぐわないケーススタディでは、社会に出てマーケティングの仕事に就いたときにそのギャップに戸惑ってしまう。

・また、教員はどのような題材を学生に示しながら解説できるかが重要であり、学生の興味を喚起し、学習意欲を引き出すような事例を多く持つことこそ、マーケティングや商品開発を体験的に理解させるポイントであると考え。

・企業や商店との接点を学生のときから多く持つことは、社会人基礎力の向上に大いに役立つと実感している。



学生による評価を行っている授業

授業風景



地元のお祭りでの500人試食調査の風景



開発した柿スイーツ



商工会様と学生の検討会議

その他の特記事項

26年度には、瑞穂市商工会が地域内資金循環等新事業開発検討事業（中小企業庁補助事業）の支援を受け、販路開拓を進めるべく、学生が和洋菓子店と連携しながら、継続してプロジェクトを進めている。

基礎ゼミ III、IV

朝日大学

歯学部／歯学科

田沼順一教授、北井則行教授、その他

科目の位置づけ	歯学部では、講義を主体とする学習を主に行っているが、往々にして受動的教育となっており、学生の修学意欲の低下が目立つ。そのため、TBL (team-based learning : チーム基盤型学習) 方式での学習方法を習得させることで、講義主体の教育を能動的教育に転換させることを目的とする。また、複数教科の教員が担当し各学年で行われている基礎ゼミで TBL 方式での学習を行うことで、各教員の担当科目講義に共通の教育意識を反映させる。
受講（登録）学生数	各グループ 30～35 名
科目の到達目標	歯科医師として大切なコミュニケーション能力の向上と、自己学習の方法を学ぶ。
教育方法の特徴	TBL 方式での学習を通して、ある課題に対してグループにおいてコミュニケーションを図り、討論し、結論を導き出す作業を行うことから、自学自習の重要性とその手法を習得することができる。その結果、膨大な知識を習得して歯科医師となり、患者に対したとき、その知識をうまく応用し診査、診断、治療、経過観察ができ、そのことで社会に必要とされる歯科医師養成が可能になるという特徴を持っている。この TBL 方式と従来の講義を並行して行うことと、講義を担当する教員が TBL 方式での学習指導に携わることで、さらなる教育の質の向上に繋がると考えられる。
教室空間の特徴	基礎ゼミでは、全体での講義とグループでの作業、さらに、グループ間での討論ができるような空間が必要である。具体的には、1 テーブルに 6～8 名 (3～4 名が横並びでそれぞれが対面に) 着席できる大きな机、当然、その机を使い種々の作業が可能である必要性がある。そして、教壇があり全体講義が可能な教室となっている。 そのため、基礎ゼミでは、全ての学年で同じ教室を使う。
特定の回の授業の流れ・時間配分	① 前もって学生には次回の TBL で使用する予習資料を配付する。(1 週間前) ② IRAT (個人準備確認テスト) : 配付された予習資料から出題した IRAT を行う。(約 10 分) ③ GRAT (チームテスト) : チーム内で GRAT を行い、解答を作成する。(約 50 分) ④ GRAT の解答発表 : 解答用の札を使い、一問一問解答を出させ、各チームの解答を基礎ゼミ担当者は記録する。(約 20 分) ⑤ チーム間での GRAT 解答に対する根拠を発表する。(約 20 分) ⑥ 教員によるフィードバック : 一問一問教員から解答を発表し、根拠を説明す

●グループ研修●TBL (team-based learning : チーム基盤型学習) 方式での学習方法を習得させる

	<p>る。(約 20 分)</p> <p>⑦教員に対するアピール: 違った解答を出したチームから自分のチームの解答の妥当性を含めアピールさせる。(約 20 分)</p> <p>⑧最終課題を与えるための講義とその試験: 予習資料を基に再度アドバンスな内容の講義を行い、多肢選択問題を出題し採点する。(約 30 分)</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>①IRAT、GRAT 解答用紙 (Immediate Feedback –Assessment Technique; IF-AT : アイファット)</p> <p>特に IRAT、GRAT に使用するが即座に解答のフィードバックができ、間違っただけ減点方式をとる。</p> <p>②GRAT 解答のためのプラカード</p> <p>GRAT の解答を一斉にプラカードを使って示させることで、他グループの影響を受けないし訂正できない。その解答に対するアピールも、自ずとグループでの意見を尊重し発表されることになる。</p> <p>③ピア評価表</p> <p>個人の責任制の補強をするために欠かせない。「時間の厳守」、「予習」、「チーム貢献度」、「柔軟性」の 4 項目で、それぞれ、「優れている」、「やや良い」、「やや悪い」、「劣っている」の 4 段階評価を行い、最終成績の中で 30%用いる。</p> <p>同じグループのメンバーを客観的に評価する能力は、対人関係 (患者を含む) のを評価する洞察性に繋がるものである。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>①ある課題に対して理解を深める。</p> <p>②チームで討論することにより、知識の理解度の深まりを実感できる。</p> <p>③チーム内における自分の長所・短所を理解できる。</p> <p>④成績優秀な学生とチーム討論に参加することで成績不良な学生が学習の仕方、課題への取組みを習得する。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>最終成績は、</p> <p>①出席 50%</p> <p>②ピア評価 30%</p> <p>③最終課題試験成績 20%</p> <p>の配分で行う。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>現在の所、学生からのアンケート調査等を行っていないので不明である。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方 (教育哲</p>	<p>担当教員は、受動的学習方法と能動的学習方法の効率の差を理解し、能動的学習方法を引き出す手法を学ぶことができる。この事は、一般的な講義主体の教育における資料の作り方、講義の進め方に大きな影響を与えるもので、教育の質を向上させる事に繋がる。即ち、知りたい、学びたいと思う気持ちを持つ</p>

●グループ研修●TBL (team-based learning : チーム基盤型学習) 方式での学習方法を習得させる

学)

た学生には、講義内容がうまく伝えることができる。そのため、知りたい、学びたいという気持ちをどのようにして起こさせるかという教育手法を、このTBLから教員自体が学ぶことができると思う。

授業風景

(写真: ない場合は省略可)



IRAT を行っている風景



チーム間での討論風景

観る文学

大阪工業大学

情報科学部／全学科
奥野陽子、藤井研一

科目の位置づけ	<p>教養科目「視る自然科学」、基礎ゼミ（アニメーション制作）と同一の狙い（具体から抽象へ）を持つ科目であり、学び方の見直しを学習者に求める一連の科目の一つである。</p> <p>様々な分野の知識を獲得する上で言語表現理解は必須であり、活発な言語活動は思考、表現を深め主体的な学習を行なう上で必須のものと考えられる。しかしながら、大学までの教育において十分な言語表現理解が得られず、学習にも支障をきたす者も見受けられる。本授業はこの様な学習者のために新たに設けられ、言語表現によって、具体的な視覚イメージを形成することから初め、小説の作中人物等の他者の心象理解までを目指す。また、自らの内言を言語により表現することも試みさせる。</p>
受講（登録）学生数	60名
科目の到達目標	<p>1) 絵巻物の仕組みの理解、2) 視覚イメージから物語の創作、3) 言語表現から視覚イメージ形成、4) 言語表現から作者の視点を理解、5) 視覚イメージ及び言語表現における空間および時間変化の描写的確な読み取りを目標としている。さらに他者の心象の読み取りおよび自らの内言の言語表現の足がかりを気付くことも目指している。</p>
教育方法の特徴	<p>言語表現は本来抽象的なものであり、言語を用いて具体的な情景、多様な心象、様々な概念の様々なイメージ形成が出来ることが望まれる。しかし、近年、言語表現より築き上げられた概念体系の理解に限らず、作者により構築された小説世界を正しく読み取ることが不得手な学習者が多数見受けられる。このような問題は大学での学習にも影響を与える可能性がある。</p> <p>そこで、学習者が言語表現への関心呼び起こし、能動的に言語表現の読解作成に取り組めるように、学習者へ作品読解および読み取ったイメージの画像作成などを課し、言語表現のイメージが学習者の内面に形成されるように工夫した。このため、具体的なイメージ形成が容易な言語作品読解を繰り返し行なわせるなど、学習者がイメージ喚起可能となるよう内容を考えて授業を進めている。さらにより抽象度の高い内容を有する作品への関心呼び起こせ、積極的にイメージ形成を行なえるためには、どのようなことに注意すべきかを学習させることに注力した。</p>
教室空間の特徴	レイアウト可動式机により任意のレイアウトを取ることが出来る。学生の共同討議、共同作業に合わせレイアウトを変更して使用する。
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>二人の教員が担当しており、授業スタイル等は異なっているが、視覚イメージから言語表現形成へ、また言語表現から視覚イメージ形成を学習者自らの手により行わせる多数の実習を含む形で授業を進めている。</p> <p>前半7回では、絵巻物を紹介し、その視覚イメージの意味を当時の約束事を踏まえて説明し、時間の流れ、空間の移動をどの様に表現しているか、そして言語表現とどのように関係しているかを複数の絵巻物を用い、実際に考察させ、共同討議の後発表させるなどの形で学ばせた。</p> <p>後半7回では、言語表現から具体的な情景を読み取り、画像として再現すること。逆に視覚イメージを言語により表現することを学ぶ。この際、何処から描写しているかの視点、時間の流れに意識を割き、作者の意図を読み取る必要性を理解させた。この取り組みも教員によるプレゼンテーションソフトを用いた説明が4割、学習者の課題取り組みが6割程度で進めた。</p> <p>具体的な授業の流れとして、後半の初めでは、まず創作者の狙い、動機など</p>

●教養科目●学習者へ作品読解および読み取ったイメージの画像作成を課す

	<p>と表現の関係性を例を挙げて説明し、視点の重要性と描写の細部までの理解が必要との意識を喚起させた後、極短い推理小説を時間を決めて読ませ、文中の矛盾点の指摘とその根拠を文章にまとめさせた。</p> <p>この問題の場合、解答を得るために、短文の精読後、情景を画像で表現させたり、時系列の言語表現を行なわせたりして、短文中の矛盾点を見いだすという方法で進めた。ある問題では単なる室内の描写のみならず、天候など描写された情景を取り囲むすべてに注意を払うことが要求された。このような言語表現を読み解くために、学習者自身の経験を踏まえて考えさせ、改めて視覚イメージ化する訓練を行なったりもした。学習者が自ら与えられた言語表現を様々な形に変えて深く理解することを目指させた。このような試みを複数回繰り返した。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>タブレット PC(iPad)、無線 LAN 設置によりインターネット上の絵巻物のサイトなどを閲覧可能とした。 iPad 上で、長尺の絵巻物の鑑賞をタブレット固有のタップ操作などで容易に閲覧可能とするツールを使用した。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>視覚イメージを言語により表現すること、言語表現から視覚イメージを形成することを学び、自ら、言語表現および視覚イメージ形成に取り組むことを行なえるようになった。もちろん、総ての言語表現に対して十分な理解を得ることは出来ていないが、積極的に言語表現を読み理解意欲を植え付けることが出来、言語表現理解のための第一歩を踏み出すことが出来たと考えられる。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>各回、提出物ないしレポートを課す。これらの内容に応じて評価を行う。結論が一つに決定している短文の読解の場合、正しい論理的帰結を示せているかが判断基準となる。</p> <p>また創作においては、独自性、説得力ある物語性、破綻ない言語表現等を基準に評価している。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>「総合的に考えて、この授業を受講して良かったと思いますか？」という問いに五段階評価の四以上が八割を占めている。</p> <p>個別には、「とても面白かったです」、「もう少し表現する方をやりたかった」、「様々な絵巻物の話を聞いておもしろかった」、「プリントとスライドによる説明でわかりやすかった」、「絵と共に学べる点は良いと思った」、「物語の動画や説明がわかりやすい」、「新鮮な授業形態なので好奇心を持ちながら学習ができる」等の好意的な感想を多数得た。しかし一方でタブレットなどの使用上の不手際を指摘する声もあった。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)</p>	<p>小学校に始まる長い教育では教授内容は具体から抽象に向かい、段階を追って抽象度が高くなる。しかし「10才の壁」という言葉で端的に示されるように、国語において、抽象度の高い単語を習得する時期に、学習者の間の理解度が大きく別れる事実がある。この時期以降の教育においては、さらに抽象的内容が課せられるが、このような抽象的な思考が身に付かず大学へ入学する学習者もかなりの数になると思われる。このような学習者にさらに抽象度の高い知識を植え付けようとしても、砂上の楼閣と化す可能性が高く、また学習意欲を削ぐ結果となりかねない。</p> <p>そこで大阪工業大学情報科学部の初年度教育では再度、具体的な段階から初め、徐々に抽象度を上げる形で授業を進める方針も取り入れている。現在、異なる分野の複数の科目がこの方針の下に実施されている。自然科学系においては、具体性は実験という形で実行出来る。一方、言語表現においてこの「実験」に対応するものは明確ではないため、絵巻物を具体的な言語表現を象徴するものとして取り入れた本「観る文学」が新設された。</p> <p>また具体的言語表現の導入として、風景等の視覚イメージを言語により表現</p>

●教養科目●学習者へ作品読解および読み取ったイメージの画像作成を課す

した短文を読み取り、学習者の内部で言語表現を具体的な視覚イメージと結びつけることを課すことから初めた。その後、徐々に小説などの登場人物の心情などの高い抽象性を表す表現を学習者が理解し、自らの「内言」として理解可能となることをも目指した。逆に、自分の内言を言語により明瞭に表現することも試みさせた。これらより言語表現の可能性を考えさせ、自発的な言語表現に向き合えるように考えて授業を構築した。さらに効果を高めるため、ウィゴツキーの「発達の最近接領域」の考え方に従い、個人の結論を得た後に、複数人による共同討議の時間を設け、学生間での議論が互いの理解を深化させることも目指した。

この講義としての到達点としては、学習者が、言語表現における自らの不足に思い至り、その改善への努力に目覚めてもらうことにある。

授 業 風 景

通常の回では、教員の説明の後、個別に問題を考える時間を設ける。その後、学習者間の共同討議の時間を設け、グループとしての解答を得るようにして授業を進めた。

キャリアデザインⅢ

大手前大学

総合文化学部・メディア芸術学部・現代社会学部
専任教員全員

科目の位置づけ	<p>2 年次生対象 必修コア教育科目（総合科目）</p> <p>大手前大学は、“STUDY FOR LIFE（生涯にわたる、人生のための学び）”という建学の精神のもと、「リベラルアーツ型教育（幅広い教養の上に形成される専門性）」を推進している。</p> <p>その根幹に、学生の質保証の観点から「社会人基礎力（就業力）」を位置づけ、カリキュラム編成においては、専門知識・技術・能力の指標を「グランドデザイン」として体系化した。この理念を実現し、「問題解決力」を養うための PBL 型授業の必修コア科目として「キャリアデザインⅠ～Ⅱ」（1 年次）及び「キャリアデザインⅢ～Ⅳ」（2 年次）を設置・開講している。</p>
受講（登録）学生数	2014 年度 春学期 523 人
科目の到達目標	<p>本学の到達目標レベルは、知識レベル・能力レベルに大別されている。</p> <p>知識レベル</p> <ol style="list-style-type: none">1) 日本語文法、表記・表現について、正しく判断・理解することができる。2) Learning Commons 機能の活用：文献・情報検索ツールやレファレンスサービスを適切に活用することができる。3) 論文型レポート作成のための基礎知識を理解することができる。 <p>能力レベル（本学 C-PLATS^{®1)} 中 7 つの基礎コンピテンシーを設定）</p> <ol style="list-style-type: none">1) 論文型レポートのテーマと問いを設定する（論理的思考力、創造力）2) 文献・資料を収集・分析・精読する（論理的思考力、計画力、行動力）3) 問いやテーマについて、論理的に説明する（論理的思考力、プレゼンテーション）4) 他者の意見を聞き、分析する（分析力、コミュニケーション）5) 4,000 字以上の論文型レポートを作成し、抄録の概要を発表する（行動力・創造力、プレゼンテーション）
教育方法の特徴	<p>この授業では、PBL（Problem Based Learning）の実践として、毎回の授業ではテキスト等を予習し、課題を提出することを前提とする。</p> <ul style="list-style-type: none">・予習状況・内容理解度について、協同学習の技法のひとつである LTD(Learning Through Discussion)²⁾ の手法などを用いたペア・ワークやグループワークを行い、定着を図る。・4,000 字以上の論文型レポートを書くための方法と手順について、「読む」、「聞く」活動を基盤とした、系統的カリキュラムに基づいた演習授業を行う。・本学独自の C-PLAT に基づいた目標設定とふりかえりを行う。

●演習●PBLの実践。独自のC-PLATに基づいた目標設定とふりかえり

<p>教室空間の特徴</p>	<p>大ホールでの全体講義形式と、講義室（机・椅子が可動）演習の併用によって、協同学習の座席配置技法（ペアワーク・ラウンド形式）を活用している。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>以下の回において、本科目独自の展開を構成</p> <p>第1回合同クラス：オリエンテーションにおける学長講話：（約40分）</p> <p>第2回～3回合同クラス：LTD 演習（文章理解・情報共有・知識理解の深化と統合・課題の評価）</p> <p>第4回合同クラス：大学図書館職員による Learning Commons 機能の活用方法についてのガイダンス</p> <p>第5回～15回個別クラス：共通した本時の目標やテーマに基づく各担当教員独自の教授方法によるライティング演習と、グループ内ワーク，論文抄録についての全体口頭発表。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>教科書：大手前大学編『レポートの書き方』（2014）PC、プロジェクター、スクリーン、グループワーク用ワークシート、原稿用紙、el-Campus（大学ポータルサイト：ログインすることによって、大学から発信している情報の確認、授業内配布物のダウンロード、課題のアップロードなどが可能）・学習支援センターの活用によって、授業時間外学習も促進する。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>Academic writing skill の獲得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味・関心に基づいた論文型レポートのテーマと問いを設定し文章化できる。 ・テーマやアウトラインの根拠となる文献・資料を収集・分析・精読し、自分の伝えたい事柄について、論理的に説明・発表することができる。 ・他者の意見を聞き、それを基に自分の文章を推敲することができる。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>5段階到達水準による目標準拠評価による総括評価</p> <p>F 評価基準：D 評価水準に満たない（単位修得不可）</p> <p>D 評価基準（単位修得最低基準）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論述試験（第10回）を受験していること ・言語表現基礎課題（全3回）を提出していること ・PBL 課題1、2、3を提出していること ・EL 課題（全8回）を完了していること ・知識・能力レベルの総合的な到達水準が50%未満である <p>C 評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・D 評価基準を満たしていること ・PBL 課題をすべて提出していること ・知識・能力レベルの総合的な到達水準が50%以上70%未満である <p>B 評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・C 評価基準を満たしていること ・論文型レポート最終原稿が、「レポートの書き方」に準拠した適切な表記・文章で記述されていること ・論文型レポート最終原稿において、自分の考えを論理的に説明するための根拠が文献等で示されていること

●演習●PBL の実践。独自の C-PLAT に基づいた目標設定とふりかえり

	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・能力レベルの総合的な到達水準が 70%以上 90%未満である <p>A 評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・B 評価基準を満たしていること ・論文型レポート最終原稿において、明確なテーマ、問いの設定、章立てが示されていること ・論文型レポート最終原稿の内容に、論理的整合性があること ・論文型レポート最終原稿の内容に、自分なりの考えや主張、結論が明確に示されていること ・知識・能力レベルの総合的な到達水準が 90%以上である
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>本科目についての学生からの評価には、「文章をきちんと読み、自分で考えることの大切さがわかった」など、大学教育の本質についての肯定的理解や、「これまで 4,000 字もの文章を書いたことはなく、最初は到底できないと思っていたが、少しずつ課題を積み重ねると、書くことができるということがわかった」といった自己肯定的評価があった。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>本科目は 2 年次生対象 必修コア教育科目（総合科目）であることをふまえて、「予習（探求）→授業（LTD）→課題（定着）」といったサイクルを 15 回にわたって行う PBL 型授業である。このような教授法においては、予習の意義と方法、協同の精神（集団の仲間全員がわかること・高まることをメンバー全員の目標とする）についての理解を促す指導も必要となり、学生・教員によるグループダイナミックス的な学修効果をねらいとしている。その結果、本学の教育目的である「社会人基礎力（就業力）」を育成することができる考える。</p>
<p>授業風景</p>	<p>基本的には「導入：本時目標の全体確認」→「展開：個別活動および小集団による活動」→「まとめ：全体のまとめ」という展開であるが、担当教員の独創性によって柔軟な運用もなされている。展開時には、クラス内で闊達な話し合い活動が行われている。</p>
<p>その他の特記事項</p>	<p>大学の教育目的に基づき、大学全体で 2 年間にわたって取り組んでいる、学年共通のシラバスに基づく必修コア科目である。</p> <p>1) C-PLATS®: 「社会人基礎力」に必須の問題解決力のために必要とされる、本学が独自に考案した以下 10 の基礎コンピテンシー</p> <p>社会性基盤：①チームワーク、②社会的責任能力</p> <p>思考基盤：③創造力、④計画力、⑤論理的思考力、⑥分析力</p> <p>行動基盤：⑦コミュニケーション力、⑧プレゼンテーション力、⑨リーダーシップ、⑩行動力</p> <p>2) LTD：話し合い学習（W.F.Hill.1962/Rabow et al.1994）</p>

キャリアデザインⅣ

大手前大学

総合文化学部・メディア芸術学部・現代社会学部

専任教員全員

科目の位置づけ	2年次生対象 必修コア教育科目（総合科目）
受講（登録）学生数	2014年度 秋学期 468人
科目の到達目標	<p>本学の到達目標レベルは、知識レベル・能力レベルに大別されている。</p> <ul style="list-style-type: none">・知識レベル<ol style="list-style-type: none">1) キャリアデザインプレゼンテーションに取り組むための、情報・資料の収集方法を理解する。2) プレゼンテーションの際のマナー（発表と質疑応答の行い方）を習得する。3) 授業を通じ、自身の進路についての知識を得て、それを実現するには何が必要なのか認識する。4) 情報検索ツールやパワーポイントなどの発表提示ツールの適切な活用を習得する。・能力レベル（本学 C-PLATS 中9つの基礎コンピテンシーを設定）<ol style="list-style-type: none">1) 自分の進路をふまえ、今後の専門的な学修計画および就職活動について現実的な説明ができる（論理的思考力、計画力、創造力、プレゼンテーション）。2) 他者と情報・資料を共有することができる。社会時事に関する興味・関心を持ち、資料を収集・整理・分析・理解することができる（チームワーク力、分析力、行動力）。3) 批判的に他者の発表を聞くことができる（分析力、コミュニケーション、社会的責任）。
教育方法の特徴	<p>この授業では、15回の授業を3部構成とし、</p> <ul style="list-style-type: none">・第1部（1－4回）「キャリア・プランニング」を考える：大学生活を振り返り、今後の専門的な学修計画や就職活動計画、職業人としての自己イメージを形成する。・第2部（5－9回）「プレゼンテーション・マナー」を身につける：第1部で考えた「キャリア・プランニング」をプレゼンテーション資料にまとめて発表すること、発表への質疑応答を学ぶ。・第3部（10－15回）プレゼンテーション試験：第1・2部での学修の結実。自分の「キャリア・プランニング」の発表と質疑応答を行い、「コミュニケーション」としてのプレゼンテーションを実習する。さらに、社会人の「教育ボランティア」から、「キャリア・プランニング」についてコメント・アドバイスをいただき、実社会に出るにあたっての自分の将来計画の点検を行う。

●演習●キャリア・プランを考え、プレゼン・マナーを身につけ、社会人からアドバイスをもらう

<p>教室空間の特徴</p>	<p>40名程度の収容人員の講義室（机・椅子が可動）。プロジェクターおよびスクリーンが設備され、プレゼンテーション演習が可能。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>第10回～14回（プレゼンテーション試験）の例</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 導入：出欠確認、授業目標の確認 2) 展開：プレゼンテーション試験を行う。『キャリア・プランニング』についての発表5分、質疑応答5分、教育ボランティアとの質疑応答2分を1セットとし、4～5名の学生が、自分の「キャリア・プランニング」についての発表を行う。 3) 授業後課題：聞き手となった学生は、自分よりの質問・コメントを記す。発表をした学生は、他の学生・教育ボランティアとの質疑応答を基に、最終のプレゼンテーション資料を作成し、全学プレゼンテーションに備える。
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・テキスト：川口宏海／高村麻実（監） 『大手前大学キャリアデザインIV - 「キャリア・プランニング」のために』（大手前大学 2014） ・プレゼンテーション試験ではビデオ撮影を行い、学生の発表を映像として記録。
<p>学習成果 （学生は何ができるようになったのか）</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1) 学生が自身の「キャリア・プランニング」について深く考え、そのプロセスをふまえて発表資料の準備を行い、発表ができるようになる。 2) 他の学生の発表を批判的に聴き、質問・コメントを行うことができるようになるためのトレーニングも、カリキュラムや課題の中には含まれ、「話す」と「聴く姿勢」の両方の学習効果が得られる。
<p>学習成果の評価・測定の 方法</p>	<p>キャリアデザインプレゼンテーション試験の受験結果、課題の達成状況等、5段階（A～D・F）到達水準による目標準拠評価</p>
<p>本科目についての学生からの 評価</p>	<p>自分の将来について、より深く考える機会を持てたとのコメントが授業後の感想において寄せられた。</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の 果たす意味等に関する、担当 者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>本科目は2年次生対象 必修コア教育科目（総合科目）であることをふまえて、「予習（探求）→授業（LTD）→課題（定着）」といったサイクルを15回にわたって行うPBL型授業である。このような教授法においては、予習の意義と方法、学生・教員によるグループダイナミックス的な学修効果をねらいとしている。その結果、本学の教育目的である「社会人基礎力（就業力）」を育成することができると思う。</p>
<p>授業風景</p>	<p>基本的には「導入：本時目標の全体確認」→「展開：個別活動および小集団による活動」→「まとめ：全体のまとめ」という展開であるが、担当教員の独創性によって柔軟な運用もなされている。展開時には、クラス内で闊達な話し合い活動が行われている。</p>
<p>その他の特記事項</p>	<p>大学の教育目的に基づき、大学全体で2年間にわたって取り組んでいる、学年共通のシラバスに基づく必修コア科目である。</p>

事業開発演習

九州産業大学

経営学部産業経営学科

浦野倫平 聞間理 小野瀬拓 上西聡子 伊藤精男

科目の位置づけ	本科目は経営学部の専門科目として位置付けられている。また、1年次から4年次まで前後期にわたって学年ごとに科目が配当されている。これらの演習と関連科目を総称して「事業開発コース」と呼んでいる。プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践することを通じて、ビジネスマインド・思考力・コミュニケーション能力・行動力を養成し、低学年には経営学を学んでいく意味を、高学年には学んだ経営学の意味を体感させる。プロジェクトは学生のみで行うものから、大学外部の企業や地域団体、NPOなどと組んで行うものまで様々なものがある。2014年10月現在では、本演習の中で8つのプロジェクトが進行している。
受講（登録）学生数	83名（1年生38名 2年生23名 3年生11名 4年生11名）
科目の到達目標	経営学と実践的ビジネスマインド・思考力・コミュニケーション能力・行動力を養成する。低学年には経営学を学んでいく意味を、高学年には学んだ経営学の意味を体感させる。
教育方法の特徴	<p>（1）全ての学生たちには何らかのプロジェクトに取り組ませる。プロジェクトは、単独で行ってもチームを組んでも、受講者外の人たち（学内外問わず）とコラボレーションで進めてもよい。実現可能性がある限り、テーマに縛りはかけない。</p> <p>（2）プロジェクトを組むのは、異学年でも同学年でも構わない。</p> <p>（3）プロジェクトの期間に縛りは設けない。プロジェクトが立ち上がっても上手くいかず途中で解散することもできる。その場合には学生たちは新たなプロジェクトを立ち上げるか、既存の他のプロジェクトに参加するかを選ばねばならない。</p> <p>（4）教員は複数教員で対応する（平成26年度は5名）。教員は各プロジェクト全てを見るが、プロジェクトの学生たちが自分たちのテーマに応じて教員に自ら相談することを推奨している。プロジェクトに応じて、その分野のプロフェッショナルに応援を依頼する。</p> <p>（5）演習の時間は（A）演習登録者全員が参加する全体会・研修と（B）各プロジェクトごとの会議・活動に分かれている。</p>
教室空間の特徴	<p>基本的には、可動できる机・プロジェクターの利用できる通常の教室を使用している。</p> <p>プロジェクト会議の場合には、その教室の中でプロジェクトごとに机等を動かし最適な会議体制をとる。大きな黒板が前面に一つしかないので、必要な場合には移動式のホワイトボードなども持ち込めるようにしている。ポストイット</p>

●専門科目●プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践する

トや模造紙を活用した会議をするチームもある。大がかりなワークショップなどを行う場合には、100名以上が入る、学内のさらに大きな会議室などを借りて使うこともある。

2コマ連続での授業を行うので2コマ分のプログラムを紹介する。今回はプロジェクト別の会議を中心とした回の紹介をしたい。

演習前には、教員がその回のタイムテーブルを発表する。学生2名が輪番制で、その回の演習に必要な道具を準備する。教室に入ってきた学生は、自らの名札を受け取り席に座る。

【1コマ目（90分）の流れ（例）】

(1) 全体会（毎回平均40分程度）※学生2名が司会をして進めていく。

①黙想（心を静め、集中力を高める）

②初めのあいさつ練習（大きな声を出し、意識を呼び覚ます）

③クレド唱和（この授業の意義を全員で確認する）

④学生講話（輪番制（志望も可）で学生が全体に向けて話をする）

⑤教員講話（教員のいずれか一名が全体に向けて話をする）

⑥3分間コーチング（上級生と下級生がペアを組んで3分間のコーチング）

⑦お知らせ（コース・プロジェクトの活動などについての諸連絡）

⑧学外イベントに関するお知らせ（学外の講演会やコラボの機会などの情報提供）

(2) 企画プレゼンテーション（1案件につき15分程度）

プロジェクトチームからの希望があった場合、教員との事前調整の上で、活動報告や

企画提案のための時間をとる。

(3) プロジェクト会議（20分）

各教室に分かれ、プロジェクトごとに会議もしくは活動をする。各教員はプロジェクト

の求めに応じて特定のプロジェクトの会議に参加したり、相談にのる。

【2コマ目（90分）の流れ（例）】

(1) プロジェクト会議（70分）

引き続き、各教室に分かれ、プロジェクトごとに会議もしくは活動を行う。会議を切り上げて具体的活動や、学外の関係者との打ち合わせなどを行うチームもある。

(2) 全体会（20分）※学生が司会をして進める。

①3分間コーチング ②次回以降についての連絡

演習終了後には、必要に応じて各チームに分かれて会議・活動を継続するところもある。イベントや商品販売の場合には曜日・時間を変えて活動することが多い（多くの場合、教員も監督としてつきそう）。会議や演習で使った道具などは回収する。

個人ごとに、次回の演習までに「学びの振り返りコメント」を提出する。また、チームごとには、活動記録・会議録を提出する。

特定の回の授業の流れ・時間配
分

●専門科目●プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践する

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・名札：受講生相互に相手のことがわかるように所属プロジェクトと名前が書かれている。
- ・クレド：事業開発コースの理念についてまとめられている。毎回の演習で唱和する。これも学生によるプロジェクトの成果物である。
- ・移動式ホワイトボード：効率的にプロジェクト会議をするために利用する(任意)。
- ・Facebook ページ：受講生相互への連絡や情報提供に利用している。コース全体のページのほか、プロジェクトごとのグループページも作っている。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・プロジェクトの企画立案から実行、報告書まで一通り進めることができるようになる。
- ・チームマネジメントについて理論の理解を深め持論を持つことができる。上級生になれば後進の育成もマネジメントの一部として考え、捉えることができるようになる。
- ・自分にとって大事なこと・価値に意識的になり、それを他者に表明できるようになる。
- ・プロジェクトごとにみると狙いや活動内容が異なるので、学習成果は多岐にわたる。例えば、地域の商店街と組んで催事イベントで音楽フェスティバルを実行するプロジェクトでは、イベント企画運営やマーケティング、地域の方々やミュージシャンとの交渉方法などを学ぶことになる。農業プロジェクトでは、農業ビジネスのトレンドから作物の育て方・土の作り方・商品企画・製造・販売・マーケティング・会計処理などを学ぶことになる。

学習成果の評価・測定
の方法

個人とチームの2方面から評価する。個人としては、出欠情報のほか毎週プロジェクトの「振り返り」を提出(投稿)させている。また、期首・期末にコーチング・スキル調査を行って、コーチング・スキルの成長度合いを数値化して把握している。チームとしては、毎週プロジェクトの議事録を提出(投稿)させているほか、プロジェクトの開始の際には事業計画書を、イベント実施や商品販売などの後には活動報告書を提出させている。これらの成果に対する評価は各学年の演習担当教員全員で確認して合議の上、確定させている。4年間の最後には修了報告会として4年間を振り返ってのプレゼンテーションをさせている。

本科目についての学生からの
評価

授業評価アンケート 2013年度後期より

総合評価(5点) 1年生 4.74 2年生 4.75 3年生 4.57 4年生 5.00
全学平均 4.08

自己成長(5点) 1年生 4.74 2年生 4.80 3年生 4.86 4年生 5.00
全学平均 3.92

- ・生きていく上で役立つ、社会人基礎力やその他の精神が学べ、身につけられる。
- ・普通の授業とは一味違う経験ができる。経営学部らしい授業内容。
- ・自由だけれど、やらなきゃいけないことはたくさんあって、責任感とかそういうものを、フルに感じることができる授業だと思います。
- ・自分自身や出会い、人としても成長できた。挑戦できる環境がある。

●専門科目●プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践する

- ・学生自らが積極的に学べる環境が整っており、またその活動を先生方が全面サポートして下さる。
- ・人との関わりを大事にして、それをいかしたイベントなどを開いて、みんなが積極的に参加できる状況が沢山ある。
- ・社長やNPO 法人の方々をお招きしての講演がとてもためになる授業でした。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

(1) 内発的動機付け（自己決定感）が大事である。課題を与えてやらせるのではなく、自分でやると決めさせることによってこそ、活動に真剣に向き合うことができる。しかしながら、「何をしたいかわからない」という学生も一定数存在するし、情報収集能力にも限界があるため、教員から新ビジネス・社会起業事例、演習に寄せられる提案などは選択肢として与えている。しかし、基本は学生たちがそれを選ぶかであり、彼らが「自らの課題」として選択するまで待ちつづける姿勢を忘れてはならない。

(2) 振り返り（リフレクション）が大事である。すぐれた成果を出すプロジェクト活動であっても、ただではほとんど学習されない（学習を他の状況での応用された行為の再現と定義づけるならば）。そこで、できるだけ機会をとらえ、自らの体験にフォーカスさせる。経験を意味付け、教訓を引き出したのちには、それを外部に向けて語らせる。それを聞いた他者がどう感じるかまで受けると、振り返ったことは社会性を帯び、普遍性を高める。自らの体験から生まれた語りが他者に認められると、次の活動へのモチベーションとなる。

(3) ピア（受講生同士の）コーチングが大事である。学生同士での対話による学生の中で生まれる気づきの力は大きい。同じ教訓や考え方を伝えるのでも、教員よりも学生たちが尊敬する上級生さらに可能であるならば、学生たちが一目置く同級生が伝える方が響く。

(4) ダイバーシティ（多様性）を受け入れることが大事である。学生一人ひとりで学習態度は異なる。関心・価値観も異なる。学習の習熟度も異なる。これらの全ての学生で標準化しようとするのではなく、受け入れてそれらが統合する学び場の構築を目指す。多様なものに触れ、それを受け止めることは、新たな気づきへの可能性を高める。ダイバーシティを高めるために集団外部の人々と交流したりコラボレーションすることを奨励する。それによって、自分たちの「当たり前」が相対化されて演習という学び場の進化の可能性が開かれる。

(5) ロールモデルの存在が大事である。実在の学生が他の学生のロールモデルとなるようにすることが望ましい。彼らが存在することによって、教員が語らずとも、事業開発演習にという学び場の価値観をある程度体現させることができる。ロールモデルは単に「何をすべきか」を示すものではない。彼らがどのような困難に直面し、それをどう乗り越え（どう失敗し）、どう成長してきて、どこへ向かおうとしているか、というストーリーを伴ってはじめて学生にとっては参考になるロールモデルとなる。ロールモデルの存在を、彼らの語りをいかに引き出し、広めるかに注力しなければならない。

(6) セレモニー・マネジメントが重要である。ルールをつくっても、それを

●専門科目●プロジェクトを自ら考え、立ち上げて実践する

「破らないようにさせる」ことまでしかできず、同時に「最低限のことしかしない」消極的な行動を引き起こすリスクがある。彼らの行動を喚起するために、セレモニーを活動の場に埋め込む工夫が欠かせない。毎回のセレモニー（本演習では黙想やあいさつ練習、クレドの唱和）は、参加者の心を整え、一体感をつくりだす効果を持っている。また、一定期間の区切りでのセレモニー（振り返り会・修了報告会など）やシボルの付与（事業開発コースではバッジが用意され、一定の経験を積み、成果を出すつ付与される）は、ルールを設けるのとは異なる、より高い責任感を伴うロールモデルへの移行を促す。

（7）オープンネス（開示性）が大事である。内外部の関係者に演習は積極的に公開している。われわれの取り組みを参考に発展する取り組みが出てくることで、われわれの演習もよりよく進化する可能性を保つことができる。外部の関係者が見学にきて教員を中心に意見を交わしている姿をみせることは、学生たちに良い緊張感と、この演習がよりよく発展するために自由に意見をいうことができる場であることを学生たちに知らせる良い効果がある。また、定期的に、「事業開発演習全体会議」を演習時間内に設定し、学生たち同士で演習がどうあるべきかについて意見を交わさせ、そこで出てきたアイデアを反映させている。

授業風景



その他の特記事項

- ・いくつかのプロジェクトは、この事業開発演習とは経営学特講として別の授業としてスピアウトしたり（まちづくりや、本学の情報科学部との連携プロジェクトや、対話力を高めるなどのテーマ）、大学内の組織体制作りにも影響を与えた（女子学生支援室の設置など）。
- ・大学近隣の香椎商業地区のまちづくりプロジェクトが日経ビジネス BP 社主催の「西日本インカレ」で2010年度に「日経ビジネス特別賞」を受賞。
- ・学生証を利用した電子マネーシステム構築のプロジェクト（情報科学部との連携プロジェクト）が、2011年度の社会人基礎力グランプリ九州沖縄大会で準優秀賞。
- ・九州経済産業局による大学発ビジネスプランコンテストにて2008年度、2011年度に優秀賞を受賞。
- ・第6次産業を意識した農業プロジェクトが、2013年度の「ふくおか共助社会づくり表彰（県知事表彰）」を受賞。

臨床心理学基礎演習

京都文教大学

臨床心理学部／臨床心理学科（対人社会心理学コース）

川畑直人 森谷寛之 森崎美奈子

科目の位置づけ	<p>臨床心理学科の2回生の演習、いわゆる「2回生ゼミ」であり、2回生の主要科目である。</p> <p>3回生からはゼミにおいては卒業研究に向けて、学生個人個人の関心領域を発表させるため、この段階でのゼミは、教員の側から教えるべきことを教える貴重なチャンスである。なお、2回生のゼミは全体で12名の教員が担当しており、通常は各教員ごとに15名程度のクラスが編成されているが、対人社会心理学コースでは、3人の教員が合同でゼミを運営する形式となっている。</p>
受講（登録）学生数	39名
科目の到達目標	臨床心理学における対人援助技法の概略を体験を通して学ぶ。また、社会で活用できるコミュニケーションのスキルを習得する。
教育方法の特徴	<p>臨床心理学科対人社会心理学コースでは、臨床心理学が蓄積してきた対人関係に関する知識、ならびに対人援助の技術を習得し、それらを活かして、ビジネスをはじめとした実社会で活躍できる人材を育成することを目指している。臨床心理学が蓄積してきた対人関係に関する知識は、表面的に観察できる行動にとどまらず、その背後にある無意識の心の動きに関する深い洞察を含んでいる。また、カウンセリングをはじめとする対人援助技法は、対人場面のコミュニケーションを通して創造的な生き方を生み出す方法として、広く社会に受け入れられ、定着してきている。対人社会心理学は、こうした臨床心理学の伝統を継承し、経営、営業、人材開発、メンタルヘルスといった切り口から、社会や組織における個人の自己実現をとらえ、その達成を可能にする方法を迫っている。</p> <p>この授業は、臨床心理学の中で発展したさまざまな対人援助技術を学生に教えると同時に、その教育のプロセスの中で、ディスカッションとプレゼンテーションをふんだんに行わせ、コミュニケーションとチームワークの力を身につけさせるようにデザインされている。対人援助技術のワークは、スモールステップで系統的に学べるなど、学生にも吸収しやすい形にアレンジしている。3名の教員は交代で、メイン講師を務め、残りの教員は学生のグループに部分参加するなどして、個別の事象を拾っていくようにしている。</p> <p>基本的には、毎回の授業の開始時にその授業で扱う内容を簡単に講義し、その後、6～7人の小グループに分かれてワークを行う。ワークを行う際は、多くの場合フィッシュボウル形式をとり、中でワークに参加する者と、それを観察する者とは分かれ、ワーク参加者は、観察者の視点を取り入れて自らの視野を広げると同時に、観察者はワーク参加者の言動を観察する力を磨く。一区切りがつくたびに、グループごとに体験を振り返り、話し合う時間を設ける。話</p>

●演習●ディスカッションとプレゼンテーションをふんだんに行わせる

し合われた内容は、グループメンバーの一人によって、全体に向けて報告される。その際には、教員と報告者との間のやりとりを活発に行い、学生の報告内容を活用しながら、ワークで学ぶべき点について解説を行う。時間の最後には、各自、体験を振り返り、振り返りシート（A4・1枚）にその内容を記述し、提出する。

教室空間の特徴

40名前後の学生を収容する広さがあり、比較的正方形に近い形状であるため、全体が教壇と遠くない距離にある。机と椅子は可動式で、動かしやすく、ワークに応じて迅速に配置を変えることができる。パソコンとプロジェクターは常設で、パワーポイントなどの投影が気軽に行える。

特定の回の授業の流れ・時間配分

第7回（実施日：2014年5月21日）

タイトル：リーダーシップ、フォロアーシップ、コーチング①

授業の目的

グループで話し合いをまとめる司会と、話し合いに参加するメンバーを、リーダーとフォロアーという観点からとらえ、有効なリーダーシップ、フォロアーシップを育むためにコーチングを導入する。

授業の流れ・時間配分

1. 授業の全体の目的と、進め方の基本を説明する。（10分）

①リーダーシップとフォロアーシップについて

②コーチングについて

2. 自分のリーダーシップスタイルを知る（10分）

4類型リーダー質問紙を用いて、各メンバーのスタイルを測定。採点をした後、2人で1組をつくり、互いの結果をシェアリングする。話し合う中で、はじめに、どちらがコーチになるかを決める。

3. 3グループに分かれての討論とコーチングのワーク

①グループ分け（5分）

コーチとメンバーの2人1組を6（～7）組合わせて1グループ（12人～14人）を作る。クラス全体では3グループができる。各グループ内で、討論を行うメンバー6（～7）人とメンバーを補助するコーチ6（～7）人に分かれる。

②事前の話し合い（5分）

討論を行う前に、コーチとメンバーのペアで事前の話し合いを行う。コーチからは次のように問いかける。「これからあなたは企画会議での話し合いに参加するわけですが、参加に当たってどのような目標を持っていますか。リーダー機能の中で、自分の不得意な分野を伸ばすとしたらどの点ですか。それが苦手であると感じるところはどこなところですか。その原因はなんだと感じていますか。」コーチはメンバーがどのような課題意識を持っているか聞き取る。その背景は何か、困難の本質は何かを考えながら援助の方向をイメージする。

③討論（5分）

各グループでメンバー（6～7人）は椅子だけで円陣になり討論を行う。テ

●演習●ディスカッションとプレゼンテーションをふんだんに行わせる

ーマ「学園祭で実行する催し物について」。残りのコーチ（6～7人）は円陣を外側から囲み、討論の進み具合を観察する。

④コーチング（5分）

討論を休止し、コーチとメンバーのペアで話し合う。コーチは、メンバーが討論の中でどのような体験をしていたのか、どのように感じていたのかに注意深く耳を傾け、必要に応じて自分の考えを伝える。

⑤コーチングの進捗の全体へのフィードバック（適宜の時間配分）

時間が許す範囲で④⑤を繰り返すが、ところどころで、コーチングの進捗を何人かに全体に向けて報告してもらい、それに対して教員がコーチングのコツを教えるようにする。はじめのうち、学生はコーチなので指導しなければならないと意気込むが、実際メンバーにとって役に立つのは、メンバーに寄り添って傾聴することであるということを経験させることが重要である。

⑥体験の振り返りと全体へのフィードバック（10分）

授業の最後に各グループ全体で体験を振り返り、コーチングの難しさ、うまくいった体験、コーチを受ける側の体験などについて、感想を述べ合う。出てきた感想を最後に全体にフィードバックさせ、教員の側からコメントを加える。

4. ふりかえりシートへの記入（5分）

授業を通して印象に残ったことをメモ程度でも良いので、振り返りシートに記入する。

授業で特に使用しているツールとその活用法

基本的にワークは円陣を組んで話し合うというものが多く、特別なツールを使う必要はない。最終授業では、グループごとにパワーポイントで企画をプレゼンするという回を設けたため、準備と本番に向けて、パソコンとプロジェクターは使用した。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

話し合う、発表するといった授業中にごく普通になされる行為に対して自覚的になり、何を目的にした話し合いか、どのように話し合うべきか、といった目的意識や方法に対する意識が高まった。それとともに、他者の発言に対する関心や興味が増し、発言を聞くとそれに対して自分が言えることを考え始めるという習慣が、萌芽的とはいえ見られるようになった。授業内容も当然のことながら、カウンセリングやコーチングといった聞く技法に比重が置かれていたため、授業の内容面と形式面の両面から聞くことの重要性が体得されたようである。

学習成果の評価・測定の方法

学習成果の評価・測定は、授業内での発言、ワークへの取り組み方についての観察、ならびに振り返りシートへの記入から行った。

●演習●ディスカッションとプレゼンテーションをふんだんに行わせる

本科目についての学生からの 評価

各回ごとの振り返りシートを読むと、体験を通して、学生なりに掴み取るものがあつたようである。例えば先のコーチングの回では、ある学生は、「初めてコーチをした時には、何をアドバイスすればよいのかわからず、あまり良いコーチングができなかったが、コーチされる側を体験してみると、良いアドバイスをしようと気負わずに、ただ話を聞くだけでも重要な役割が果たせることに気が付きました。」と、コーチされる体験がコーチするためのヒントになることを指摘している。また別の学生は、「企業などの集団活動で、今回のようなコーチがいればよいですが、普通はないと思います。そういった場合、自分で、今回のような流れを作っていくためにトレーニングが必要だと思いました。」と実社会での活用に考えをめぐらせている。

全般的には、行ったワークに対して好評が得られていたが、科目の意図を深く理解するに至ったかは疑問であった。その点でいうと、この科目に続く、後期の演習授業において、文献を用いた理論の学習を行うなかで、「前期の授業の意味がやっと理解できた」と話す学生がおり、おそらく単独の科目というよりは、つながりをもった一連のカリキュラムの中で、より真の評価が得られるのではないかと考えている。

学生の学習のあり方や教授法の 果たす意味等に関する、担当 者の基本的な考え方（教育哲 学）

大学教育における成果として重要なのは、知識の獲得以上に、視点の獲得であると考えます。つまり、事象を観察し、理解し、考えるための視点であり、それは汎用性を持っている。一定の視点を獲得させるためには、座学ではなく、体験と体験の吟味を繰り返す体験学習が必要である。臨床心理学において開発されてきた心理療法の諸技法や、組織開発、人間関係研究で用いられてきた研修技法は、そうした視点獲得のための教授法として有用であると考えている。

授 業 風 景



WLI A～F

金城学院大学

国際情報学部／国際情報学科

長谷川元洋・時岡新・岩崎公弥子他、専任教員 15 名程度

科目の位置づけ

国際情報学部では、身につけた知識を人生の場で活かせる「強さ」、まわりを気づかい、協働できる「優しさ」を兼ね備えた女性リーダーシップの育成を目指している。より具体的には、女性リーダーシップのための汎用的能力（チームワーク、コミュニケーション力、問題解決力、個人的・社会的責任、異文化（他者）理解力、情報リテラシー）の育成である。本学部のディプロマ・ポリシーでは、「知識・技能」「思考力・実践力」「コミュニケーション力」の3領域で学生が習得すべきこれらの能力が定められている。このような力を集中的に育成するのが WLI 科目群である。WLI は A から F まであり、1 年次開講の A（前期）と B（後期）は必修科目でそれ以外は選択科目としている。

受講（登録）学生数

WLI A（183 名）、B（184 名）、C（25 名）、D（10 名）、E（25 名）、F（13 名）
*H. 26 年度

科目の到達目標

WLI の教育目標は、女性リーダーシップのための汎用的能力の育成であり、組織の中で自分らしい能力を発揮する方法を身につけながら、一人ひとりが実社会で担うべき役割、果たすべき使命を見つけることである。具体的な目標は次の通りである。

WLI A：学び方の基礎・基本を身につける

WLI B：省察から自らの課題を確認し、解決する

WLI C：学内の問題を取り上げ、チームで学習する能力やリーダーシップを養う

WLI D：学外の問題を取り上げ、チームで学習する能力やリーダーシップを養う

WLI E：講演会の企画・開催を通じて、企画力や実行力、また、リーダーシップを養う

WLI F：学生だけで行う活動を通じて、リーダーシップをさらに伸ばす

教育方法の特徴

教育方法として3つ、4つ目にこれらを実現するための運営方法を列挙する。

①学生同士の学び合いを促進させる

WLI は、少人数のアクティブラーニング形式の授業である。グループ学習を中心に仲間同士で課題に取り組んでおり、WLI C、D（2 年生以上）の受講生が WLI A、B（1 年生）の授業サポートを数回行ったたり、2 年生の発表を1 年生が聞いたりする等、異学年の学生が交流する場を設定している。これらの学び合いにより、学生は、自ら積極的に学ぶ力、他者と協力して学ぶ力を身につけることができる。

②大学の e-learning 環境を積極的に活用

本学部の全学生は入学時にノートパソコンを購入している。そのため、WLI

●専門科目●学生同士の学び合い、eラーニングの活用、質問会議を中核とした学習

では、予習・復習教材の提供、課題の提出、学生の自己評価、他己評価、議論等を e-learning 環境を用いて実施している。これにより、自学自習が円滑になり、学びのプロセスが可視化され、学生の習熟度を高めることができる。

③質問会議を中核としたアクションラーニングの実践

質問中心の会議を行って問題を多角的に検討することで問題の原因の分析と解決策の検討を行い、それを実行に移すことを繰り返して、チームと個人の能力を高めながら、問題を解決、改善していくアクションラーニングを実践している。

④教育方法の検討を行う WLI 委員会の設置

WLI は、専任の教員が担当している。特に、A と B は、少人数に分かれたクラスが統一した内容、教材、評価項目に従って学修が実施されるよう、専任教員 6 名からなる WLI 委員会を作り、そこで、シラバスや教材の作成、e-learning 環境の整備を行っている。

教室空間の特徴

WLI は、各科目によって授業内容が異なるものの、全体として下記の特徴がみられる。

- ①可動式の机の教室で授業を実施している。授業の目的に応じて、机をコの字型に配置したり、グループ毎に島を作るなど、レイアウトが自由に変更できる部屋を利用している。
- ②WLI の教材の大部分がデジタル化されていることから、プロジェクターが備わっている教室、あるいは、学部が所有するプロジェクターが投影できる教室となっている。
- ③本学にあるラーニング commons のプレゼンテーションエリアは、オープンスペースであることから、学んできた事を発表する良い場となっている。そのため、授業の内容に応じて、ラーニング commons を活用している。

特定の回の授業の流れ・時間配分

WLI の授業では、ユニークな試みを数多く行っている。今回は、そのなかで、WLI C (2年生) を取り上げ、①WLI A (1年生) のサポート、②教員への授業改善の提案を紹介する。

<①授業サポート>

第 2 回 WLI A 「情報機器の操作」の授業サポートと観察

第 3 回 WLI A 「インターネットによる情報収集」の授業サポートと観察

WLI A で情報リテラシーを学修する際に、WLI C の学生が、授業サポートを行う。そして、教師がどのように授業を行ったか、また、学生がどこに迷い、何を理解したのか観察データを記録する。この観察データの記録は続く②の試みのなかで活かされる。

<②教員への授業改善の提案>

第 10 回-01(昼休み) WLI 委員会の教員へのプレゼンテーション(30分)

第 11 回 教員からの指摘事項についての検討と改善提案資料の改訂

第 10 回-02(昼休み) WLI 委員会の教員へのプレゼンテーション(30分)

第 12 回 教員からの指摘事項についての検討と改善提案資料の改訂

第 13 回 WLI A での指導内容の検討、必要な資料の検討

第 14 回 指導資料の作成とプレゼンテーションの準備

●専門科目●学生同士の学び合い、eラーニングの活用、質問会議を中核とした学習

第10回-03(昼休み) WLI委員会の教員へのプレゼンテーション(30分)
WLI Cの学生は、授業サポートするなかで、授業そのものへの課題をみつけ、「授業改善」のプレゼンテーションを教員に行っている。

e-learning 環境として Moodle、Manaba、Google Apps を活用している。
WLI では、Moodle を使って各コースの授業内容の提示、教材の配布、課題提出等を行い、Google Apps のドライブ機能を使って、グループワーク時の情報共有、

授業で特に使用しているツールとその活用法



Moodle (WLI B のコース)



Google ドライブ (WLI D の情報共有)

WLI では、どの授業においても、授業終了後に学生に振り返りを行っている。学生は WLI のアクティビティを通じて、様々な力を修得したように感じる。振り返りをもとに学修成果の一部を下記5点にまとめる。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・情報を収集し、まとめ、論理的に組み立てることができるようになった。
- ・人前でプレゼンテーションする力、表現する力がついた。
- ・質問力をつけ、相手の意見を聞く事ができるようになった。
- ・発言する力をつけることができた。
- ・リーダーシップとは何か、チームをまとめ問題解決するにはどのような力が必要か、自分がグループのなかでどのような役割を担うべきか考えることができるようになった。

WLI A では課題レポート、WLI B ではプレゼンテーション、WLI C、D ではグループワーク、WLI E ではリーダーシップ力、WLI F はプロジェクト実行力等、各々学習成果の評価項目は異なる。そのため、各々の評価項目に適した、学修の総合評価を実施している。

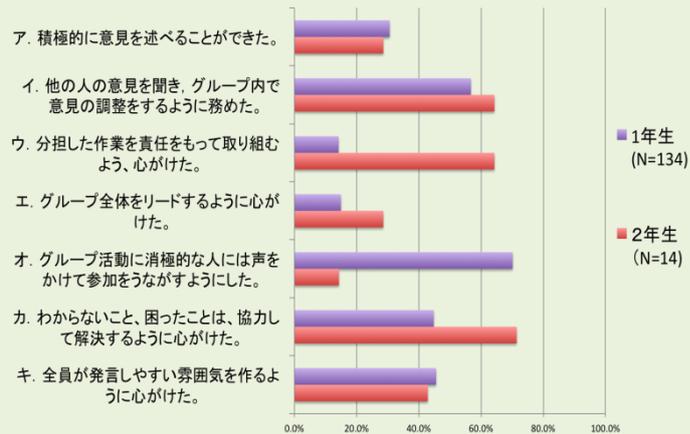
学習成果の評価・測定の方法

WLI C~F の授業では、プロジェクト型の学習の評価として SBI (Situation Behavior Impact) 評価を導入している。これは、グループワークやプロジェクトにおいて、自分や他の学生がグループの中でどのような役割を担い、どのような貢献ができたかについて自己評価と相互評価を行う。SBI 評価を実施することにより、フリーライダーを軽減させたり、作業分担を公平に見直す動きがメンバー内で起きたりする等、グループ内の各学生の役割を一人一人が、自分個人とグループ全体の両方の視点から考えることができる。

本科目についての学生からの評価

評価について2点を紹介する。
①グループ学修について
グループ学習について受講生がどのように取り組んでいるか、WLI B (1年生) と WLI D (2年生) に対して複数回答で聞いたところ、下記の結果に

なった。



1年生はメンバーとどのように関わったらよいかを学び（声かけ、雰囲気づくり）、2年生はそれをベースにグループが目標に向かってどのように進むべきか（協力体制づくり、責任について）に取り組んでいる事が分かる。

②WLI A～F の積み上げ式の授業について

WLI の下位クラスで学んだ経験やスキルが上位クラスで活かされる必要がある。WLI C の受講生に「WLI C で学んだことは WLI D の学習に役立ったと思いますか？」と5段階評価で尋ねたところ「とてもそう思う」が42.9%、「そう思う」が57.1%となった。この結果から、今までの学びが活かされたカリキュラムになっていることが分かる。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

本学は女子大学であることから、女子教育のあり方について、議論を重ねてきた。建学から長らくは幅広い教養を備えた女性の育成、1990年代後半からは専門的な知識を持つ職業人としての女性の育成という形で、絶えず教育の質を高めてきた。そして、現在、2005年に定めた教育スローガン「強く、優しく。」のもと、社会やコミュニティ、家庭で活躍する女性の育成を目指している。

女性リーダーシップの育成を目的としたWLIは、まさに、人材輩出に関する伝統的使命と、女性の活用という現在の喫緊の要請に応えるものであり、本学の教育改革の方向性に合致したものである。くわえて、「教員から学生へ」の知識の一方的伝達に終始し、学生が得た知識を活用する機会がきわめて限定されている従来型授業の転換をはかるものである。

このような、社会で活躍する女性の育成や学びの姿勢の転換は、1つ、2つの授業で実施すれば到達するものでは決してない。初年次から卒業時までの学びと経験を積み重ねることで修得するものである。そのため、WLIは、1年生のみで終わるのではなく、4年間を通じて学ぶ事できるよう、A～Fまで計6科目設置している。また、全ての授業において、アクティブラーニングを導入し、学生の主体的な学びを通じて、高いリーダーシップ力（協調型リーダーシップ）の育成を目指している。

学んだ知識を活用し、社会を創る仕事をする。そのような女性を育てていきたいと考える。

●専門科目●学生同士の学び合い、eラーニングの活用、質問会議を中核とした学習

授業風景



WLI では、学生が主体的に授業を行う



教育委員会等外部機関へのプレゼンテーション

基礎演習Ⅱ

金城大学

医療健康学部（理学療法学科、作業療法学科）

渡辺 豊明、巽 雅子、永井 将太、犬丸 敏康、山本 拓哉

科目の位置づけ	初年次教育を担う基礎教養科目 基礎演習Ⅰ（前期授業）を修得後の科目 「医療・健康及び社会福祉を担う総合力と旺盛な意欲、職場の即戦力につながる社会人の基礎、そして社会で幅広く活躍する積極性を身につけ、福祉の心を持ったエキスパートとして卒業生を社会に輩出すること」が教育目標となっている。これらの基礎を築く教養科目である。
受講（登録）学生数	105人
科目の到達目標	○基礎演習Ⅰ※で得られた知識・技能の基礎的な部分の応用ができる。 ※基礎演習Ⅰの到達目標 ・医療人に必要なコミュニケーション能力の基礎を修得できる。 ・レポート作成やプレゼンテーションの基礎を修得できる。 ○グループディスカッションにより自らの気づきを促進し、積極的な発言や意見の集約ができる。 ○ループリックを使って学生自身がレポートの自己評価ができる。
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none">・100人を超える大人数の講義においてグループによる協同学修を促進している。・1年生と関わりの少ない医療健康学部在籍する教員が講義を行うことで、早くから教員の特性を知ることによって学生と教員の距離が縮まる。・協同学習により、一人では気づかないところに気づくことができ、学ぶ意欲が促進される。・毎回グループを変更することで、学科をまたぎ多くの学生と触れ合うことができ、コミュニケーション能力が高まる。・レポート作成に学生がループリックを活用することで、到達目標が明確になる。・授業の最後に、ミニツペーパーに感想や質問内容を記載することで、学生の状況を把握することができ、その回に応じた学生指導が可能となる。
教室空間の特徴	収容人員：150人程度 3人掛けテーブル（可動式） 横4列 縦10列の中講義室（特別な工夫はない）
	<全体の流れ> 1回-3回 講義聴講（60分）+グループディスカッション（30分） 課題：レポートA 41枚

特定の回の授業の流れ・時間配分

- ・ 1年生に関わりの少ない教員が、自分が専門とする分野を中心に、学生に知ってほしいことについて講義（毎回、教員は変わる）。
- ・ グループディスカッションのグループは毎回ランダムに設定される。
- ・ グループディスカッション時は、必ず自己紹介を実施し、司会と書記を決め進行する。
- ・ グループディスカッションでは、講義の振り返りにより各人の気づきを促し、その後グループ内で調べてみたいことについてタイトルを決定する（ラスト10分ぐらい）。
- ・ 各自で参考図書を探し、ループリックをもとにレポートを作成（時間外学修）。
- ・ 基礎演習担当教員5人がファシリテーターとして、各グループの様子を見ながら適時声かけ、学生と触れ合う。

4回目

これまでの授業やレポート作成の良いところ、改善すべきところの振り返りを実施。

学生間で教員に採点されたレポートを共有し、実際に学生間で採点を行う。

この流れを3回繰り返す。

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・ グループディスカッション（協同学修）：最大6人のグループ
- ・ 机上に設置できるホワイトボード17セット
（マーカーは入学時に個人購入、イレイサーはティッシュを使用。本学では大学のラウンジ、食堂、AL教室などにホワイトボードが設置されている。）
- ・ レポート作成用ループリック：到達目標の明確化、複数教員が採点しても統一性がある。内容は、レポートの形式など3項目、内容で2項目、各3点～0点の4段階。
- ・ ミニツペーパー：学生が感じた感想、質問などをタイムリーに把握する。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・ 医療健康学部の多くの学生と触れあい仲間をつくることができた。
- ・ グループディスカッションにより、コミュニケーション能力の向上と活発な意見を言えるようになった。
- ・ レポートを計10回作成することで、有効な図書館の活用法を知り、作成速度の向上と必要最低限のレポートを作成することができた。
- ・ 協同学修の重要性を知ることができた。

※学生の感想やアンケートをもとに記載

学習成果の評価・測定の方法

- ・ 講義毎のミニツペーパーによる感想
- ・ ループリック合計得点の推移。
- ・ 授業評価アンケート。

●教養科目●100人を超える大人数の講義においてグループによる協同学修

本科目についての学生からの
評価

- ・ 講義については、色々な分野の話聞くことができ、将来の参考になった。
- ・ 協同学修について、多くの人と触れあい、自分の意見にないことを知ることができた。
- ・ レポート作成については、作成回数が多く他の科目の課題と重なることがあり負担を感じたが、基本的な書き方などがよく理解できた。
- ・ ルーブリックについて、教員間で採点にばらつきがあったことは改善の必要性があるが、6割以上で参考になったとの意見が認められた。

※学生のアンケートで多かった意見をもとに記載

学生の学習のあり方や教授法の
果たす意味等に関する、担当
者の基本的な考え方（教育哲
学）

高校から大学に入学し、学びのスタイルが変化する。多くの学生と交流する機会が増える。そのため、大学における初年次教育が大切だと強く思う。

大学に必要な知識を詰め込んでも、多くの学生は興味を抱かない。特に勉学やコミュニケーション能力の低い学生は孤立し、大学での勉学意欲が低下する。学ぶことの楽しさ、必要性を伝える工夫が必要である。

授業についても、90分の講義を常に集中することは難しい。

教員が汗をかいて、授業準備や計画をし、学生目線で授業を組み立てることが大切である。

教員が熱心であれば、学生は何らかの興味をもつ。

1人からの質問は、学生間で共有できるように伝え、共有の財産にすることが必要である。

特に医療従事者を目指す学生にとって、協同学修は重要であると思われる。

1人ではなく、共に学び成長する。

本学の建学の精神である「遊学の精神の涵養」

何事にとらわれることなく、自由に広く世の中を見聞し、人格を高め磨いてほしいと考える。

授 業 風 景



講義の様子（教室の様子）

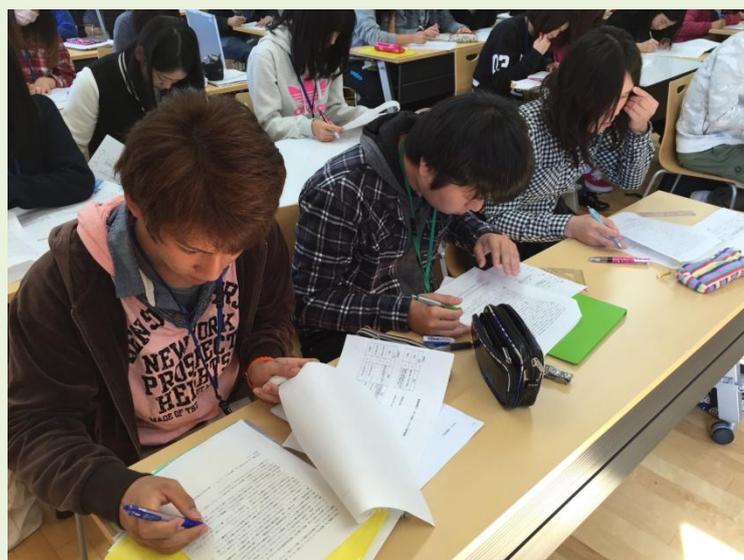
●教養科目●100人を超える大人数の講義においてグループによる協同学修



グループにより、授業の振り返りの意見を述べている様子



グループディスカッションの様子（ホワイトボードを使用）



学生間におけるレポートの採点とコメント（ルーブリックを使用して）

キャリアアップ講座 I (企業研究)

神戸学院大学

経済学部
林 隆一

科目の位置づけ	学生のキャリアアップのための講座であり、進路選択の方法について講義を行う。企業分析の基本手法、理論を理解し、企業研究を行う選択科目である。
受講（登録）学生数	14名（2013年度、2014年度とも同じ）
科目の到達目標	<p>（1）まず、働くことの意義と役割をイメージし、「良い」企業とは何かを考える。</p> <p>（2）その上で、企業の基本的な分析手法を学び、受講生は自ら興味を持つ企業を各自選び、応用する。</p> <p>（3）これらを踏まえ、さらに深く企業の実像を考えるきっかけを作る。</p>
教育方法の特徴	・講義の前半（1～7回）で、各学生は、企業分析の基本的スタンス・方法を学ぶテキスト内容や解釈を自分なりに発表し、講義の後半（8～15回）で、自ら選んだ企業（もしくは業界）の分析に応用するプレゼンテーションを行う。学生は、講義全体で最低2回のプレゼンテーションに加え、他の学生のプレゼンテーションに対して、毎回1回以上の質問もしくは意見を義務付ける。なお、定期試験や出席は行わない。
教室空間の特徴	・可動式キャスター付き1人用の机で発表者を囲む形で、発表者の学生の話聞き、質疑応答やディスカッションを行う。 ・ホワイトボードとともに、タッチパネル付きの大型ディスプレイが使用可能で、学生は自由にプレゼンテーションを行う。
特定の回の授業の流れ・時間配分	・1回の講義（90分）で概ね学生2人のプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションを行う学生は、レジュメ（A4、形式は問わない）の全員配布を義務付けた上で、1人15分程度の発表を行う。その上で、他の学生10名強が、1人ずつ、質問もしくは意見・感想のコメントを行う。最後に、教師が用意した資料を使用しながら、間違いや違う見方などを指摘し、概ね40分強で1人の発表を終了する。 ・講義の前半（1～7回）の発表では、学生が読んだ以下の本の内容を中心に発表を行った。（1）『いまさら入門 バフェット—金融危機に負けない投資法（講談社プラスアルファ文庫）』三原 淳雄（著）/講談社で、世界有数の投資家の企業の評価方法を学び、（2）『働き方—「なぜ働くのか」「いかに働くのか」』稲盛和夫（著）/三笠書房で、日本を代表する経営者の考え方を学び、（3）『「やりたい仕事」病（日経プレミアシリーズ）』榎本 博明（著）、日本経済新聞出版社などで、心理学の視点も含め働くことの意味を学んだ。

●専門科目●企業分析の基本手法、理論を理解し、企業研究を行う

	<ul style="list-style-type: none">・講義の後半(8~15回)の発表では、それぞれの学生が自分で選んだ企業(ソフトバンク、7&I、サントリー、スターバックス、ワタミ、ドトール他、カルビー、グリコ、ゲオ、三洋電機、SMC、川崎重工、学情、帝国ホテルなど)を発表した(財務数値の定量分析と企業経営等の定性分析の両方を行うことを意識したため、財務数値の入手が比較的容易な上場企業が比較的多くなった)。
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<ul style="list-style-type: none">・講義の後半では、学生に前週に発表企業名を報告させ、事前にその企業の資料を用意する。プレゼンテーションを行う学生、質問をする学生の間違った認識、狭い認識を、事前に用意した資料を見ることで、気付きを促す。・毎回、コメントカードを全学生に配布し、回収する。コメントカードには、自分のコメントの内容の他に、気付いたことや発表できなかった質問内容、プレゼンテーションを行った学生へのアドバイスなどなんでも記入を促した。次週の講義の最初に、有意義なコメント(直接本人に言いにくいなど)は匿名で、全員にコメント内容を報告するようにした。
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ul style="list-style-type: none">・最初は、学生の質問内容も画一的で、質問もたどたどしかったが、毎回毎回、質問しているうちに、他の学生の視点や質問内容を参考にして、ユニークな質問や自分の意見を堂々と言えるようになった。・プレゼンテーションに関しても、他の学生の良いところを取り入れながら、自分のオリジナリティ(差別化)を行う意識が高まった。・企業に関して、経営者の立場、投資家の立場(評価)、採用担当者の立場などを理解しながら、学生同士の考えの違いをお互いに学び合い、自分の考えを理解することができた。
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ul style="list-style-type: none">・学生のプレゼンテーション最低2回(講義の前半で企業分析や仕事の基本的スタンスを学ぶテキストや本の内容と自分なりの意見を発表し、講義の後半で自ら選んだ企業の分析に応用した)の評価60%、他の学生の発表に関するコメントおよびディスカッション内容40%で評価した。定期試験は実施しなかった。
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<ul style="list-style-type: none">・2014 授業改善アンケートでは、「受講して、(略)知識・興味を増すことができた」の項目で、「4.全くそう思う」64%、「3.そう思う」27%、「2.そう思わない、1.まったく思わない、0.わからない」9%、当講義平均1.5(学部平均1.0)、「この科目を受講して、良かった」の項目で、「4.全くそう思う」73%、「3.そう思う」27%、「2.そう思わない、1.まったく思わない、0.わからない」0%、当講義平均1.7(学部平均1.1)。・この講義の最後に「当講義が終わってしまうので寂しい」との意見があったように、学生同士がお互いの発表を楽しみに出席率が高まっていった。また、講義の評価だけでなく、学生からのフィードバックとして、「早く社会に出て、働くのが楽しみになった」等の学生の考え方の変化も見られた。

●専門科目●企業分析の基本手法、理論を理解し、企業研究を行う

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育学）

- ・受講者各人の自主的・積極的な提案を歓迎し、最初は間違いや異なった意見も許容し、基本的には加点主義で評価することを告知する。
- ・その上で学生の発表に対して、他の学生が自分なりの考え方や意見を促す。企業を発表する際には、明らかに間違った点（財務数値、競合や製品に関する事実）は最後に教員が訂正する。それにより、「事実」として事前に調べることができることは、きっちりと調べることで、逆に、自分なりの「価値判断」が自由に発言できると考える。

授業風景

講義の発表内容は前半・後半ともに学生が自ら選んだテーマを発表した。講義の前半（1～7回）では、例えば、企業分析の基本的スタンス・方法を学ぶテキストを選んだ学生は、バフェット氏（企業分析に基づく投資だけで、数万円の元手から約50年で約1億倍の約5兆円の資産を築いた世界4位の資産家）の成長企業を見つける分析方法（企業ファイナンス論の基本的な枠組みの実務応用例）を学生なりにまとめ、発表した。教員は実際に民間企業に勤務し、企業アナリストとして多くの業種の企業を担当・分析するとともに、資産運用会社で運用にも携わってきたので、その経験に基づき、実際の日本企業への応用方法を実際の企業で説明し、講義の後半（8～15回）での学生の選んだ企業の発表の参考例を示した。

・また、実際の経営者のテキストを選んだ学生は、稲盛氏（京セラを創業し、KDDIをゼロから作り、全く異業種である破綻した日本航空（JAL）の再建を無償で成し遂げた日本を代表する経営者）の他利の心やアメーバ経営（稲盛氏の経営手法）の基本的な考え方を学生なりにまとめ、発表した。それを受け（京セラと直接関係のない）300社を超える企業（経営者）がアメーバ経営を導入している中から事例を教員が説明した。

・講義の後半（8～15回）では、学生はそれぞれ自分の選んだ企業に関してプレゼンテーションを行い、同様な流れで、他の学生が質疑応答し、最後に教員が補足した。発表企業には、バイト先や近親者の勤務先もあり、部分的に詳しく知っている場合がある一方で、企業の全体像を理解するケースが少なく、プレゼンテーションを行う学生自身でも企業を全体像として把握することで、新たな発見をするケースが多かった。また、発表が進むにつれて、競合に近い企業や全く違う業界の企業など、自分の選んだ企業を基軸として、類似点や相違点など意識することで、より深い理解に至るケースが多かった。

都市生活演習Ⅵ

神戸松蔭女子学院大学

人間科学部 生活学科 都市生活専攻
青谷 実知代

科目の位置づけ	<p>生活学科都市生活専攻の人材養成の目的は、都市化された社会における生活をさまざまな視点から研究することにより、人間らしい質の高い生活を創造・提案できる人材を養成することである。その目的達成のため、本科目では都市生活を複合的に理解するための知識の修得、さらには生活問題等を把握・検討するための方法と技術の修得を目指す。</p> <p>以下の4つのことを総合的に取り組み、人とモノ、消費の問題に目をむける。</p> <ul style="list-style-type: none">①生活の中でもモノと人の関係を捉える②様々な手法の調査を通して消費者行動を把握し、生活・消費の実態を把握する。(情報収集力の技術を高める)③マーケティングの知識を身に付け、商品を開発する力(企画・立案)をつける。④プレゼンテーションを通して伝える力を身につける。
受講(登録)学生数	17名
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">①商品企画・立案の方法を学び、実践することができる②マーケティングの方法論をどのように使っていくのかを理解することができる③データを読み取り、商品企画につなげることができる
教育方法の特徴	<p>女子大生が<u>発見し(気付いた)、面白いと感じたことをより魅力的かつ具体的なものへと創造しながら、地域の観光振興を企画(例えば旅行商品や地元の素材を活かしたお土産開発)することが目的である。</u></p> <p>その上で教育方法の特徴は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none">①<u>現場を知る(現状把握を徹底する)</u> 現場の取材を入念に行う。旅行商品作りの場合は、現地に入り、地元の人との交流を欠かさず行い、地域のニーズを探ることが目的である。地域の文化(食文化)や伝統芸能・伝統工芸など様々なことに触れ、学生たちも普段の生活との違いに気が付く。インターネットでは得られない情報を自ら得て、創造したアイデアの裏付け根拠として丁寧に分析する。②<u>グループワーク → チーム力の形成</u> 必要な連絡事項のみ SNS の利用を認めているが、それ以外のやりとりは一切求めず、必ずお互いに顔を合わせながら意見交換をする。他人の意見に批判的意見を出しながらアイデアをチームで深めていくこと。更にチームで活動するために、1人1人の役割分担が、プロジェクトを取り組む上で重要なことだと気が付く。③<u>プレゼンテーション → 伝えることの大切さを学ぶ</u>

●必修の専門教育科目 ●地域での交流、グループワーク、プレゼンテーションを通じた商品企画等の実践

誰に対してアイデアを伝えるのか明確にした上で、話し方、見せ方の工夫を重ねる。学生同士はもちろんのこと、企業の方々にも多く見ていただき、今の学生たちに必要な力を（またこれから身につけたら良い力）教えていただく。思い描いた内容だけでなく、相手にわかってもらうように伝える事の難しさが理解できる。

教室空間の特徴

- ① BIG PAD を使用し、資料を見せながら電子黒板に書き込み等が出来る。
 - ② 稼動式机 (42 卓)、椅子 42 脚用意。その時々に応じた様々なスタイルでのグループワークが可能。
 - ③ 床にはコンセプトが 21 個用意されているため、全員パソコンに向かうことが可能。
 - ④ リモートカメラ録画システムがあるため、プレゼンテーション等の振り返り (反省会) が瞬時に行える。
 - ⑤ テープレコーダーや DVD デッキも用意されている。
- 以上の点から、アクティブラーニングが実施しやすい教室である。

特定の回の授業の流れ・時間配分

	第 17 回 グループディスカッション	第 29 回 最終プレゼンテーション
授業の流れ	(1)前回のフィードバック (2)本日の作業内容の確認 →テーマの確認 (3)仮説の検討 (4)ワールド・カフェ方式でディスカッション (3 回繰り返す) (5)現状把握とまとめ	(1)前回の振り返り (これまでの) (2)発表(15 分)と質疑応答 →3 回分 (3)投票 (4)総まとめ
時間配分	【10 分】 フィードバック 【20 分】 ワールドカフェ 1 →リーダーだけ残る 【20 分】 ワールドカフェ 2 →リーダーの学生が中心となって再度グループ討論を行う 【20 分】 ワールドカフェ 3 →これまでのグループ討論も含めてまとめに入る 【10 分】 現状把握と課題抽出	【10 分】 前回のフィードバック 【15 分】 A グループ発表 【5 分】 質疑応答 【15 分】 B グループ発表 【5 分】 質疑応答 【15 分】 C グループ発表 【5 分】 質疑応答 【20 分】 レポート作成

以上が、授業の流れと時間配分である。

<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>①BIG PAD の活用 →プレゼンテーション時には必ず使用している。また資料などを配布し、黒板場で書き込みをするなどわかりやすい説明を心がけている</p> <p>②統計ソフト SPSS での調査分析 →調査・分析には欠かせないツールである。調査期間を終えてデータを入力し、その後の分析結果から、企画のアイデアを具体化することもしばしばある。</p> <p>③稼動式機でのディスカッション →グループによっては好きなように形を変えてディスカッションを行っている。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>詳細は以下のとおりである。</p> <p>目的1：大学生が旅をし、地域の人々と交流する中で（異文化交流）、今までにない観光素材（お土産開発も含めた）を①発見し、②創造し、③発信することを目的とする。【観光庁の課題に対応】学生ならではの視点で、面白さや楽しさを具体的に形にすることは簡単ではない。どのような壁を乗り越え、力を身につけたのかを同時に見ることができる。</p> <p>→考え抜く力、前に踏み出す力、チーム力などが鍛えられていた。さらに、地域の人や企業の方と自らコミュニケーションをとる努力をしていた。</p> <p>目的2：経験による実践教育の充実（学生にとっての学びの成長）【産学連携課題に対応】普段の学びの場から飛び出し、環境を変え、地元の方々との交流を通じた中で創造性が育まれることを期待する。</p> <p>→旅行商品や他地域のお土産作り（岩手県遠野市）を実現した。</p> <p>目的3：文化（伝統文化）への意識向上。日本固有の文化と伝統固有の文化の発見【社会的問題への対応】。伝統や文化を若い学生たちがどのように受け止めるのか、継承問題のあり方も学ぶ</p> <p>→普段関心の薄かった地元文化についても興味を抱けるようになった。さらに卒業論文のテーマにする学生も増えてきた。</p> <p>3年生の演習を通してこれまでさまざまな地域を訪問し、地元の方と交流をしながら地域固有の価値（地域の魅力も含めた）を学生の視点から発掘（発見）し、それをもとにお土産開発や観光商品開発などに取り組んできた。実際に、数々のものが取り上げられたが、商品開発に至るまでのプロセスをどのように取り組んだのか現状を報告し、今後の課題を考えていく。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>①アイデア出しやグループディスカッション（40%）</p> <p>②レポート（30%）</p> <p>③プレゼン発表などの総合評価（30%）</p> <p>→考え抜く力やグループで行う力、前に踏み出していく力がどれほどついたのか上記3つの内容を中心にそれぞれ10段階で評価している。</p>

●必修の専門教育科目●地域での交流、グループワーク、プレゼンテーションを通じた商品企画等の実践

本科目についての学生からの
評価

- ①考え抜く力がついたことを自覚する学生が増加した。
- ②チームで作業することの難しさと楽しさを味わい、社会に出てから即戦力として企画に携わりたいという目標を見つけた学生が増加した。
- ③モノと人との関係について興味がわいたという学生が増えた
- ④消費者の行動に関心を持ち、その後、卒業論文のテーマにする学生が多い
- ⑤調査を分析する力を今後もつけていかなければならないという感じる学生が多い

学生の学習のあり方や教授法の
果たす意味等に関する、担
当者の基本的な考え方（教育
哲学）

学生の主体性を活かした授業展開を目指している。同時に、社会へ出た際に即戦力として働ける力（マナーも含めて）を実践しながら身につけてもらっている。

インターネットで情報を収集し、それだけで満足を得る学生は多い。しかし、それでは本当に良いモノが生み出せないことを受講生は気づいている。世の中の動きをしっかりと眺めつつ、社会環境の変化に目を向け、その上でモノ作りが生きてくる意味を理解することが必要である。

また、学内だけの授業ではなく、地域の地場産業経営者や大手企業の方々と交流する中で、大人とのコミュニケーションが自然に取れるようになった。会話を重ね、自らの足で情報を得る努力が必要である。

学生が主体的に動ける授業工夫を重ねていきたい。

授業風景



●必修の専門教育科目●地域での交流、グループワーク、プレゼンテーションを通じた商品企画等の実践



その他の特記事項

学内だけでなく、学外にも頻繁に出て（例えば地方（熊本や鹿児島）や企業等を訪問）プレゼンテーションなどを実施している。

社会調査演習

尚絅学院大学

総合人間科学部／現代社会学科

内田龍史／杉座秀親

科目の位置づけ	本学科は、社会諸科学を幅広く学ぶことで、「現代社会」の実態を多角的に分析する能力を身につけた人財を輩出することを目指している。そのために、社会調査の知識や技術を用いて、社会事象等をとらえる能力を有する「社会調査士」資格過程を設けている。本科目は、本学科の専門科目であるとともに、「社会調査士」資格過程のG科目「社会調査の実習を中心とする科目」として位置づけられている。
受講（登録）学生数	19名
科目の到達目標	現代社会学科で学ぶ学生にとって、「現代社会」の実態を社会調査によって把握し、分析する能力を身に付けることは不可欠である。本科目は、データに基づく実態把握、問題の指摘、問題解決のための提言などの社会調査の一連の手順を、実査を通じて学び、社会調査に求められるスキルを習得することを目的としている。
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none">・本学の所在地である名取市をフィールドとし、①名取市民を対象にした住民意識調査、②被災住民への支援を伴うアクション・リサーチを実施した。ともに、「東日本大震災からの復興と地域活性」のために、学生が企画立案、実査や事業の運営を担う、PBLの手法を用いている。・①名取市民を対象にした住民意識調査は、東日本大震災後の2011年度から継続的に実施している。被災から2年半以上経過した後の、地域住民の震災に対する意識や生活の状況、さらに、名取市の地域活性に向けた手がかりを得るために実施した量的調査である。市民2,000人を対象とし、調査の企画・調査票の製本・袋詰め作業・ポスティング作業・回収票の入力・データ作成・クリーニング作業を経て、過去の調査データとの比較を重視しつつ、データ分析を行った。分析した内容は報告書にまとめ、学生が記名レポートを執筆している。・②被災住民への支援を伴うアクション・リサーチは、明治大学商学部「特別テーマ実践科目」とのコラボレーションにより、2012年度から「名取・旅おこし講」という団体を立ち上げ、本科目受講学生と明治大学生が共同で、震災による被害の大きかった名取・閑上地区への旅を作り、地域活性化をめざす調査活動を実施している。具体的には、名取・閑上の魅力について、仮設住宅住民の方々へのインタビューを企画・実施し、結果を報告書にまとめている。さらに、名取市商工会・閑上さいかい市場・仮設住宅・名取市役所など関係者の方々の協力を得て、被災の現状を学ぶとともに、調査によって把握した閑上地域の魅力を多くの方に実感していただくために、1泊2日のモデルツアーを企画・実施した。・授業の進め方は、複数のグループを編成したうえで、各々に役割を割り当て

●専門科目●住民意識調査や被災住民への支援を伴うアクション・リサーチを実施

	<p>る形で展開する。最初に、当日の授業以降来週までに行うべきミッションを提示し、全体で審議したあとはすべての回でグループワークを実施する。調査活動は各グループで取り組んでいる。土日・祝日も含め、授業時間外での調査活動ならびに「旅おこし」活動も本科目の特徴である。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none">・授業の冒頭は通常の教室（机・椅子ともに可動式、グループでの話し合いが可能となる。授業風景①～③を参照）で行い、当日の授業以降来週までに行うべきミッションを提示した後は、コンピュータ室（授業風景④を参照）、演習室（20人未満の教室）を複数確保し、ミッションの内容、グループ活動の進捗状況にあわせて、自由に教室を移動することができる。・情報収集・調査企画書の作成・調査票の集計作業・報告書の作成などはコンピュータ室（授業風景④を参照）を活用している。・グループワーク中、教員は適宜各教室を巡回し、アドバイスをを行う。
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>通年で、90分授業を2コマ（金曜4限・5限）続けて実施している。通常の流れは以下のとおりである。ここでは、2013年前期第9回授業で、<u>旅おこし活動を実施するために仮設住宅住民の方々と私たち学生との信頼関係を得るためにはどのような活動が必要か</u>、その企画を検討した回を事例として示す。</p> <ol style="list-style-type: none">1：学生が作成した前回授業の議事録を確認し、先週の授業以降当日の授業までに実施された企画立案・実施・運営作業、調査活動等について、何がどのように進んだのか、グループあるいは担当者から実施事項を報告させ、全体での共有をはかる。なお、前回のミッションが調査活動などであった場合は、パワーポイントを用いて報告させる。60分程度。2：教員が、当日の授業以降来週の授業までに各グループあるいは個人が行うべきミッションを提示する。<u>この回では、「旅おこし活動を実施するために仮設住宅住民の方々と私たち学生との信頼関係を得るためにはどのような活動が必要か」企画を考えることであった。</u>ここで提示されたミッションについて、修正が必要であれば全体で審議し、確定させる。30分程度。ここまでで1コマ目終了。3：時間制限のもと、担当各グループあるいは担当個人による作業を実施する。<u>この回では、各グループにわかれて、仮設住宅住民の方々と私たち学生との信頼関係を得るための企画を検討させた。</u>その際、教室を移動して、コンピュータ室で情報収集したり、演習室などで議論を行っても良い。50分程度。4：作業終了予定時刻に最初に集合する教室に戻り、各グループあるいは担当個人によって進められた作業を報告し、内容を共有、全体で議論する。<u>この回では、各グループで話し合った企画内容が報告され、全体で審議し、問題点を検討した。</u>40分程度。2コマ目終了。5：ここまでの流れについて、毎回各グループに議事録作成を割り当てている。前述のとおり、本科目は金曜日の授業であるため、担当学生が月曜日までにメーリングリストに議事録を掲載し、討議内容・ミッションの共有をはかる。積み残された課題は次週の授業までに取り組み、次週報告する。<u>この回では、次週までに各グループで企画書を完成させ、次週の最初に報告、内容を再度検討することとなった。</u>

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・メーリングリストを作成し、教員からの指示、学生どうしの連絡、議事録の共有などを行った。
- ・クラウドコンピューティングを用い、教員・学生間で、企画書・分析原稿・入力データ・先行研究・写真など、各種データの共有を行った。
- ・これら手法により、明治大学の学生とも情報・データ等の共有が可能となっている。
- ・教室に備え付けられている大型モニター・スクリーンを用い、調査活動等において進捗があるなど、ことあるごとにパワーポイントでの報告を行わせており、プレゼンテーション能力の向上をはかった。

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・関上の文化を把握するためのインタビュー調査企画の立案・調査項目の確定・アポイントメント・インタビューの実施・パワーポイントでの報告による情報の共有・調査報告書の作成など、質的社会調査スキルを身に付けることができた。
- ・名取市民の被災と復興に関する現状を把握するための量的調査企画の立案・調査項目の確定・調査票の作成・データ入力・クリーニング作業・分析・パワーポイントでの報告による情報の共有・調査報告書の作成など、量的社会調査スキルを身に付けることができた。
- ・報告書はホームページでの公開を前提としているため、教員が徹底的に校正作業を行っており、書き直しを指示する過程で文章力が向上したと考えられる。
- ・実際に調査活動を行うことは、見知らぬ地域の「おとな」と触れあうことでもある。同世代とのつきあいが多いために「度胸がつく」経験であり、就職活動を含めた社会参加へとつながるきっかけとなっている。
- ・東日本大震災をテーマとする調査活動により、学生は必然的に東日本大震災と向きあうことになる。震災を含めた社会の現実と向きあうことは、他方で自己を見つめる体験にもなる。このような自己を振り返る作業により、現実の社会のなかで自分に何ができるか、社会参加へのモチベーションの向上につながっている。
- ・徹底したグループワークを実施することにより、作業を進める過程で、グループ内で時にぶつかりあいなながらも、助け合いによる仲間意識が生まれ、授業時間外でも良好な友人関係が形成された。
- ・課題を多く与えることにより、課題をクリアするために学生同士が授業時間外に自主的に集会を開き、積極的に協力して取り組むなど、課題に自主的に取り組む姿勢が見られるようになった。

学習成果の評価・測定の方法

本実習は、グループワークを通年にわたって実施することから、単位認定の評価は、出席状況・各グループでの取り組み状況、報告書作成、個別レポートを総合的に評価している。

学習の成果は、毎回の授業の感想・自身の課題の進捗状況を書かせるミニツッペーパーの内容、プレゼンテーションならびに報告書レポートの完成度で把握できるほか、「授業改善のための学生アンケート」などでも把握している。

本科目についての学生からの評価

本学全体で実施している「授業改善のための学生アンケート」による本科目の評価結果からは、総合的な評価については、5点満点で75.0%が5点、25.0%が4点と、3点以下はいなかった。平均点を換算すると4.75点となり、極めて高い評価となっている。

学生の感想の代表的なものは以下のとおりである。

- ・「色々な人々と出会い、話をすることによって自分の視点が広がった」
- ・「はじめは協力性があまりなかったメンバーがだんだん仲良くなる事で物事がいくらかスムーズに進むことができるようになった。協力の大切さを学んだ」
- ・「たくさんの新しい友人ができ、話し合いをすることが以前より苦にならなくなった」
- ・「沢山の方にお話を伺ったことで、閑上の人たちが自分たちの文化を好んでいること、閑上という町を活性させていきたいと感じているということを知ることができた」
- ・「もっと現場に出て様々なことを吸収していきたい」

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

・科学技術の発達により、情報収集が容易になったとはいえ、社会の現実が現場にあることに変わりはない。少し勇気を出して、「現場」に出てさまざまな人と出会って欲しい。そうすれば、表面的な情報収集で、知ったつもりになっている自分の浅はかさを実感することになる。そのうえで、知らないことを知る喜びを実感して欲しい。

・調査実習は、教員自身が調査活動を面白い（興味深い）と思えているかどうか、学生が調査活動を面白いと思えるかどうかの鍵となる。教員が面白くないと思っていることは、学生も面白いとは思わないだろう。

・PBLは、教員ができるだけ学生に口出しせずに、学生に任せきれるかどうかも重要である。学生は現場経験が少ないため、あれこれと指示をしてしまいがちになるが、我慢強く見守る姿勢も必要である。授業である限り現実にはありえないが、教員がいなくても、主体性・積極性を発揮する学生のみで成立する授業が理想と考える。

授業風景



①パワーポイントを用いた発表。

●専門科目●住民意識調査や被災住民への支援を伴うアクション・リサーチを実施



②各班で話し合った意見を報告、黒板に書き出し、全体で討議。



③各グループにわかれての話し合い。



④パソコンを使っての情報収集。



⑤被災地域のフィールドワーク。

その他の特記事項

本科目で作成した調査報告書は、総合人間科学部現代社会学科ホームページ (<http://www.shokei.jp/faculty/university/society/>) にて全文公開している。

自然科学入門

女子栄養大学

栄養学部

山内喜昭・立屋敷哲・木村雅子(実践栄養学科のみ)

科目の位置づけ	本学の DP「幅広い教養教育を基礎に、「食」、「人々の心身の健康」、「健康を維持増進する」、及び「食文化」の各領域に関する幅広い知識と技術を教授研究し、知的・道徳的・応用的能力を養うことによって、食を通して疾病を予防し、人々の健康を保持・増進することに貢献できる有能な専門家を養成し、もって我が国の文化の高揚と社会の発展に寄与することを目的とする。」のうち、基礎となる「教養」を担当。科学技術の著しい変化に対応できるだけの「現実を正しく理解する力」をつけるとともに、自ら学ぼうとする意欲を湧き立たせた上で、専門科目の学びに進む。そういった意味での「基礎・教養」を担当。
受講（登録）学生数	平成 26 年度 実践栄養学科 116 名 保健栄養学科 90 名 食文化栄養学科 58 名
科目の到達目標	身近な物質である「水」に疑問をもち、調べていくことで、理科・科学を身近に感じ、苦手意識を克服し、大学における学び方をも身につける。
教育方法の特徴	<p>学期前半は、担当教員が、水の特徴について、物理、化学、生物の側面からの授業を行い、授業の後半は、「水」についての学生による調査・発表とした。発表内容は、発表者が「水」に関わっていると考えればそれで良いとした。発表は、10 分間（1 人の場合は 5 分）で、レジュメ A4 用紙 1 枚用意することを発表の条件とした（印刷は教員が担当）。それ以外、パワーポイントを使う、実験のデモを見せる等は、発表者の自由に任せた。発表 1 件あたりの人数に制限はつけていないが、過去 10 名を超えたグループの中から、調査の関わり具合が低く、その結果、成績も悪かった学生が出たことを、第 1 回授業で伝えている。</p> <p>学生発表の授業時には、発表者以外の学生は発表内容のメモをとり、プレゼンテーション評価シートに従って発表を評価し、また質問・コメントを記入した。これらの質問・コメントは、発表ごとに教員が全てをコピーして、翌日に発表者に渡した。</p> <p>発表者には、その場での学生からの質問にも可能な限り返答させた。返答の仕方・内容についても、返答の後に、必要に応じて教員がアドバイスを加えた。</p> <p>教員は、各発表に対して、必ず質問・コメントした。特に、自然科学の方法論、「仮説と実証」から見て問題がある場合などでは、クリティカル・シンキングの実行を促した。</p> <p>学期末に提出するレポートでは、発表に対する質問・コメントに出来るだけ答えることを課した。このことにより、発表者は、他者の視点からの批評・意</p>

●教養科目●前半は授業を行い、後半は学生による調査・発表

見をもとに、自らの調査・発表内容をまとめ直す作業が必要となった。さらに、自然科学入門の授業に対する評価（自分にとって自然科学入門とはなんだったか）も報告させている。

幸い、水のもつ特異性、身近な水の多様性が様々なテーマを生み出し、発表者だけでなく、受講者側の好奇心をも引き出して、「自然科学入門」として授業が成立している。

教室空間の特徴

教卓のパソコン画面を投影できるプロジェクターがある普通の教室。パソコンを使った学生の発表は問題なくおこなうことができるが、教卓で学生が実験のデモをおこなう場合、学生達は席を離れて、教卓の近くに集まって見る必要がある。

特定の回の授業の流れ・時間配分

第8回授業「調べる。疑似科学とクリティカル・シンキング」は、第7回授業に課した宿題『水の結晶』についてインターネット検索（情報収集）して、参考 URL リスト 10 個を作ること。上記リストの中から、特に意見が大きく異なる2つ（2種類）の URL を選び、それぞれを簡単に要約すること。さらに、「自分の意見も加えること。」の答え合わせから始めている。Course Power 上のレポート教材への提出率も高かった旨をコメントし、水に言葉をかけると、結晶の形がその言葉に影響されるという「水からの伝言」と、まったく逆の立場からの「水からの伝言」を信じないでくださいの2つが要約の対象になっていれば正解であること、第7回資料から「レポートの主眼は、調査した事実や人々の意見を、自分の目的にしたがって、配列・連結して『資料に語らせる』ことにある。」を引用し、この宿題がレポート作成の第一歩であること等を解説した。（以上、20分程度）

その後、疑似科学やクリティカル・シンキングの説明（各20分）に入った。学生は自ら検索し、宿題も提出した上で、それらの説明を聞くので、耳に入るようである。

特に、クリティカル・シンキングについては、「風が吹けば桶屋が儲かる」という日本のことわざのおかしなところはどこかを、演習問題として10分近く考えさせている。この問題は必然性と蓋然性の違いが判断できるかのクリティカル・シンキングであることを伝え、さらに、蓋然性の場合それぞれの確率を掛け算しなければならず、段階が増えて掛け算をすればするほど、確率が0に近づいていくことを説明している。こういった確率を扱う統計学も今後学んでいくこと、「水に対する誤解」で書かれた製品の効果の再現性と体験談との違いの場合も、統計・確率がかかわることや、専門分野で学ぶプラセボ効果や二重盲検法についても、簡単に説明している。（20分）

学生による発表授業の初回では発表数が少なく、質疑応答の時間を十分に取ることができた。発表終了後、まずは、各自が発表内容のメモを参考に、発表への質問・コメントを記入する時間を7,8分とった。その後、質疑応答、討論を行わせた。質問・コメントが続かない場合には、座席を回覧中の教員が用紙に書かれた質問に目を通し、良い質問だから手を挙げなさいなどと誘導した。その結果、「発表を通じて、疑問を持つこと・意見を言うことがどれだけ発表者にとって嬉しいことかがわかりました。発表で質問されることで、自分たち

の気づかなかったことを見つけられました。そして、コメントをもらうことで、自分たちの勇気となることもわかりました。」 「発表時には、質問・コメントの時間が設けられ双方向的な授業が展開されていた。その時間は、聞いている人がどこまで理解できているのかを把握できる時間だった。それと同時に、自分もどれだけ情報を整理できているのかを確認できる時間でもあった。」といった評価が学生達から出て来た。この質問・コメントがスムーズに出る雰囲気作りをすることが、学生による初回の発表授業における教員の役割である。

授業で特に使用しているツールとその活用法

学期前半の、教員による授業では、身近にありすぎて興味の対象外になっていた「水」について学生に興味を引き起こすために、視覚に訴えるツールを使用している。すなわち、花粉のブラウン運動、気体の分子運動論、電子レンジのしくみのシミュレーションをパソコンで見せている。また、水 100mL とアルコール 100mL を混ぜても 200mL とならないことや、砂糖・塩がアルコールにはほとんど溶けないこと、ロウを塗った茶こしに水をためる等の演示実験、DVD「NHK スペシャル地球大進化 46 億年・人類への旅 第 2 集 全球凍結 大型生物誕生の謎」の鑑賞など、を学生達に見せて興味を喚起している。

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)

学期末レポート・授業の評価（自分にとって自然科学入門（概論）とはなんだったか）では、「今まで、科学が大の苦手で、興味もなかったのに、この授業を受けているうちに科学の身近さに気がつき、自分たちの生活に必要な不可欠なものであることを改めて感じました。頭を柔軟にして色々な考え方、発想をすることが科学ではとても重要なのだということを学びました。最初は憂鬱で、仕方のなかった自然科学概論で、水に興味を持ち、それを発表するために自ら調べ学んだことは私にとって大きな成長につながりました。」 「科学の楽しさというものも改めて知ることができました。中学や高校の理科や化学と違った、いい意味での小学校の理科のような不思議な現象を楽しく学べました。同時に、なぜこの現象はこうなるのだろうといった疑問も持てました。勉強するにあたって疑問を持つことはとても大切なことだと思うので、苦手な理系科目でそのような意識を持てたことはとても嬉しかったです。」など書いてくれた学生を初め、知的好奇心が沸いて、科目の達成目標である「理科の苦手意識が解消された」ケースは、かなり多かった。

以下は、「好奇心は学びの原点」が実践できた例である。「今回自分で調べてみて、いろいろな資料を参考にして調べることは、とても面白いなと思った。一つの疑問が解決しても、『でもこれってなんだろう？』と、どんどん新しい疑問が浮かび上がってくる。それをもう一度調べ、新しいことを発見するのは快感だった。調べるという行為は、正直、以前は面倒くさいと思っていた。しかしとても楽しいことだと知り、もっとたくさんのことを調べたくなった。」

「自然科学概論の授業で学んだことは、どんなことも、調べていけば次々と疑問がわいてくるものであるということだ。私は髪の毛のうるおいについて調べたが、水分量を調べると、どこに水分が含まれるのかが気になり、髪を構成する成分を調べることにつながった。そして髪を構成する成分はどのように成り立っているのかが気になり、髪に必要な栄養素を調べることにつながった。そしてこの栄養素はどのような食材から・・・と、調べたいことがつながっていつ

	<p>た。」</p> <p>「課題探求能力」の修得までにいたったと思われる例を次に示す。「私にとっての自然科学概論とは1つの事柄を調べ通すことである。今回私は水に関係のある『50度洗い』について調べ通した。質問を受け入れ自分とは違った考え方があることを実感し、また新たに調べなおす。そして、立ち止まってクリティカル・シンキングを試してみる。これを繰り返すことで始めて本当に1つの事柄を調べたと言えるだろう。」</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>学期末に提出させたレポートにおいて、発表の際に教員に指摘された問題点や他の学生からの質問・コメントに出来るだけ答えることを要求している。この要求が、学習成果に書いた「質問を受け入れ、自分とは違った考え方があることを実感し、また新たに調べなおす。そして、立ち止まってクリティカル・シンキングを試してみる。これを繰り返すことで始めて本当に1つの事柄を調べたと言えるだろう。」という理解につながっている。そのため、学期末に提出させた（最終）レポート、特に、「自分にとって自然科学入門とは何であったか」の項目が、学習成果の評価・測定に最も適していると考えている。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>「たかが水、されど水。調べなければ身近過ぎて気づかなかったことを学んだ。ひとつのことを徹底的に調べることの良さは逆に視野が広がること。普段、視野を広くしようと思ってもなかなか出来ない。ひとつじっくり調べるとそこから沢山の繋がりと可能性が見えた。水といってもそれぞれが連想するものも発表するものも違う。だからおもしろい。よい刺激になった。」「自然科学概論とは、水のことはもちろん、水を通して自分の考えや視野を広げ、さまざまな観点から物事を理解することだと思う。これは、これからの授業や社会に出ても大事な事だ。人生は学び続けるものだと思うので、いろいろなものを積極的に吸収していける人になりたい。」</p>
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）</p>	<p>好奇心は学びの原点であり、学びは探求的であるべきと考える。¹⁾ 人間は本来活動的で、自分の能力を発揮するのが好み、知的好奇心から知の探索をおこなうかたちで学習もしていく。²⁾ このことを「水」について実践してもらい、今後の学習・学修に生かす。それがこの授業の基本の考え方である。</p> <p>とはいえ、この授業を10年以上続けられているのは、身近にある水の多様性を受け止めて、以下のようなコメントを書いてくれる本学の学生達の感受性の高さにあると考えている。「テーマ選びに関して『水』から連想させていったが、多くのことがでてきて迷った。半身浴、化粧水、スポーツドリンク、涙、汗、ジュース、お茶など多くの言葉を連想させることができた。」「ほかのグループの発表も聞くことで、新たな知識が増えて水だけでこんなにテーマがあるのかと驚いた。発表を通して、身近なものに、どれだけ疑問に思うことが増えて、それを調べ、知識として自分のものにし、理解していくのが大切なのかわかった。」「発表のすべてのことがこれからの生活に役立つという事は、水はやはり私たち人間にとって基本中の基本となる物質であると感じた。」「からだの水の関係を調べてみて私たちのからだのしくみがいかにすごいか実感した。」</p>

●教養科目●前半は授業を行い、後半は学生による調査・発表

	1)田丸謙二:「科学的な見方や考え方」とは?,化学と教育,48,339,(2000) 2)波多野誼余夫, 稲垣佳世子:知的好奇心、中央公論新社、東京(1973)
授業風景	なし。
その他の特記事項	<p>項目 3. に記した科目名「自然科学入門」とは異なる「自然科学概論」という科目名が、本稿中に出て来るが、これは、平成 26 年度から科目名が変更されたためである。変更理由は、学期前半の授業では「水」について学生に興味を持ってもらえばそれで良い、と考える教員と、後半の授業の主役である学生たち、特に、「中学や高校の理科や化学と違った、いい意味での小学校の理科のような不思議な現象を楽しく学べました。」「あんなに日常的に慣れ親しんでいたものが視点を変えれば科学になるんだ。」とじてくれる学生たちにとって、「自然科学入門」が、よりふさわしい科目名だとの考えに基づいている¹⁾。</p> <p>「自然科学入門」に変わってからのレポートも、それまでのレポートと同様、あるいはそれ以上の学習成果が出ており、科目の名称以外は以前とまったく変わらないと確信している。</p> <p>1)山内喜昭・立屋敷哲：基礎教養に求められる「自然科学概論」の試み～続報 H25～25 教育実践報告～女子栄養大学紀要, 44 17－28 (2013)</p>

ふれあい実習Ⅰ（観察）

椋山女学園大学

教育学部／子ども発達学科

山田真紀 他 7名

科目の位置づけ	1年次前期に開講される、少人数制の入門ゼミ（必修科目）。
受講（登録）学生数	170名（一クラス20～23名）
科目の到達目標	<p>*将来の進路希望に関わらず、全員が幼稚園・小学校・中学校・高等学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付けるとともに、学生の“見る力”、問題を発見する力を鍛える。</p> <p>*情報検索・レポート作成・発表・討論の方法等、大学での主体的な学びの方法を修得する。</p>
教育方法の特徴	<p>*1年次前期から見学実習の機会を設けている。学生の将来の進路希望に関わらず、全員が幼稚園・小学校・中学校・高等学校へ見学実習にいき、見学してきた内容をもとに討論会を行う。全員が幼稚園から高等学校までを見学する理由は、たとえ将来、小学校教諭となるとしても、「子どもは幼稚園あるいは保育所でどのような教育を受けて小学校に進学するのか」、「小学校を卒業したあとにどのような学校教育を受けることになるのか、それらの学校段階に適応していくためには、小学校でどのような資質や理解を育てておけばいいのか」というように、人間発達を長期的視野で考察・把握できる能力を持つことができるようにするためである。</p> <p>*討論会は、項目10に詳述したように、学生司会を中心に、4つのパートで進めていく。特徴的なのはパート1のディスカッションオンザペーパーであり、学生はピアのコメントに刺激を受けるとともに、学習の軌跡がノート上に残るといったメリットがある。</p> <p>*最後に2回行われる「学んだこと発表会」においては、事前に学生の発表内容をチェックする機会を設け、事前練習を必ずさせることで、学生のスピーチの質の向上をはかること、そして発表会当日は、友達のスピーチをただぼんやり聞くことにならないように、各発表ののちに2分間の時間を取り、評価表に記入させるという工夫を行う。評価表には「良かった点」「改善点」「得点（10点満点）」を記入させ、「良かった点」「改善点」については、当該の部分を取り、全員分のコメントを発表者にフィードバックする。得点については集計ののち、スピーチコンテストの入賞者（上位5位まで発表）を決めるのに用いる。</p> <p>*この授業は8名の教員が担当しており、担当者で「ふれあい実習担当者会議」を結成して、共通理解のもとで授業を進めている。担当者会議にはリーダー1名と、専修ごとに実習実務担当者が1名いる。担当者会議は年間3～5回開催され、観察実習に関する連絡調整、授業の進め方に関する情報交換、来年</p>

●専門教育科目●学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付ける

	度に向けての改善案の検討、実習ノートの改訂と準備などのことを行う。
教室空間の特徴	<ul style="list-style-type: none">*少人数制のゼミのため演習室を用いる。演習室とは、机がコの字型に並んでいる、定員 24 名の教室である。*実習を軸にして進む授業のため、実習時は幼稚園・小学校・中学校・高等学校の保育室・教室の後方から観察を行う。
特定の回の授業の流れ・時間配分	<p>実習後の討論会の授業の流れ</p> <ol style="list-style-type: none">① ディスカッションオンザペーパー<ul style="list-style-type: none">・同じクラスを見学した学生同士が、お互いの実習の記録にコメントを書きあう。・4分間を1セットとし、4分間でひとり分のレポートに目を通し、そこに色ペンでコメントを書き込む。これを4セット行う。学生のレポートは色とりどりのコメントで彩られることになる。学生はピアからのコメントに刺激を受ける。② 見学クラスの概要の発表<ul style="list-style-type: none">・学生は5班に分かれてさまざまな教科や学年のクラスに入るため、自分たちの班がどのようなクラスを見学したかを発表する。後半の全体ディスカッションにおいて、学年や教科の違い、そして指導者の性別や年代は重要な背景知識になる。③ 議論点についてのブレインストーミング<ul style="list-style-type: none">・あらかじめ実習ノートに書きだした「議論点」を全員が発表する。・司会と黒板書記は出された議論点をすべて黒板に書きだす。・司会班で相談して、出された議論点のうち、実際に本時で議論するテーマを2つ選ぶ。・2つの議論点は、ひとつは本質的な問題で、時間をかけて議論したいもの、ひとつは技術的で短時間で議論が終わるものを組み合わせる。④ 全体ディスカッション<ul style="list-style-type: none">・司会班が司会をし、「全員が1度は発言する」というルールのもとで行う。・教員は議論を見守り、最後に議論の内容をまとめ、議論からは漏れていた重要な情報について補足する。
授業で特に使用しているツールとその活用法	<ul style="list-style-type: none">*全クラス共通の『ふれあい実習 実習ノート』を作成し、取り外しが可能な2穴バインダーにとじて使用させている。実習ノートには、実習の目的・スケジュール・諸注意（持ち物・身だしなみ・実習の仕方など）・保育&授業記録（実習時に記入する記録表）、実習の記録（実習後に記入し、次の討論会に持参する。見学の感想・印象に残った出来事・実習で学んだこと・討論会で議論したいことなどを記入する）、実習校の校内地図等が含まれている。

●専門教育科目●学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付ける

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

- *保育や授業を「見る力」を養うことができた。討論会で出される「議論点」が回を追うごとに多くなり、見たものから課題を見出す力を確実につけていることを感じた。
- *討論の仕方が上手になった。これまで出てきた意見を踏まえて発言する「つながる発言」に意識させることにより、また全員参加が義務付けられていることもあり、全員が積極的にひとつのテーマにむけて討論することができるようになり、回を追うごとに議論の深まりを感じるようになった。
- *実習に行く毎に作成する「実習の記録」と最終レポートについて書き方を指導し、毎回添削をすることにより、学生は自分の発見したことを順序立てて論理的に記述することができるようになった。
- *保育実習や教育実習でもとめられる「実習生として適切な身だしなみと振る舞い方」を身に付けることができた。

**学習成果の評価・測定
の方法**

- *最終授業時に「最終レポート」を提出させる。そこにこの半期間で自分がどのように成長できたか、どのような能力を身に付けられたかを、自分で評価して書く。
- *「担当教員の手ごたえ」がもっとも大切な指標と考えている。学生の実習へ望む意欲の深まり、討論会の深まり、学生の提出物の質の向上という点で、本年度の授業で「手ごたえが感じられたか」を担当者会議で話し合う。

**本科目についての学生からの
評価**

- 最終授業の際に匿名で記入してもらった感想カードから2名の声を紹介する。
- *幼稚園・小学校・中学校・高等学校を見学し、これまで私は生徒の立場からしか授業を見ていなかったけれど、今回は「教師を目指す大学生」というやや教師よりの立場から授業を見ることができ、教師の生徒への対応の仕方や、授業の展開の仕方などについて、いろいろなやり方があることを知ることができました。また、実習のあとには毎回かならずレポート提出があり、実習で学んだことを整理でき、レポートの書き方も学ぶことができました。
 - *実習後に討論会をすることにより、自分の考えをより深いものにすることができました。また、ほかの授業を見学していたグループの話聞くことにより、自分の見ていない学年や教科の情報を得ることもできました。そして私がこの討論会でもっとも良かったと思う点は、実習と討論会が交互になっていたので、前の討論で話題になったことを次の実習で見ることができ、観察するポイントが回を重ねるごとに徐々に増えていったことです。この討論会のおかげで、実習がよりよいものになったと思います。

**学生の学習のあり方や教授法の
果たす意味等に関する、担当
者の基本的な考え方（教育哲
学）**

- *実践力のある保育者や教員を育てるためには、理論と実践が両輪となり、学生の学びを構成していくようなバランスのよいカリキュラムが必要である。ふれあい実習Ⅰ（観察）で、入学直後に、将来の職場となりうる幼稚園・小学校・中学校・高等学校に赴き、これまでのような「児童・生徒の目」だけではなく、「教師の目」も持ちつつ観察実習を行い、そのなかから議論点を見出すことで学生の“見る目”は養われていく。討論会で出された議論点はどれも本質的に重要な課題であり、すぐに解決策を見出すことはできなくても、これからの4年間で自分なりの解決方法を見出さなければならぬものばかりで、そのことを意識づけることで、今後の理論的な学習に対する動機

●専門教育科目●学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付ける

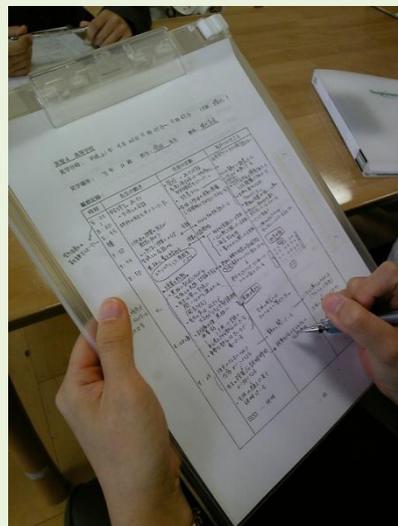
づけを高めることができる。

*学生はピアからよい刺激を得るため、ディスカッションオンザペーパー、討論会、「学んだこと発表会」での評価表のフィードバックなど、学生同士の学び合いが生じ、またその記録が残るような方法を工夫している。

授業風景



小学校での実習の様子



見学しながら実習の記録に記入する

その他の特記事項

*実習で学んだことは、「人間論」という相山女学園大学特有の科目と連携し、「わたしのノート」の実践につなげていく。「わたしのノート」とは、授業のなかで「なるほど!」と思ったこと、読書をしていて「この部分は覚えておきたい」と思ったこと、実習やボランティアをして「どうしたらいいのだろう」と疑問に感じたことなどを書き溜めていくノートである。特に「どうしたらいいのだろう」という問題意識については、折に触れてノートを見直して再確認し、授業や読書を通してその解決策を探したり、実習やボランティアの場面でいろいろなやり方を試したりすることが大切であり、その結果も書き留めてゆく。こうした小さな積み重ねが、保育者や教員になったときに「自分なりのやり方」の基礎になり、支えとなることを学生に伝えている。

*前期 15 回の授業は以下のように展開される。

第一回：授業ガイダンス、受講生および教員の自己紹介

第二回：大学での学び方 1 (単位取得の方法、レポートや試験に臨む心構え、学部棟内でのルールなど)

第三回：大学での学び方 2 (大学図書館の利用の仕方、文献や資料の検索方法について)

第四回：実習ガイダンス (実習ノートの配布と解説、実習日と実習クラスの発表)

第五回：幼稚園実習

第六回：幼稚園実習に関する討論会

第七回：小学校実習

第八回：小学校実習に関する討論会

第九回：中学校実習

第十回：中学校実習に関する討論会

第十一回：高等学校実習

第十二回：高等学校実習に関する討論会

第十三回：実習のまとめ、レポートとスピーチコンテストの説明、コンサル

●専門教育科目●学校へ見学実習にいき、保育実習や教育実習のための基本的技能を身に付ける

ティンガアワーなど

第十四回：学んだこと発表会（前半グループ）

第十五回：学んだこと発表会（後半グループ）

精神障害作業療法学（Ⅰ・Ⅱ）

精神障害作業療法評価学

聖隷クリストファー大学

リハビリテーション学部 作業療法学科
新宮 尚人

科目の位置づけ	3年時に履修する専門科目に位置づけられており、総合臨床実習に出るにはこの科目を含む作業療法専門科目に合格していることが必要である。本学科の専門科目では、問題解決型学習（PBL：Problem Based Learning）を導入している。
受講（登録）学生数	31名
科目の到達目標	<p>本稿で取り上げる3科目は精神障害作業療法の全体を網羅しており、筆者が全て科目責任者となっている。そのため授業内容の構成は、全体を俯瞰的に眺めて組み立てている。</p> <p>到達目標は下記の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none">①精神障害の特性を掴み、おおよそのイメージができる②精神保健医療福祉の流れと精神障害作業療法の歴史について説明できる③精神障害作業療法で対象となる疾患の特徴と作業療法の展開方法について説明できる④精神障害作業療法の評価方法と手段が説明できる⑤模擬的に精神障害作業療法における評価とプログラムの立案ができる⑥医療施設以外の作業療法・近接領域の実践を理解できる
教育方法の特徴	<p>●ハイブリッド型 PBL（PBL→成果発表→講義：ポイント解説、DVD 視聴など）</p> <p>授業は以下の通り、3つの part（PBL、成果発表、講義）で構成される。</p>  <p>図1. ハイブリッド型 PBL 授業の構成</p> <p>最初に PBL を実施し、自分たちで考え調べ自分なりの答えを作成する（予習機能）。その後、あらかじめ割り振られたグループの学生が PBL の成果を報告するが、それ以外の学生は自分で作成した資料を手元に置き発表を聞く。学生は発表内容と教員のコメントを聞いて内容の確認や修正をする。最後に教員は学習のポイントを講義する。という流れをとる。講義ではパワーポイントによる説明の他、テーマに沿った DVD 視聴などを併せて実施し、イメージを膨</p>

らませる（トライ・アンド・エラーの確認）。

●作業療法評価には人物像のイラスト化を

作業療法で最もよく用いられる社会生活機能評価尺度については、教員が実際に担当した症例のプロフィールや評価結果などをあらかじめ提示し、項目を確認しながら評価シートに点数を転記する。その後、そこから浮かび上がる人物像をイラスト化するという演習を行う。（本人の同意とプライバシーへの配慮は厳格に行っている）。

図2は、あるグループが作成したイラストである。プロフィールや評価結果データから想像される容姿、得意・不得意などの特徴を、吹き出しを入れながら作成していく。



臨床で評価尺度を使用する際には、本来逆のプロセスをたどる。しかし、目の前に症例がいるわけではない授業では、どうしても、説明に終始してしまいがちで学生の印象には残らない。学生自身も、最初は「なぜイラストを？」という疑問を持つが、実際に取り組んでみると、客観的なデータを眺めているだけでは浮き彫りにならない、対象者の主観的世界に踏み込む意義を自覚する機会となる。

最後にその事例を担当した教員が「人となり」を含めてコメントするが、学生は想像通りであったか、見逃していた点はなかったかを確認することが

できる。

図2. 人物像のイラスト化

教室空間の特徴

全体のインフォメーションおよびポイント講義は中教室を使用するが、PBLでは各グループが、演習室という小教室（写真参照）を使用する。各演習室にはホワイトボードが備えられており、情報の共有やディスカッションに使用される。

特定の回の授業の流れ・時間配分

本学では80分授業を採用している。1回のPBLは2コマ続きで実施し、それを2回行うので合計4コマの時間を費やす。授業全体の流れは図1に示した通りである。

●PBL (2コマを2回)

<オリエンテーション>

- ① シナリオをきっかけにして、予測される精神疾患に対する治療やリハビリテーションについて、網羅的に学習すること。
- ② シナリオは答えにたどり着くまでの道しるべと捉える。

<PBLの進め方>

1. この課題について感じたこと、考えたことをあげる。
2. シナリオの問題についてブレイン・ストーミングをする。
3. ポイントとなる問題は何かを決める。
4. これから調べる問題の優先順位を決める。
5. 個々の問題についての学習計画を決める。
6. グループメンバー全員がこの学習計画を理解し賛成していることを確認する。
7. グループで学習課題（学習目的）を分担する。
8. どのような情報源があるかブレイン・ストーミングをする。
9. 情報収集し共有する。

学生は「もし、シナリオの症例を自分が担当することになったらどうするか」ということを念頭に置き、まず自分で考えてみる。次に自分の考えをグループメンバーと共にディスカッションしてみる。そして、方向性が明確になったら、教科書・文献等の資料にあたり、自分なりのまとめの資料を作成する。

●個人資料の作成と成果発表

グループの代表者1～2名が PBL の結果を発表（全員が必ず一度は発表するように割り振られている）し、教員のコメントを聞くという流れを踏む。このプロセスにおいて学生は、臨床で必要な診たて、獲得すべき知識の認識・情報収集を自然に行うことになる。

●ポイント解説の講義

教員は、今回のテーマとなっている精神疾患の特性や作業療法の進め方を、パワーポイントにまとめ、補足資料と併せてポイント解説を行う。学生は、個人でまとめた資料と講義を照合し、正確に学習できているかどうかを確認することになるが、PBL で予習ができていたため、落ち着いて講義に臨むことが出来る。最後に、学習した精神疾患のイメージを確実なものとするため、そのテーマに沿ったエピソード（例えば、「働き盛りの鬱」について描いたもの）のドラマを視聴することにより、イメージを確実なものとする。視聴するドラマは、テレビで馴染みのある俳優ばかりが出演している。これにより、授業という堅苦しさから解放され、楽しみながら学習することを狙いにしている。

以上の流れから、PBL は予習として、成果発表とポイント解説の講義は、トライ・アンド・エラーの確認として機能すると考えている。

●PBL シナリオ作成のコツ

PBL シナリオは、精神疾患の特徴理解、精神疾患による日常生活への影響理解、精神疾患に対する作業療法のプロセスと内容、これらを網羅的に学習するきっかけを作るツールとして用いている。作成にあたっては次の点をチェック

1. 臨床でよく出会う標準的なエピソードであるか
2. 教えるべき必要なことは網羅されているか
3. 探索的に学習のできる情報が記載されているか
4. 興味を持って取り組めるか（ワクワクできるか）
5. 獲得される知識の順序は妥当か

授業で特に使用しているツールとその活用法

	<p>する。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>●主体的知識の獲得</p> <p>PBL による資料収集と情報を統合する過程は、そのまま予習として機能するため、学生はその後の講義にゆとりを持って臨むことが出来る。教員は学生の努力の過程をねぎらいながらポイントを解説し、学生は自らの学習成果とトライ・アンド・エラーの確認をしながら聴講することになる。これがより深い理解と知識の定着につながると考えている。</p> <p>●臨床推論プロセスの経験</p> <p>作業療法士は、初めて担当する対象者の必要な情報を集め、自らの経験と照らし合わせて、問題点を焦点化し介入方針を決定している。PBL は、このプロセスの情報収集を模擬的に経験する機会となる。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 筆記試験：学期末に実施 (60%) 2. レポート提出：精神疾患に関する DVD を見て、要約・自己学習・考察と感想を (20%) 3. ポートフォリオ提出：全ての資料をファイリングして授業の最後に確認 (20%) <p style="text-align: right;">※ () は評価割合</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>●授業評価結果</p> <p>全ての授業が終了した後に実施した授業評価 (2014 年度前期) では、授業の内容、進め方に関する項目は 4.45~4.71 (無記名、5 段階評価、点数が高いほど肯定的) という結果であり、概ね良い評価が得られた。</p> <p>●自由記述のコメント (代表的なものを原文のまま掲載、過年度生を含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ テキストや参考文献を頼りに文章で書かれていることを、1 から自分たちで理解することは大変だったが、理解できた時の充実感は大きかった。 ・ 重要な点を把握しながら講義を聴けるので理解しやすかった。 ・ 他のグループの意見を聞くことで、様々な視点から考えることができ、さらに新しい発見や納得することもできた。人の意見も聞いてよかった。 ・ 疾患がどういうものであるか、自分が理解したことを相手に伝えることができなければ、実はまだ理解できていないと気付くことができた ・ ドラマが教材になっており、身近で楽しみながらも疾患の全体像を効率よく把握できてよかった。 ・ 講義で事例の中から OT のポイントとなる部分を拾っていくものは、イメージがつきやすかった。 ・ PBL メンバーとの関係が深まり、鍋をしたこともあった。
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方 (教育哲学)</p>	<p>●ティーチングよりもコーチング</p> <p>“決して答えを教えるのではなく、学習のきっかけ作りと、途中の道標を示すことに徹する”</p> <p>学生は、自分で必要な知識にたどり着くと、大きな充実感が得られる。それに至るプロセスにおいて、“道しるべとなる” ことが教員の役割であると考えている。</p>

●作業療法専門科目●ハイブリッド型 PBL

このことは作業療法の臨床場面における対象者との関係性でも同様と考える。

授業風景



PBL の実施



人物像のイラスト化

その他の特記事項

本稿に掲載した一部の写真や文章は、筆者が分担執筆した以下の書籍から引用している。

宮前珠子、新宮尚人 編：作業療法がわかる PBL テュートリアル Step by Step.

医学書院. 2013

食育総論・産官学食育実践演習

相愛大学

人間発達学部/発達栄養学科

多門隆子、爲房恭子、山口 繁、山北人志※、湯木潤治※、坂本廣子※(食育総論) ※非常勤

科目の位置づけ

相愛大学では建学の精神である「當相敬愛」の精神を具体化した「相愛大学将来構想」(平成23年3月制定)をもとに、様々な大学改革に取り組んでいる。発達栄養学科は、「相愛大学将来構想」に挙げられた①教育、②研究および③社会貢献を念頭に教育・地域連携事業を実施しており、また「食育基本法」における全てのライフステージ段階における食育支援のため、「コミュニティの活性化によるQOL向上支援」を目標に、心身の健康な発達を栄養・食生活面から支援できる管理栄養士の養成を行うとともに、地域住民の疾病予防に尽力している。

このような背景をふまえて、発達栄養学科の新入生を対象として食および食育に関する基礎的知識習得と理解を目的とした食育総論・産官学食育実践演習を連続的に実施することで、一回生からの学習目的の明確化と食育のできる管理栄養士の養成を目指す。

受講(登録)学生数

平成26年度 110人(食育総論75人+産官学食育実践演習35人)

科目の到達目標

食育総論では①国の食育に関する方針や施策、食育の現代的課題についての理解、②幼児・学童期から高齢期など生涯にわたるライフステージ別食育、地域や医療機関及び福祉施設等における食育、伝統的な食文化についての理解により、「食育」に関する基礎的知識を習得することを到達目標としている。一方、産官学食育実践演習では食育総論で学んだ知識をもとに産官学が連携した具体的な実践活動を体験学習し、食育の実践力を習得することを到達目標としている。

教育方法の特徴

食育総論は大教室での座学であるが、新入生の食および食育に関する学習意欲を向上させるために、様々な工夫を実践している。主な特徴は、以下のとおりである。

- 1) 相愛大学発達栄養学科の公衆栄養学、臨床栄養学および栄養教育論の専門教員だけでなく、老舗料亭経営者、食育に携わる料理研究家を担当教員とし、食に関する様々な専門家がオムニバス形式で講義を実施する。
- 2) 各担当教員の専門分野における講義において、学校・地域、福祉施設・医療機関、外食・食品企業からゲストスピーカーを迎えて「食」の現状についての講義を実施することで、受講者の学習内容への関心および理解を高める。
- 3) ゲストスピーカーによる講義では、講義内容のまとめや感想、疑問点などをレポートとして提出させることで、自らの学習内容の反復と学修の確立を促す。

産官学食育実践演習では、①大阪市中央卸売市場での青果・鮮魚せり場の

●専門科目●企業等のゲストスピーカーを迎え講義。市場見学や調理実習など

	<p>見学、大阪市食品検査所での研修、地産地消の食材を使用した調理実習、②食品企業の食育や環境教育についての講義およびエコクッキングなど、③弁当や総菜の製造工場見学およびマーケティング・商品開発・品質管理の講義などにより、食育総論で学んだ「食」について具体的に体験することで、協同学習、問題解決・課題探求型学習による学修の確立と学習内容への興味を向上させる。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>1)食育総論を開講している教室は定員 100 名の平面教室であり、黒板・マイクのほかに使用される機材は、設置されているプロジェクタである。担当教員の多くはパワーポイントを利用したスライドやビデオを投影しながら、講義を実施している。</p> <p>2)産官学食育実践演習では平成 26 年度までに、①大阪市中央卸売市場本場、②(株)カゴメ大阪支社、③(株)デリカ・アイフーズ、④大阪府立健康科学センター、⑤大阪ガス(株)生活誕生館ディリパへの見学・実習を実施しており、各見学先の施設全体およびセミナー室を教室空間としている。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>1)食育総論は座学形式の講義であり、ゲストスピーカーによる 90 分の授業の流れは概ね以下のように配分されている。</p> <p>①教員による前回の授業内容の再確認と学生による学習内容の振り返り(5分)</p> <p>②ゲストスピーカーの紹介、当該時間の授業内容の概要解説(15分)</p> <p>③パワーポイントなどを利用した講義・講演(50分)</p> <p>④質疑応答(10分)</p> <p>⑤レポートの作成(10分)</p> <p>2)産官学食育実践演習は夏季集中講義(3日間)であり、授業の流れは概ね以下のように配分されている(平成 26 年度実施)。</p> <p>①講義 1 日目(研修先:カゴメ(株)大阪支店) 9:30~16:30 食育料理教室(オムライス検定)、講義(野菜の効用、カゴメの食育活動)、自主学習(レポートの作成)</p> <p>②講義 2 日目(研修先:大阪市中央卸売市場本場) 8:30~16:00 青果・鮮魚せり場の市場研修、講義(最近の魚事情)、体験学習(香川県産うどん打ち体験)、大阪市食品衛生検査所での研修、自主学習(レポートの作成)</p> <p>③講義 3 日目(研修先:大阪ガス(株)生活誕生館ディリパ) 9:30~16:00 講義(次世代向け活動)、講義(環境教育とエコ・クッキング)、体験学習(エコ・クッキング)、体験学習(生活誕生館設備体験ツアー)、講義(朝食について)、自主学習(レポートの作成)</p> <p>※25 年度の 3 日目(株)デリカ・アイフーズ 9:30~16:00 講義(食品流通と中食、マーケティングと商品開発、商品化のプロセス、品質管理)工場見学(弁当・総菜)、自主学習(レポートの作成)</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>食育総論・産官学食育実践演習での現場における食育や産官学の取組などの学習のため、農林水産省、大阪府食生活改善連絡協議会会長、(株)カゴメ研究員など食に係る多分野の人材を活用しているが、特別な物理的ツールは利</p>

用していない。

多年度にわたり座学である食育総論と演習である産官学食育実践演習を一回生を対象に連続して実施することにより、①産官学お弁当コンテスト等への応募件数が年々増加し、上位入賞者も増えている。②産学連携による商品開発プロジェクトへの参加を希望する学生が非常に多くなり、平成26年度は、弁当や和菓子開発プロジェクトに5チーム(26名)が参加している。他にも③企業と連携した2つのプロジェクトに15名が取り組んでおり、さらに④食品製造企業の商品開発部門に就職を希望する(就職した)学生が年々増加している。

以下については、産官学食育実践演習の受講前後のアンケートの結果であり、学習成果が明らかになっている。

①食品製造業に対する理解・興味について

講義前は、食品製造業について全く理解したいと思わないと回答した学生も見られたが(7.4%)、講義後にはこの割合は0になるとともに、全体の約8割の学生が食品製造業に対する理解が非常に高まったと回答した。

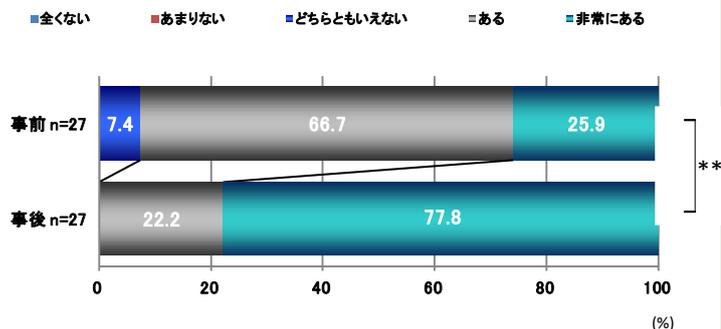


図 食品製造業に対する理解・興味について

②食品製造業の食品開発について

講義前は、食品開発について非常に興味があると回答した学生は約3割であったが、講義後は、興味を持つ学生が著しく増加(70.4%)することが明らかとなった。

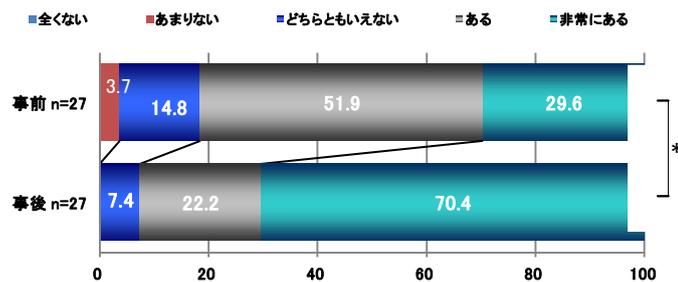
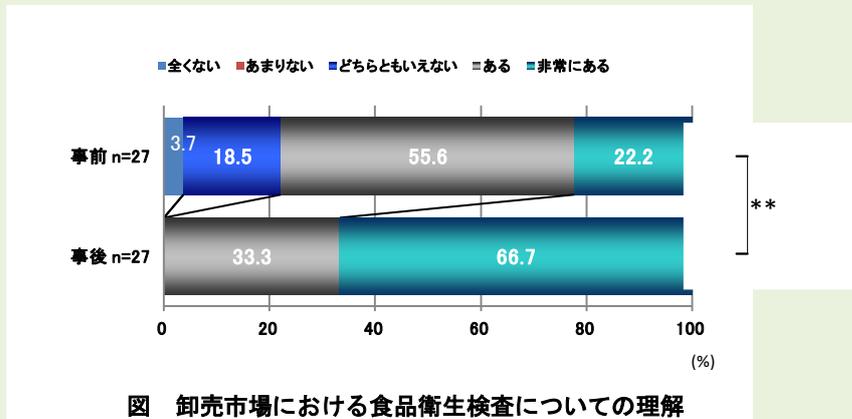


図 食品製造業の「食品開発」に対する興味について

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

③卸売市場における食品衛生検査について

専門的な分野においても、講義後には 7 割の学生が非常に理解が高まったと回答し、産官学食育実践演習での見学・講義によって食の専門的分野についても興味が高まることが明らかとなった。



学習成果の評価・測定の方法

- 1) 食育総論では、ゲストスピーカーの講義に対するまとめや疑問点などのレポートや、講義内容に関する課題の評価を全体の 80%とし、受講態度などの授業への参加度を全体の 20%として評価した。
- 2) 産官学食育実践演習では、見学・実習先から出された課題および演習全体に対するレポートの評価を全体の 50%とし、見学・実習時の参加度を全体の 50%として評価した。

本科目についての学生からの評価

多くの学生から本講義・演習を受講することで、食に関する興味が高まった、食の多様性を認識することができたなどの意見を聞くことが出来た。また、進路決定や就職活動において講義で学んだ学習内容、演習での施設見学が非常に有用であるという意見も多くの学生から聞くことができた。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

相愛大学発達栄養学科は、地域に貢献できる、食育のできる管理栄養士の養成を目的に教育・地域連携活動を行っている。そのため、発達栄養学科の教員全員が、担当する管理栄養士養成科目と地域の食育と関連づけて指導することの重要性を認識し、教育に努めている。

新入生を対象とした食育総論および産官学食育実践演習は、大学 4 年間にわたる食に関する学習への興味や学習意欲を高めるうえで非常に重要であると認識するとともに、食育に関する連続した講義・演習での学修者どうしの協同学習という教授法が、学生同士の横の繋がりに寄与することも期待している。

●専門科目●企業等のゲストスピーカーを迎え講義。市場見学や調理実習など

(産官学食育実践演習)



カゴメ(株) オムライス検定



(株)デリカ・アイフーズ 講義と工場見学



大阪市中央卸売市場本場の見学



大阪ガス(株)エコクッキング

授業風景

ゼミナール

東京薬科大学

薬学部

薬学部全教員（実施委員会代表 大野尚仁）

科目の位置づけ	<p>資格取得を目指した大学においては必修科目が大部分を占める。その中において、学生の自主性を尊重し「科目選択」を実践することで、得意分野を伸ばし、不得意分野を補う。</p> <p>ゼミナールは1年次から3年次までの3年間を通じて少人数クラスで実施することで、個別指導を重視し、問題を探求する姿勢を養い、課題を解決する能力を醸成し、医療を担う薬学人として相応しい豊かな人間性と社会的責任を果たすに必要な判断力と広い視野を身につける。</p>
受講（登録）学生数	<p>各クラス 25 名程度，各学年で前後期に各々 20 クラス程度を開講，各学生は 5 単位必修</p> <p>4 2 0 名 x 1 ~ 3 年次までの 3 学年 = 合計 1 2 6 0 名</p>
科目の到達目標	<p>優れた医療人となるためには、必修科目で学ぶ基本的な知識と技能、さらには態度に加え、世の中を取り巻くさまざまな話題、課題、見解などについて、豊富な知識を持ち、的確な見識を持って行動できるようになることが望まれる。ゼミナールは少人数クラス単位で実施する選択科目であり、科目を自らの興味で選んで履修することで自主性を養い、演習、グループ討論、プレゼンテーションなどの能動的な学習方法を実践することで、優れた医療人となるための技能や態度を醸成する。</p>
教育方法の特徴	<p>ゼミナールは約 90 名の薬学部教員が各々 1 単位を開講する。テーマは各々の教員が指定する。受講時期は 1 年次後期から 3 年次後期までであり、5 単位以上を履修する。集中講義形式を基本とし、前期または後期の実習のない週の午後 3 週間、合計 6 日間に実施することを基本とする。各クラスではグループ討議ならびにプレゼンテーションを積極的に取り入れ、参加型学習を実践している。</p> <p>ガイダンスでは、各クラスのテーマをシラバスとして学生に提示し、目的ならびにシステムについて詳しく説明する。学生は定められた期間に、Web システムを用いてエントリーし、定員がオーバーしたときには二次希望のクラスに移動する。また、6 年間の到達目標として掲げられている「薬剤師として求められる基本的資質」について、毎回のガイダンスで Web アンケートを実施し、公表し、学年進行とともに、学生の意識が変わっていくことを、教育ならびに学生が共有している。</p> <p>これまで開講されたゼミナールのテーマを以下に例示する。</p> <p><u>1 年次後期</u>：物理系ゼミナール（量子力学超々入門、薬剤師としての基本的な計算方法をマスターしよう、物理化学を楽しく学ぼう、物理化学を理解する）、化学系ゼミナール（ハードボイルドドラッグワンダーランド、ベーシック有機</p>

●専門科目●グループ討議ならびにプレゼンテーションを取り入れた参加型学習

化学)、生物系ゼミナール (1 年次前期の生物系科目の理解を深める、ヒトはパンのみで生きられるか、サプリメントの有効性を科学しよう、微生物を知ろう)、総合ゼミナール (病いと人間、病院薬剤師について) など

2 年次前期: 物理系ゼミナール (GC/MS で薬草の成分を分析してみる、日本薬局方を読みましよう)、化学系ゼミナール (ベーシックコース、アドバンスコース)、生物系ゼミナール (病気を知り薬を知り治療を考える、身近にある免疫反応の仕組みを考える、微生物と戦う、脳や神経系の働きや病気に関する科学的な記事や書物の理解に向けて)、総合ゼミナール (村上春樹を読み書き語る、薬を巡る話、DVD を作ろう・薬学生のための実用英語、ボランティア) など

2 年次後期: 化学系ゼミナール (国家試験対応スペクトル解析演習)、生物系ゼミナール (医学・生物学の進歩に触れる)、薬・疾病ゼミナール (薬理学を学ぶために、日本の臓器移植・何が良くて何がわるいの)、創薬ゼミナール (新聞や雑誌の記事を通してくすりを考える)、総合ゼミナール (統計学の苦手意識をなくそう、薬のデータを集めよう、ビッグファーマのマーケティング戦略を読み解く、科学と人間、低体力者への適切な運動処方およびメタボリックシンドロームに対する予防を学ぼう、米国の薬局を見学しよう、ボランティア) など

3 年次前期: 薬・疾病ゼミナール (病気の予防と治療薬、病気と薬)、創薬ゼミナール (最近の DDS 製剤を知る)、健康・環境ゼミナール (医薬品や化学物質による中毒事件を検証しよう、これからの日本人の食を考える)、総合ゼミナール (症例から見えてくるもの、市販薬を調べてみよう、子どもへの薬教育について考える、卒後教育講座に参加しよう、ボランティア) など

3 年次後期: 薬・疾病ゼミナール (これからの薬剤師に必要な問題解決能力を磨こう、泌尿器・婦人科疾患の治療)、創薬ゼミナール (専門薬剤師って何)、健康・環境ゼミナール (環境の保全や修復を目指す最近の実例を調べてみる、食の安全・安心を考える)、総合ゼミナール (医薬品の分子薬理的理解を目指して有機化合物を読み解いてみよう、医療安全に関わる薬剤師の役割を考える、医療制度と薬剤師業務、メタボってなんだ、ボランティア) など

教室空間の特徴

可動式の机、椅子、ホワイトボード、プロジェクタを完備した教室で実施する。
1-3 年次の 3 学年の学生が同時に最大 20 教室程度を利用するので、可動式の机椅子を配置した教室を 12 室造設した。

特定の回の授業の流れ・時間配分

3 年次に実施している総合ゼミナールを例に示す (選択した学生数は 20 名とする)。
第 1 回目: 大学主催の卒後教育講座に参加する。
日曜日の午前 10 時から 17 時まで実施 (通常は東京医科大学病院の臨床講堂)
第 2 回目: 14:00-18:00 グループ分けならびに調査テーマを決定する。
卒後教育講座の講演で興味を持った内容について、全員の前でプレゼンテーションし、各自の調査の方向性を全員に紹介する。調査希望内容に基づき 5 グループに分ける。同時に、調査の基本的な方向について教員が指導する。基

●専門科目●グループ討議ならびにプレゼンテーションを取り入れた参加型学習

本的な方針としては、メディカルオンラインまたは PubMed を用いて調査、発展学習することを指定する。通常の Web 検索では、信頼性の低い情報、一般向けの情報が混在しているため、本ゼミナールでは Web 情報を用いることを推奨せず、医療人向けに解説されているメディカルオンラインに紹介されている内容以上のレベルにあるものを用いることを条件とする。また、最終回のプレゼンテーションは必ず「過去・現在・未来」の3点から構成されることを条件としている。

第3回目：14:00-18:00 グループワークならびに各自教室にて調査を行う。
各グループ内で調査テーマを更に細分化し、調査分担を決めて調査する。

第4回目：14:00-18:00 中間報告
各グループの分担と調査内容をプレゼンテーションする。教員はフィードバックする。

第5回目：14:00-18:00 特別講演（本学卒業生が講師として参加）とワークショップ

学生は「医薬品の副作用情報の蓄積の方法」について、グループワークを行ってまとめ、プレゼンテーションする。情報の収集と整理には KJ 法を用いる。製薬会社の開発担当者に来ていただき、学生の発表に対してフィードバックしてもらおうとともに、「副作用情報の蓄積の方法」についての講義を聴く。

第6回目：14:00-18:00 発表会
同日までホームワークも行い、パワーポのプレゼン原稿を作成し、レジメを作成する。全員がプレゼンテーションする。

プレゼン内容については、ルーブリック評価表を用いて、自己評価ならびに相互評価を行い、教員はプレゼン内容についてフィードバックする。ルーブリック評価の結果は、プリントして各自に返却し、次回以降の参考にする。

授業で特に使用しているツールとその活用法

情報センターのオンライン情報として、“メディカルオンライン”、“PubMed”、パソコン、パワーポイントを用いる。これらの情報ツールを使用し、情報の質を“医療人向け”以上に限定して調査する。パワーポイントを用いることで、プレゼンテーションのスキルを磨く。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

- ・卒業生が学ぶ姿に接する（ロールモデルである卒業生と接することによって、生涯にわたり学ぶ姿勢が大切であるという将来像をイメージすることができる）。
- ・選択科目を自ら選ぶ（自らの希望を示すことで、自主性が醸成される）。
- ・友人が増える（必修科目のクラスを超えて選択するので、新たな友人を作ることができる）。
- ・グループワークの習熟（司会進行、記録、発表など、役割を演じ、グループメンバーで討議を繰り返すことで、協調性、合意形成、コミュニケーション能力など、総合力を醸成する）。
- ・プレゼンテーションの習熟（複数回にわたり調査を行いプレゼン準備、リハーサルすることで、プレゼンテーションに関する技能、態度の醸成ができる）。

●専門科目 ●グループ討議ならびにプレゼンテーションを取り入れた参加型学習

<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>出席、プレゼンテーション、資料の提出によって評価する。プレゼンテーションはルーブリック評価表をもとに、相互評価する。</p>
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>ゼミナール修了学生の意見（5つのゼミナールを受けて感じたこと）</p> <ul style="list-style-type: none">●教員とのコミュニケーション 先生の話が聞きやすく質問もしやすかった／質疑応答がしやすい／すぐに疑問点を質問できた／すぐに質問ができる点は良かった／直接先生と話す機会が増えた／先生との会話が増え、意見交換や相談・先生の考え方に触れることができた／●学生同士のコミュニケーション クラスのメンバーと親近感が沸いた／クラス中の雰囲気よくなった／授業中の無駄話が減り、良い雰囲気のクラスになった／自分と同じ興味を持つ人たちと勉強したり考えたりすることができた／友達の輪が広がった／みんなと話せた／普段関わらない人達とグループを組み交流することはメリットあり／●自主性の尊重・能動的学習 自由度が高かった／自主性を求められた／自主性を尊重してくれた／集中してできた／基本的にワイワイガヤガヤできて楽しかった／個人が力を発揮する機会を多く与えられている／嫌でも自分で考えた／授業では受身になってしまう
<p>学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育学）</p>	<ol style="list-style-type: none">1. 資格取得を主目的とするため必修科目が非常に多い。その中で、複数年で実施する選択科目を設定することで、自らの希望で科目を選択することを実践する。2. 少人数学習を基本としており、参加型授業が実施できる。参加型の方略はグループワーク、プレゼン、調査などがあり、各科目担当者が最適な方法を採用する。結果的に、総合力の醸成が期待される。3. ロールモデルである、卒業生との交流の場を提供する。
<p>その他の特記事項</p>	<p>ゼミナールは6年制の開始とともに参加型学習を充実させるために取り入れた、全員参加の本学の独自プログラムで既に9年目を迎えた。毎年の教員の延べ人数は90名に及び、参加学生数は年間2000名を超える。大規模なプログラムであるので、上記の記載は全てのゼミナールを網羅できていないことを付記する。</p>

建築プロフェッショナル論

東北工業大学

工学部／建築学科

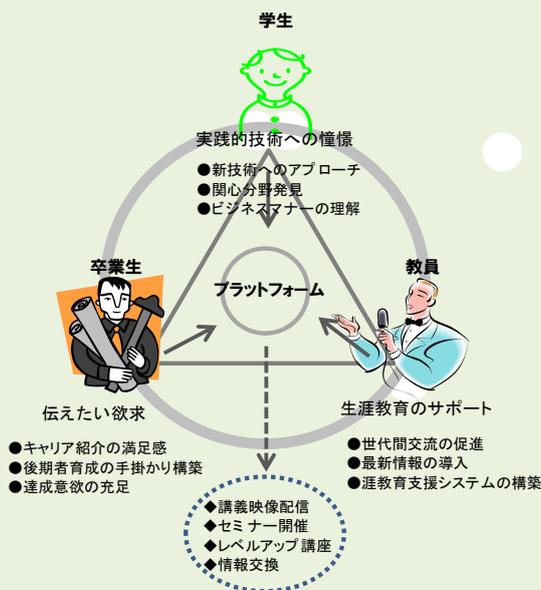
石井敏、谷津憲司、沼野夏生ほか非常勤講師（すべて本学科卒業生）12名

科目の位置づけ	建築学の分野は幅広く、建築を学んでいる学生でもその実態や全体像をなかなか理解していないのが現状である。そこで、今年度から新たに「建築プロフェッショナル論」という講義を開設した。これは、「建築の専門技術を活用できる職域を理解し、それぞれの分野に必要な基本的、実践的知識を現役実務者の講義により習得してもらうこと」を目的としている。
---------	--

受講（登録）学生数	130名
-----------	------

科目の到達目標	建築の専門技術を活用できる職域を理解し、それぞれの分野に必要な基本的、実践的知識を現役実務者の講義および演習により習得する。
---------	--

教育方法の特徴	<p>この講義は実際に建築の様々な分野で活躍する複数の卒業生を講師としたオムニバス形式で進められる。講師は社会人として必要な基礎的な知識やマナー、技術の中からテーマを設定し、実務の具体的事例を出しながら話す。講義は「学生・卒業生・学科(教員)の3者をつなぐプラットフォーム」の構築を目指している。卒業生に講師を依頼することにより、「学生にとっては、実践的技術への憧憬」を満ちし、新技術へのアプローチ、関心分野発見、ビジネスマナーの理解といった目的を達成できる。「卒業生にとっては、伝えたい欲求」を満ちし、キャリア紹介の満足感、後継者育成の手掛かり構築、達成意欲の充足といった目的が、「学科(教員)にとっては、生涯教育のサポート」が実現でき、世代間交流の促進、最新情報の導入、生涯教育システムの構築といった目的が達成できる。</p> <p>今まで講義の経験が無い講師が多く、授業内容に質の差が出ることは避けられず、それを少なくする工夫も必要である。</p> <p>学生の授業への興味を喚起するとともに、その講義毎の理解度把握といった面からも、学生と教員の双方向授業形式が望ましい。</p> <p>以上の点と「学生・卒業生・学科(教員)の3者」のプラットフォーム構築のためにも、ICTの活用が有効である。</p>
---------	--



教室空間の特徴

200人収容教室、プロジェクター、スクリーン（2枚）、机・イスは固定参加型授業支援ツール・リモコン型レスポンスアナライザ「エデュクリック」を開始前に受講生各々に配付。学生番号に対応したリモコンを配付し、講義終了後、返却。リモコン番号と学生とが紐付けされているため、出席確認にも活用できる。

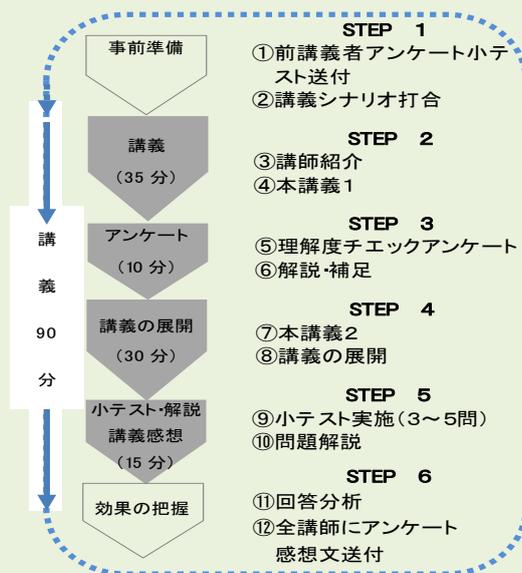
特定の回の授業の流れ・時間配分

複数教員によるオムニバス形式授業に起因する授業内容の「質の差」を少なくするための工夫として、次の2点を実施した。

(1) 授業プロセスの提示

授業の前後も含め次のプロセスを踏むことで、講師が受講する学生の実態を把握できるようにした。

- ① 事前に、前講義者アンケート・小テストの送付
- ② 授業前に、講義シナリオ打合せ
- ③ 講師紹介
- ④ 本講義1
- ⑤ 理解度チェックアンケート
- ⑥ 解説・補足
- ⑦ 本講義2
- ⑧ 講義の展開
- ⑨ 小テスト実施
- ⑩ 問題解説
- ⑪ 授業後に、回答分析
- ⑫ 授業後に、全講師にアンケート・感想文送付



この講義は、それまで実施した授業内容を受けてのリレー講義的な性格ももつため、事前にそれまで実施した全ての授業アンケートのデータと感想文を各講師へ送付している。

(2) 授業シナリオの作成

事前に授業シナリオのフォーマットを作成し、タイムスケジュール、テーマと一緒に講師に送付した。その構成は、授業時間(90分)を大きく4つに分けたもので、詳細は以下の通りである。

- ① 講義(35分)：講師紹介・テーマ説明(5分)と本講義1(30分)
- ② アンケート(10分)：理解度チェックアンケート(7分)と解説・補足(3分)
- ③ 講義の展開(30分)
- ④ 小テスト・解説・講義感想(15分)：小テストの実施と解説(10分)。感想文提出(5分)

授業で特に使用しているツールとその活用法

実施方法は、学生と教員の双方向授業を実現するために、参加型授業支援ツール・リモコン型レスポンスアナライザ「エデュクリック」を使用した。これはリモコン型の端末(クリッカー)による授業への参加形式で、全学生に一台ずつリモコンを配付し、講師の質問に答えてもらいながら進めるものである。

さらに、毎回授業の最後に感想文を書かせ、「エデュクリック」のデータとの比較や授業形式の検証ができるようにしている。

講義はビデオ撮影も行っており、その映像は優良なコンテンツであるとともに、検証データとしても有効である。

この授業で、参加型授業支援ツール「エデュクリック」は大きな役割を担っている。その場でリアルタイムに集計結果のグラフを提示したり、回答内容を個別の学生へ問いかけをしたりすることもでき、容易な操作でインタラクティブな対話形式の授業を進められる。その上、データのPCへの保存で、集計・分析して授業へフィードバックすることも可能である。

学生立場でのメリットは：

- ① 多人数が受講する講義でも、教員と一対一の関係がつけられる
- ② 学生が、全体の動向を把握することで、その中での自分の意見や考えの位置づけが理解できる

講師の立場でのメリットは：

- ① 集計結果のデータが保存されるため、次の講義のためのデータ分析が素早くできる
- ② 授業内容を随時修正しながら実施できる

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)

今回、実際にアンケート結果とビデオ映像より、次の効果が確認できた。

- ① 授業への参加意識をもつことによる興味喚起とそれによる私語や居眠りといった行為の減少。
- ② 授業への理解度を把握した上での再説明や補足説明。それによる理解度の深化。
- ③ 複数教員によるオムニバス形式授業で起こりやすい各教員による授業内容の質の差の減少。

今後は、アンケートの分析結果を提示することにより、次のような効果も期待している。

- ① 関心のある専門分野やその授業成果を知ることによって、学生が自分自身の特性を把握できる。
- ② 講師の属性が、学生の興味や理解度とどう関わっているのかが把握できる。

学習成果の評価・測定 の方法

毎回の学生からの素直な感想・コメントはこの講義の価値を計るのに十分であり、また個々の学習成果を評価・測定する上でも十分活用できる。毎授業最後に行う「エデュクリック」を用いた確認テスト(アンケート)は、正解するか如何に関わらず、リアルタイムでその結果が見えることから、その場で結果を講師と共有しながら、コミュニケーションできる点も

本科目についての学生からの 評価

他の講義と比較し、この講義では授業への興味や集中力が明らかに高くなっており、それは私語・居眠りの減少やアンケートの記述からも確認できた。自分の進路に対して、新たな可能性に気づいた学生も多い。これは、授業への参加意識があること、講師が卒業生である親近感、幅広い分野の実務の話が聞けることと無関係ではない。以下、学生が各講義で書いた感想の一部である。

「考える力を身につけるためには、自分たちの主観でものごとを判断していかなければならない探求心を持ち、いろいろな未知の場所を見つける。時間がかかっても構わない、新たな発見があるかもしれない。」「今回の講義で社会人として重要なことを確認することができて本当に良かった。特に建物に関わることを体験で語っていただいたこと、経営組織について分かりやすく説明されたことは進路について迷っている自分にとってとてもためになった。」「今回の講義では講師の仕事の話を踏まえ、コミュニケーション能力、自分のやりたいことの伝え方など、社会に出てからの貴重なことをたくさん教えていただいた講義であった。」「家族の事なども含めて仕事をどのようにしてきたかを話していただいた事で自分がこれからどのような人生を送っていきたいかを考えるきっかけになりました。様々な場面で説明することが大切だと分かったのでこれから「言葉の力」をつけていきたいです。」「建築技術者として、工期やコストなどを守ることは大切だが、それによって品質に問題のあるものを自分の判断でごまかして使用するという事は、絶対に行ってはいけないことだと感じた。」

学生の学習のあり方や教授法の 果たす意味等に関する、担当 者の基本的な考え方（教育哲 学）

特に100名を超える講義においては、遅刻等を減らし集中できる環境をつくること、90分間の授業時間において集中力を維持させること、講師と学生との一体感を作り出すこと、一回一回の講義で印象に残る刺激を与えることが重要となる。専門分野の第一線で活躍する技術者からの講義、かつ身近な卒業生からの講義であることは、学ぶモチベーションを高め、進路検討や将来目標設定に大きくつながる。毎回、講師が代わるオムニバス形式であることも学生に大きな期待と刺激を与え、プラスに働いている。専門的な知識の教授とともに、自らが学んでいる内容や環境に誇りと自信を持たせることができる点でも大きな意味を持つ講義である。

授業風景



●専門科目（講義） ●卒業生を講師にしたオムニバス形式の講義



その他の特記事項

公益社団法人 私立大学情報教育協会「教育改革 I C T 戦略大会」（2014/9/5）
における発表講演（東北工業大学・笹本剛）原稿を加筆修正して掲載するものである。

3DCG

福山大学

人間文化学部／メディア情報文化学科
渡辺浩司・中嶋健明（非常勤講師）

科目の位置づけ	学科専門科目（表現・制作領域、2年次配当）として開講している。3次元コンピュータグラフィックスは、テレビ・広告・ゲームなどさまざまな場面で利用されるので、映像制作系の演習、ゲーム制作などに関連する。また、単に作品制作への展開だけでなく、企画立案やプレゼンテーションなど、社会的なコミュニケーションスキルの育成も目指している。
受講（登録）学生数	22
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">・3次元コンピュータグラフィックスソフト Blender の操作ができるようになる。・3次元コンピュータグラフィックスの実制作を通してその方法論を体感的に理解する。・実際の風景を制作するための取材活動を通してコミュニケーションスキルを身につける。
教育方法の特徴	<p>3DCG は 3 次元コンピュータグラフィックスの原理および作成法を学ぶ演習である。こういった演習では（本演習でも以前はそうであったが）CG ソフトの使用法習得を重視し、パソコンの前で与えられた課題制作を行うことが多い。しかしながら、実際の風景を、その場に赴いて、その空気を感じながら取材を行ったうえで再現することで、単に与えられた課題を作成するよりもより「リアル」な作品作りができると考え、平成 25 年度は福山大学最寄駅である松永駅の商店街、平成 26 年度は鞆の浦のストリートビュー制作を行った。松永駅前商店街はいわゆるシャッター街となっており、その活性化の一助とされるように、鞆の浦は「埋立て架橋計画問題」に関連した景観問題に寄与できるのではと考えて CG 化の地域として選定した。</p> <p>また、作品上映会を映画館などで開催し、広く一般の方に見てもらう機会を設けてコメントなどを頂くことで、作品に対するフィードバックが直接得られるようにしている。加えて、作品を地域の再開発に活用したいというニーズもあり、こういったことは学生のモチベーション向上につながると考えている。</p>
教室空間の特徴	演習は標準的なパソコン教室で実施している。40 台の PC とプロジェクタが設置されている。
	本演習は毎週 2 コマ、計 30 コマ実施される。演習の前半はパソコン室で 3 次元コンピュータグラフィックスソフト (Blender) の操作法を学ぶ。演習後半で松永駅前商店街のストリートビューを作成するために、第 7 回目の演習 (90 分×2 コマ) で松永駅前の取材活動を行った。

特定の回の授業の流れ・時間配分

- 【演習開始時】：松永駅近くにある福山大学の施設（※：後述）に集合。
- 【30 分間】 商店街ストリートビューを作る意義の説明
- 【15 分間】 全員でストリートビューを制作する範囲を見学
- 【30 分間】 施設に戻り、ストリートビュー制作において気になる点（建物の形状が複雑である等）や、街そのものに対する感想を受講者全員で話し合う
- 【30 分間】 学生一人一人が担当する建物を教員が指定しながら、再度商店街を見学。教員が建物ごとに制作時に注意すべき点についてコメント。
- 【15 分間】 施設に戻り、この後行う取材活動における留意点を指導
- 【40 分間】 各自が担当の建物の撮影を行う
- 【20 分間】 教員による取材成果のチェック及び学生間での意見交換

※)「17. その他の特記事項」に記載した、プロジェクト M の地元基盤となる施設。2 階建ての民家を大学で借り上げ、講義・講習会が開催できるよう改装。

授業で特に使用しているツールとその活用法

- ・使用する 3 次元コンピュータグラフィックスソフトは **Blender**(参考 URL <http://blender.jp/>)というフリーソフトである。パソコン室には有償のソフトも導入されているが、学生が自宅でも学習可能とするためフリーソフトを用いた。
- ・取材で撮影した写真の修整には **Photoshop** を用いている。
- ・使用 PC は比較的高性能な CPU を搭載しており、快適な演習環境となっている。

学習成果 (学生は何ができるようになったのか)

- ・コミュニケーション能力が不足している学生が多いと思われるので、CG 作成の現地調査等、地元の方々と自ら交渉する機会を設けた。撮影の許可を得ることや、通りがかりの人の問い（何をしているのか？等）への対応など、基本的な力の育成には効果があったと考える。
- ・商店街の大学拠点で制作物の上映会を実施し、地元の方々から作品についての数多くのコメントをいただいたり、会の終了後の懇談会では商店街の歴史などの話を聞くなど傾聴力が身についた。
- ・一つのストリートビューを受講学生全員が共同で作成するので制作スケジュールの調整から、現地調査、各自の制作物の統合等、協調して作業を行う必要があり、これによりチームで働く力が十分に身についた。
- ・講義開始当初は教員の指示が無ければ行動できなかつたり、作業に消極的であった学生も見受けられたが、最終的にはそのような学生はほぼ居らず、総括となる作品上映会では作品のプレゼンテーションをほぼ全員が積極性を持って行ってくれていたこと自主性・積極性を持つことができた。
- ・学生の忍耐力の育成にも効果があった。ストリートビュー作成では現実の街並みをどれだけリアルに再現できるかが肝であり、現地で撮影した写真から家屋を作成する作業には相当の根気・忍耐強さを必要とする。中間発表会を開催し学生相互にコメントを述べ合うことで安易に完成・作業終了としないようにした。

学習成果の評価・測定の方法

評価はすべて教員2名の協議で行った。制作物の評価は

- ・制作中の中間報告（プレゼンテーション）
- ・制作物の仕上がり
- ・制作物上映会でのプレゼンテーション

をもとに行った。制作物の評価は通常制作系演習と同様に作品の完成度で行った。

本科目についての学生からの評価

本大学で実施している授業評価アンケートの結果（授業に対する評価項目）を示す。すべて5が最高値である。

進め方：4.2、話し方：4.2、計画性：4.2、授業時間：4.7、講義の工夫：4.0、質問への誠意：4.6、難易度の適切性：4.0、満足度：3.8

ほぼすべての項目で4以上となっており学生からの評価は高いと言える。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

教育哲学と呼べるようなものではないが、制作系の演習は、なるべく室内に閉じたものにならないようしている。ストリートビュー作成の取材を通してコミュニケーション力・実行力、実際の制作では根気の育成を目指している。さらに本演習では最終的に個々の作品を一つの街に統合する必要があり、その作業において協調性や、リーダーシップが育つと考えている。3DCGのような制作系の演習であっても、こういった社会人として必要な様々な能力の育成は可能であると考え、実践している。

また、鞆の浦などはインターネット上で数多くの写真が公開されており、実際に取材しなくても町の再現には十分なデータを得ることは可能であるが、その場に赴きその場の空気を感じる事が制作においては非常に重要なことだと考えている。

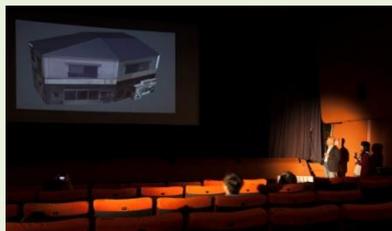
昨年度および今年度は教員サイドで近隣地域の抱える問題等を考慮して制作する場所を決定した。今後は、学生達自身が地域に目を向け、そこで発生している問題の発見し、見つかった問題の中から、CGが解決に寄与できるものを選定するようなスタイルにしたいと思っている。

授業風景

【松永ストリートビュースクリーンショット】



【松永ストリートビュー上映会】



【松永の取材で撮影した素材写真】



その他の特記事項

福山大学ではプロジェクト M という、大学の所在地である松永地区、特に松永駅北口にある商店街を活性化する試みに 2012 年末から取り組んでいる。商店街内の一店舗を大学が借り上げてプロジェクトの拠点とし、地元企業の見学や地域のまちづくり推進委員との連携、祭りへの参加等積極的に地域に溶け込んでいる。新聞にも何度も取り上げられるなど、地域に根付いたプロジェクトになりつつありその結果として、地元の方からの福山大学生への信頼も得られてきている。

そういった背景があるため、大学拠点で行った制作物発表会では商店街の責任者を始めとする非常に多くの地元民の方にご出席いただき、CG に対するコメントや CG の用途に関するご提案等、様々な意見を頂くことができた。今回作成したストリートビューは商店街の一部のみであることから、来年度以降も継続して本プログラムを実施するための協力も得ることができた。

ファッション プレゼンテーション企画製作

(ファッションショーの開催)

文化学園大学

服装学部／服装造形学科
永富 彰子、平良木 啓子 他

科目の位置づけ

文化学園大学服装学部服装造形学科ではファッション界を牽引するにふさわしい幅広い国際的教育を身に付けるとともに、高度な専門的知識と技術を習得することを基盤としている。そこで、ファッション領域の基礎として 1, 2 年生で必修 32 単位、選択 15 単位を取得の上、3 年次において本科目を設定することにより、専門科目における企画力・技術力、論理的な思考力を習得し、多面的な視点でグローバルに社会への発展に寄与できる能力を有することを目的に、ファッションショー形式で公開発表するものである。また公開発表時（プレビューも含め 3 日間 8 公演）の観客数は学内外を含め約 7,000 人を超える規模となっている。

受講（登録）学生数

260 人

科目の 到達目標

本プレゼンテーションは、ファッションショーのテーマとコンセプトを掲げ、学内外へ発信することから、6 つの特徴別コース 9 クラスの計 260 人が 1 テーマに沿って一丸となることが最も重要である。企画、デザイン提示、素材の検討、縫製・装飾の試作など得意分野の相違による思考の違いを、数回の小発表や全体発表を繰り返すことにより反省と思考の中から調和を見出すことができるコミュニケーション能力を身につける。

教育方法の特徴

本学部学科におけるファッションプレゼンテーションは年 1 回開催しており、平成 25 年度に 28 回目を迎えた。テーマ設定についてはその年ごとの社会情勢、特徴を学生としての視点から検討し、パワーポイントなどによるプレゼンテーションにより教員との検討会を開催するなど学生の主体性と協働力を引き出すことができる。また、9 クラス（シーン）それぞれにも小テーマを設け、デザイン決定に至ることから、クラスの学生同士による資料の持ち寄りや試作などの検討会が開催されることにより他クラスとの競争による相乗効果も得られる。さらに、衣服製作においては、既成の資材を使用するのではなく、織り、編み、染色、素材をつまむ・重ねる・裂くなどの加工をするなど、素材そのものを作り出す、つまりオリジナリティーをいかに生み出すかに工夫をしていることから、教員と学生が一体となり試行錯誤に多くの時間を費やしている。最終的なプレゼンテーションに向けてモデルウォーキング練習、ヘアメイク練習を教員指導のもと過去のビデオ等による勉強会が開かれている。また、

●専門科目●ファッションショー形式で公开发表

	<p>舞台デザイン、演出、照明、音響、映像も学生が行うことから、教員の指導のもとリハーサルが繰り返され、プレゼンテーション本番に向けての学生と教員全員の心の統一感と緊張感をひとりひとりが感じ取ることができる。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>服装造形学の実習教室で、衣服のパターンメイキングや布地の裁断、縫製などが行えるように裁断机と呼ばれる 180×90 cmの大きな机を使用している。この実習教室においてグループディスカッションや作品製作を行うため、机は可動式である。広さが約 112 m²の教室で裁断机 1 台を 2 人で使用し、40 名収容している。設備は、裁断機の他に黒板・スクリーン・プロジェクターなどの一般の教室と同様の物と、職業用ミシン・ロックミシン・バキュームアイロン台・アイロン等の作品製作に使用するものが置かれ、作品製作の際に教室内の棚から学生が持ち出して使用している。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>6 回目の授業「シーン活動① イメージマップ制作、素材・技法の検討」2 コマ (180 分)。</p> <p>次々回の全シーン合同での発表会に向けて、クラス (シーン) ごとにシーンのコンセプトに基づいたイメージマップの制作と、デザインを表現するのにふさわしい素材を検討し、技法の試作等を行う。</p> <p>まずは、全員でシーンのコンセプトを固めるために、キーワードを挙げ、そのイメージビジュアルを持ち寄り検討する。黒板やプロジェクターを用いて、クラス全員のコンセプトに対するイメージを共通のものとする (45 分)。</p> <p>その後、デザインバリエーションを考えるグループ、素材探し・検討をするグループ、技法の試作を行うグループ、シーチングを用いてシルエットの検討をするグループに分かれ、作業および検討を行う (105 分)。</p> <p>最後に、授業内で各グループが行ったことや、検討事項、全員に確認したいことなどをグループリーダーが発表し、各作業のことも全員が把握しているようにする。そして、次回までの課題と次回の作業内容を確認する (30 分)。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>各シーンの検討内容の発表には PC を使用して作成したスライドをプロジェクターで投影し、デザイン画や技法・色などを視覚的に伝達できるようにしている。また、クラス内でのディスカッションの際にも実物投影機 (プロジェクター) を用いて、集めてきたイメージビジュアルや技法などをクラス全員が一度に見られるようにしている。</p> <p>作品製作や、技法の検討には、職業用ミシン、ロックミシン、アイロン、バキュームアイロン台などの縫製・仕上げ機器を用いている。この他にデザインによっては、工業用の特殊な縫製機器などを使用することもある。</p>

学 習 成 果
(学生は何ができるようになったのか)

ファッションショーの実施に向けて学科全体の中で、各シーンにおいて学生一人一人が自主的に取り組むことで、1・2年次までの与えられた課題に取り組みながら学ぶという姿勢から、自らが発想しグループのメンバーに発信してクリエイションするようになり、自主性と共に他者とのコミュニケーション能力を身に付けている。さらに、学科全体へ正確に自分たちのシーンの意見を伝えるための工夫をすることでプレゼンテーション能力も磨かれている。

作品製作においては、新しい素材・技法・フォルムなどに挑戦し、経験したことのないデザインを造形するための取り組み方など、技術面の成長も大きい。個人での製作ではなくグループで作り上げるため、意思の疎通、責任の分担などが必要になり、自分の意見だけではなく全体の中の自分というものを理解し、その上で求められる役割に応じて働くことができるようになっている。

この授業により、各自の企画力・デザイン力・造形技術・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力が向上し、より専門性を高めることができる。

学習成果の評価・測定の方法

学習成果の評価は、主に授業への参加度、作品の制作態度、係りの活動態度にある。授業への参加度は、各自の資料収集による自分の意見をまとめクラスでわかりやすくかつ説得力ある発表内容であることについて評価をする。また、作品の制作態度は、担当している学生同士のグループワークを円滑に運ぶ工夫をしているかについて評価をする。係り活動態度は係りによって、本職のアドバイスを受けることや教員の指導にウエイトが大きいためコミュニケーションが円滑にとれているかについて評価をする。

本科目についての学生からの評価

ファッションプレゼンテーション実施後のアンケートにより以下の意見を得た。

○1, 2年生の基礎があるから自主的に資料を収集することができた。

○自分が着たい服ではなく、テーマ、コンセプトという条件設定があることによって、多くの人の意見を受け入れることができるようになり、その中に自分をも見出すことができるようになった。つまり他者を認めることの大切さを知った。

○ファッションショー本番を終えた時の達成感は、努力が無駄ではなかったという充実感と自信につながった。

○本科目履修前は、あまり話をしたことのないクラスメイトや、他クラスの学生とあいさつをするようになり、友人が増え、その後の授業でも意見交換ができるようになった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

ファッションというイメージは、学問というより個人の趣味と受け取られがちであるが、

本科目では、卒業後の就職を意識した商品化、売り手側の視点でプレゼンテーションをすることを体験できるように設定したものである。従って、プレゼンテーションの目的を理解した結果への導き方法には時間を十分費やすことで自分の考え、友人を認める、教員の指導の理解をする、などの成長が得られ、最終的には人間形成の過程の一部となることを意識して学生と向き合っている。

授 業 風 景

●専門科目●ファッションショー形式で公開発表



パンフレット作成の指導と検討風景
検討風景



衣装の試作によるデザイン



装飾の試作による検討風景



ファッションショー本番

その他の特記事項

卒業生の大学訪問時に、「社会人として数年が経過したが、人間関係で悩むこともなく、忙しい仕事もひとつひとつ努力をすれば達成できることを知っているから苦痛はない。これも、ファッションプレゼンテーションの経験が大きい」という報告があった。本科目の取り組みの結果、仕事の定着率にも繋がっていることが分かった。また、学内の他学部の学生や下級生からは自分達も負けない出来栄えにしたいと意欲ある意見や、学外からも学生のレベルを超えているという高い評価を得ている。

ヨーロッパ主義史

宮崎国際大学

国際教養学部

パーカー ジョナサン

科目の位置づけ	三回生もしくは四回生
受講（登録）学生数	17
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">● この分野の書物を読み、理解し、分析また討論をする。● この分野における根本的な考えを批評する。● この分野について筆記と口頭形式で取り組む。● 今もなお西洋の人物や機関を形づける主な考えを理解する。
教育方法の特徴	<p>このクラスは“Just in Time Teaching” (JiT)で知られている教授法を取り入れています。講師によって作られたテキストが Moodle に記載されているので、これを生徒が家で読みます。この時初めて生徒はこの内容に触れます。このテキストを読み終えた後に生徒は課題がだされます。この課題は文章問題や批評問題で構成されています。文章問題は生徒の読解力を図る事ができます。批評問題はどれだけ読んで得た内容を理解し、適用する事が出来たかを図ります。生徒はこの課題を授業前日の夜までにネット上で提出します。そうする事によって、講師は授業当日の朝に課題を評価し授業前に生徒の理解度を知る事ができます。書物の内容は授業中に話し合い分析します。授業前に生徒の課題を評価する事にはその日の授業内容を変えるといった利点があります。これが JiTT の要素です。例えば、もし多くの生徒が特定の概念の内容理解に苦しんでいる事が分かれば、その日の授業内容をその特定した概念理解に務めるよう討論や他のアクティビティーを進め、生徒の理解をより深める事が可能になります。このメソッドは今までの典型的な授業後家に持ち帰り課題に取りかかり、後日講師に提出するメソッドよりも確実に利点があります。従来の形式だと既に生徒が理解出来ている点の説明に時間を費やし重複する事になり、肝心な不明な点を重点的に講義する事が出来ず、講習時間を有効に使用する事が出来ません。JiT の形式だと事前に生徒が理解に苦しむ要点を知る事が出来、それに応じた講義を授業前に構成する事ができるのです。</p>
教室空間の特徴	<p>特徴の一つとして講義は全て英語で行われ授業中は生徒同士も英語でコミュニケーションを行います。講義前に机は3名から4名程度で構成されるグループに並び替えます。授業中生徒同士討論しながらアクティビティーをこなしていきます。この並び替えたグループ形体は答辯や積極的な取り組みを促す事ができます。講師がコンピューター施設を用意し一人一人にコンピューターを与える事も時にあります。このラボを使用する事で講師によって Moodle で構成</p>

されたアクティビティーに取り組む事ができます。

特定の回の授業の流れ・時間
配分

1. 始めの10分間は、前の授業に取り組んだ内容のお復習をします。様々な戦略を用いて必ず生徒が主となり積極的に内容の復元または表現に取り組みます。これらは以前クラスで学んだ内容を単語三つくらいで表記し、パートナーと話し合うと言ったような簡単な事でも良いでしょう。数名の生徒から異なる内容を発言してもらう事で以前の講義内容を有効に復習する事が出来ます。
2. 次の10分はその日の講義内容への導入です。講師が生徒に課題の答をパートナーと話し合うよう進めていきます。これはもう一度生徒に課題の内容そして質問に対する答えを考えさせるためです。その日の課題内容をリフレッシュさせるのに最適です。また他の生徒の質問に対する答えを聞き話し合える良い機会にもなります。
3. 講師は生徒から課題の答を聞き出し、これを機会に難しい概念を明確にしたり、さらに生徒の理解を深めたり発展させたりします。この部分は5分から10分程度かかります。
4. 次の20分から25分は生徒が主体となった教授法を用いて 課題に対する理解を示したり、学んだ内容を違った場面で応用したりと積極的に生徒が取り組める講義内容で更なる理解を図ります。講師はその日生徒に学んで欲しい鍵となる概念を中心にアクティビティーを構成していきます。時には前夜に提出された課題の結果で、多くの生徒が理解し辛かった内容を重点的にとらえた内容に変更する場合があります。もし主要内容の理解に苦しむ場合は、特定の箇所のアウトラインや言い直し等のアクティビティーが要求されるかもしれません。講師はアクティビティー中に個々を訪れ、生徒の理解を確認した上で題に触れます。もし生徒がある程度の理解を示したら、学んだ事を違うケースで応用するアクティビティーに進みます。学んだ主要内容をどのようにして違った状況で適用出来るか個々に考えそしてその後パートナーと話し合いを行います。
5. 講義の最後の箇所の20分間は、前夜に提出した課題の批評部分の返答について意見交換をしてもらいます。これらの問題もまたテキストから読み取った内容をどれだけ理解し応用出来るかを図る事が出来ます。これらの問題は大抵の場合難しく、自力で読んだ後高度な返答ができる生徒はごく僅かです。しかしながら授業中のアクティビティーに取り組む事によって、より内容の深い答えを生み出す事ができます。授業の最後には講義内容への理解を深め、鋭い感性で取り組む事が出来ます。
6. 最後の5分間は復習にあたります。ここで再度その日の主要内容をもう一度復習します。生徒たちに講義内容の重要な点を要約してもらうのが一番好ましいです。生徒の返答を聞く事によって講師も講義中どれだけ有効に目的を果たす事が出来たかを決定づける良い機会になります。

●上位クラス●Just in Time Teaching” (JiT)という教授法による授業

授業で特に使用しているツールとその活用法

この授業で使われる主なツールは英語です。宮崎国際大学に通う多くの学生の目的は英語力の向上です。全て授業に使われる教材や講義、討論は英語で行われます。英語はあくまでも講座内容を理解する上でのツールであり、英語学習が主体ではありません。他のツールは Moodle です。Moodle に全ての講義内容が載せてあります。生徒がそこからテキストを読み、課題を提出し、講師から評価を受けます。このように構成されている授業には Moodle のようなオンラインで管理出来るシステムが重要です。

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

このクラスで生徒たちはテキストを批評しながら読む力を高める事が出来ます。哲学の教材に接し、主要ポイント自ら探し把握し、それらに対する問題に答える能力を育てます。講師による課題へのフィードバックは、質問に対してより内容の深い返答に繋がり、またより良く理解出来る道へと導いてくれます。講義中のアクティビティーは生徒がどれだけ教材を理解出来ているか知る事ができ、その結果講師が有効的に生徒の内容理解に努める事が出来ているか知る事が出来ます。必然的に生徒たちはより深く教材について理解する能力を養い、書く力がつくのです。生徒たちは細かな評価をもらうことで、テキストへの的確な理解のみだけではなく、書く力も養う事ができるのです。受講中の口頭での弁論によって英語を話す力も身につける事ができます。

学習成果の評価・測定
の方法

生徒は授業前に必ず課題を提出します。講師は提出した生徒全ての課題を評価します。この課題で生徒がどれだけ内容を理解出来ているか講師が把握する事ができます。講義中のアクティビティーによって生徒がどれだけ内容を把握出来ているか、また講師がどれだけ有効的に生徒の更なる理解に貢献出来ているかが分かります。講義は幾つかのユニットに分かれていて、それぞれのユニットごとに主要内容に関するエッセイを4つ書きます。そして学期末に口頭と筆記の試験があります。口頭試験は筆記試験で書いた内容を説明し更に発展させる機会になります。

本科目についての学生からの
評価

JiTT を用いた講義をするのはこの学期が初めての試みです。以前この学科を提供したときは、典型的な形を用いた講義方法でしたが、生徒の反応はとても良かったです。平均して授業中に自分の意見を発言出来、受講内容に対する質問の答を得る事が出来、新しい見解や情報を探究する事が出来たと評価されました。また授業以外でも、講義中に学んだ事を他のシチュエーションで応用出来る機会があったと聞きました。JiTT を取り入れた事により、講義内容の理解を以前より深め事に繋がり、結果以前と同様、もしくはより良い評価が期待出来るのでは無いかと予測しています。

●上位クラス●Just in Time Teaching” (JiT)という教授法による授業

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

生徒は講師によって教えられるより、自ら学ぶ事でより教材を理解出来ると考えています。生徒が自ら理解しようと努力し、その上で講師からフィードバックを受ける事によって、情報をよりよく学ぶ事が出来ます。初めて教材に携わるのが教室で講師からという受け身体制ではなく、家でまずは自らの力で理解しようと努力し次に講師からフィードバックを貰う事で自ら難しい点を明確にしていく機会を与える事が重要だと考えます。その為課題として新しいテキストを読む宿題を出し、本人の理解力を試す為の問題を出し、それをクラスで答弁します。生徒は授業時間の大半を積極的に教材に取り組み他の生徒と答弁します。講師が JiTT を採用する事により生徒が主体となった教授法になっています。授業外で生徒たちは沢山の時間を費やす必要があります。授業外で勉強する時間が少ないと、このクラスを最大限有効に活用する事は出来ません。授業中に講師が説明する機会は沢山あります。この様な説明は自分で取り組んだ事に対してのフィードバックになり、全く知識が無い状態で初めて講師から講座を受けるより、内容に対しての理解を深める事ができると考えます。

授業風景

この講座はヨーロッパ主知主義史において重要な概念や人物を取り上げます。このクラスは4つの主な歴史を元に分けられています。1) 古代ローマ・ギリシャ／基盤
2) ルネッサンスを含む中世時代
3) 近世
4) 近代
それぞれの箇所では生徒たちは主な歴史人物またヨーロッパ主知主義史において多大な影響を及ぼした考えを取り上げています。生徒たちは今もなお西洋の人々の暮らしの基盤となり西洋での機関を形づけている重要な考えを学びます。生徒たちはこういった考えが何処からどうやって生まれどのように発展していったのかを学びます。

その他の特記事項

この教授法は生徒たちに所有権を与え多大なる責任がかかります。生徒たちが自ら教材への自身の考え、理解を形成し、異なったシチュエーションで応用するといった多大な時間を費やす必要があります。もし課題をせず授業に挑むとするならば、授業時間を最大限有効に使う事は出来ないでしょう。生徒が所有権をもち自身の学習に責任を持って初めてこの教授法が最大限に活かされると思います。

フィールドスタディの方法2（資料分析）

目白大学

社会学部地域社会学科

高久聡司

科目の位置づけ

「育てて送り出す」を教育理念とする目白大学の一学科である本学科の学びの特色は、フィールドワークの実践（アクティブラーニングとしてのフィールドワークの活用）と学内での座学をクロスオーバーさせ、社会に関心を持ち、社会の一員であることを知り、社会に働きかけていく人材に育つように学生の成長を促し、「社会で生き抜く力」を養うことにある。そのため本学科では、フィールドワークについて、第1に現場に出ることを通じて、現場で気づき・考え・行動するための基礎力を身につけると同時に、自己を規制し他人と共に生きていく力（主体性・積極性・協調性）を涵養するための手段、第2に、目まぐるしく変わる現代社会の動きや特徴、地域の人々の暮らしや生き方などを分析しながら、日々生起する社会の様々な出来事の意味を考える力（思考力・分析力）を涵養するための手段と位置づけ、1年次必修科目としている。

本科目、「フィールドスタディの方法2（資料分析）」は、「同1（資料調査）」「同3（景観分析）」「同4（聞き取り調査）」の4科目と並び、本学科の学びの体系の基幹科目となっており、様々な調査法の理解とその活用に向けた準備段階として設定されている。本科目は、主に映像資料の解釈をもとにしたメディアリテラシー、官公庁の統計、アンケート調査、世論調査などの様々なデータを読み取る能力、量的調査を行う上での基礎となるサンプリング、質問票の作成・分析能力を高めることを意図している。

受講（登録）学生数

87人

科目の到達目標

積極的に現場に出かけ、見て、聞いて、調べて、手元に大量のデータ——インタビューのメモ、写真、アンケート用紙、あるいはその「現場」に関する文献資料 など——を集めることがフィールドワークというわけではない。現場において経験した事柄から問題意識を構成し、そうして得られたデータを分析・解釈してはじめてフィールドワークが成立する。そのための基礎として、本講義では、さまざまな資料や調査データを分析・解釈する方法について講義するとともに、具体的な資料・調査データの分析・解釈を学生が協力しながら行う。この一連のプロセスをグループワーク形式で学ぶことで、

- ①社会の動きを映像や資料から自ら読み取る能力（主体性・積極性）
- ②他者と協力して課題を遂行する能力（協調性・課題遂行能力）
- ③数的データを解釈し、クロス表やグラフにまとめ説明する能力（論理的思考・数的処理）

といった、企業が大学生に求める能力の基礎を身につけることを到達目標としている。

教育方法の特徴

本学科全体の教育方法の特徴は、興味・関心から自分が熱意を向けられるテーマを見つけ、それにこだわり、自分で調べ、まとめ、発表することを通して、「社会で生き抜く力」を身につけることである。そのための見取り図は、以下の4つのプロセスに分類できる。

- ①**社会への関心を持つ**：「現代」「国際」「地域」の3領域の科目群に関連する「カルチャー・メディア」「観光」「都市」といったキーワードから現代社会の特徴を理解し、興味・関心を広げていく。
- ②**こだわりのテーマを見つける**：興味・関心を研究テーマへと展開させる。
- ③**テーマをもとに学内外で調べ、考える**：フィールドワークに取り組み（学外）、その成果発表に向け、資料分析を行い、自分の考えをまとめる（学内）。
- ④**プレゼンテーション**：考えをレポートにまとめ、プレゼンテーションの技法を学ぶ。

本科目では、上記プロセスの中でも、各自が設定するテーマに関する資料を分析する方法の基礎を習得することに重点を置いている。そこで、大教室ではあるが、担当教員の一方通行的な授業となることを避け、学生の「学ぶ意欲」の向上、積極的な授業参加を促進するため、4～5名からなるグループを設定し、授業時間中にわからないことを他者と考える時間、グループ課題とした質問票（テーマ：「地域社会学科1年生の特徴を探る」）の作成・集計・分析に取り組む時間を設定し、その成果発表の機会を設けた。グループワークの時間には、担当教員が各班に声をかけ、授業の理解度を確認するように努めた。

グループワークを設定した理由は、本学科に限る話ではないが、文系の学科に進学した学生の多くは、統計データの解釈やクロス表の作成といった数的処理に苦手意識を持っており、このような科目に学習意欲が沸かない者がいて当たる前だからである。その対策として、プロ野球選手の成績、フリーターやニートといった学生に身近かつ関心の高いトピックを用い、他者と協力しながら、苦手意識を克服し、学習意欲を向上させることに取り組んだ。

その他、毎回の授業では、授業終盤の10～15分くらいで理解したこと、疑問点などをコメントカードに記入させ、翌週の授業冒頭10～15分くらいで、復習する時間を設けた。

教室空間の特徴

1年次配当の必修科目であるため、大教室（200人定員：固定式の机）が割り当てられている。そのため、一見するとアクティブラーニングを行うには適した空間とは言えない「普通」の教室空間である。だが、①前後2列で1つの班を配置すると、学生は主体的に回転式の椅子を活用し、話し合いを行うといった工夫をするようになった点、②空間的余裕（200名定員教室：受講者87名）があるため、各班の作業スペースが確保でき、他の班に気を取られずにグループワークに集中しやすい環境が整えられた点など、授業内容・目的を遂行するためアクティブな空間として教室を活用できたことが特徴である。

また、階段教室であることを活かし、担当教員が各班の動向をつぶさに把握し、即座にアドバイスなどを送ることを心がけた。

特定の回の授業の流れ・時間配分

全 15 回の授業は、1つの班を 4～5 人とするグループ分けを行った後に、①映像資料の解釈（メディアリテラシー）、②社会調査・世論調査の問題点（サンプリング、質問票のワーディングなど量的調査の基礎）、③担当教員が受講学生に行ったアンケートの集計・分析・解釈（量的調査の基礎）、④様々なデータを用いたクロス表の作成（グループワークによる協調性の涵養）、⑤「学科 1 年生の特徴を探る」をテーマとする質問票の作成・集計・分析と発表（グループワークによる課題遂行力の涵養）という 5 つのテーマに沿って展開した。

尚、各回の講義は、冒頭 10～15 分が前回のコメントカードを元にした復習、60 分程度が各回のテーマに沿った講義とグループワーク、残り 10～15 分がコメントカードの記入時間とすることを基本とした。この時間配分は学生にも周知することで、学生の集中力低下を防ぐことを目指した。

以下、フリーター数の算出とグループワークを行った第 11 回の授業の流れを説明する。

【前回のフォロー（15 分）】

第 10 回テーマ「就職率の算出」に関するコメントから、就職率の算出方法（母集団の差異）、性別による差異を把握するためのクロス表の作成の仕方についてのフォローを行う。

【講義（60 分）】

■ フリーターの定義、算出方法の説明

単純に実際にフリーター数を算出することを目的とするのではなく、フリーターとは誰か、フリーターと正社員の平均年収の差異など学生のキャリアデザインと関連づけながら、大学生の就職問題に関する授業を行った。それらを理解した上で、グループワークの形をとり、理解している学生がそうではない学生を助け合いながら、2011 年以降のフリーター数（男女別）を算出し、クロス表作成を行った。

■ グループワーク課題（発表にむけたクロス表の作成）

各班で設定したテーマで行ったアンケート結果の発表へ向けて、それまでの授業で学んだクロス表の作成法の確認および表の作成作業を進めた。尚、第 12 回も同様に班ごとの集計・分析を行った上で、第 13 回の授業を成果発表会として設定した。

【コメントカード記入（15 分）】

フリーターについての講義内容に対する質問、クロス表の作成法についての質問など、授業で理解したことと理解しきれなかったことを「見える化」した。

授業で特に使用しているツールとその活用法

授業教材は、社会調査に関するテキストをもとにできるだけ具体例を活用して、担当教員が各回のテーマに合わせて作成した資料（毎回 A4：6 枚程度）を用いている。その他、映像資料（ドキュメンタリー作品など）、官公庁の統計データ（例：厚生労働省と文部科学省における就職率の捉え方、フリーター数の算出など）、プロ野球選手のデータ（例：打率と本塁打の関係性を探るなど）を適宜用いて、学生に身近なトピックを提示している。

その他、コメントカード、グループワーク用の提出書類にコメントを付し、

	<p>返却し、班ごとにファイルにまとめ、学習の軌跡を「見える化」できるように心がけた。</p>
<p>学 習 成 果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<p>授業中のコメントカードにも「数学は苦手」というコメントは多く見られた。文系の学科に進学したのに、「なぜ数学をやるのだろう」と率直に感じる学生が目立つ現実の中で、本科目における学習を通して、基礎的なレベルではあるが、膨大な数的データを見て、それをクロス表としてまとめるプロセスをほとんどの学生が理解できるようになった。その成果は、「数学に触れる機会が少なかったのが新鮮だった」という授業評価アンケートのコメントから読み取れるだろう。つまり、「数学は苦手」という学生たちの興味・関心を引き出せたという点に本科目の学習成果が求められる。また、様々なデータをただ受け止めるのではなく、そのデータがどのように生まれてきたのか、どのように解釈できるのかという「リテラシー」の向上にも成果が見られたと考えられる。今後は、本科目のような基礎的な授業での学習を2年次、3年次の学びへより明確に接続させていくことが課題であろう。</p>
<p>学習成果の評価・測定の方法</p>	<p>以下の3つの方法を重ねあわせ、到達目標に対する学習成果の評価・測定を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① グループワークへの参加度 (20%) : 毎回の講義では、講義中に担当者から出された課題を各班で話し合いながら解決する時間を設けることに加え、第14回講義で行う各班の成果報告へ向けて、グループワークの時間を設けている。本科目では、メンバーのグループワークへの参加度を学生間で評価しあうという学生主体の方針を取り入れた。 ② 毎回のコメントカード (30%) : 各回の講義から理解したこと、疑問点などの記述内容をもとに評価した。尚、コメントカードは講義冒頭で前回の復習に活用した。 ③ 試験 (50%) : 内容は、クロス集計表の作成、統計データ、質的データの解釈など。
<p>本科目についての学生からの評価</p>	<p>春学期末に本学で行った「学生評価アンケート」の結果、「全体満足度」は大学全体の平均とあまり変わらなかったものの、「話し方適切」「学習の雰囲気」への評価は大学全体の平均を大きく上回った。すべての学生が「満足」と回答したわけではないことは確かであるが、それでも以下のような評価(自由記述)は得られている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クロス表の作り方からアンケートの作り方、そこから取ったデータもどのように読み解いていくか、この一連の作業の意味をよく理解できた。 ・メディアでよく見るアンケートやドキュメンタリーについての真実だったり、演出による変化だったり、メディアリテラシーを考える、とてもためになる授業でした。 ・班をつくることで、わからないことを相談できたり、自分たちで考える時間が設けられたりした点がよかった。さらに、先生が回ってきてアドバイスをしてくれたため、自分たちで考える楽しさがあった。 ・わかりやすい説明があった上で、野球のデータを使ったため、とても面白く

●専門教育科目・基幹科目（1年次必修）●資料等を分析・解釈を行う

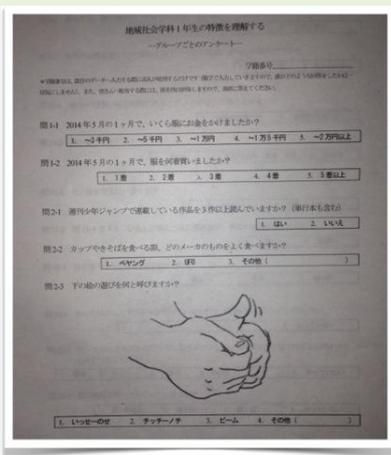
できました。

・クロス表の作成を数回にわたってやることにより、より理解できたし、自信に繋がった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

本学科の教育方針は、「社会で生き抜く力」を育てることである。そのため、専門知識を単純に教えるのではなく、大学での学びが就職した後、どのような場面で役に立つのかをイメージさせながらその意義を伝え、学生の学ぶ意欲を高める教育上の工夫が求められており、担当教員も基本的にその方針で教育を行っている。本科目では、社会に出た後、様々な職種でどのような場面で、基礎的な数的処理や資料の解釈、まとめ、分析、発表が求められるかを説明し、学生が「苦手→興味が湧かない→難しい→諦める」という悪循環に陥ることをないように努めた。だが、授業評価アンケートをみても、受講者全員が満足と回答しているわけではないため、今後も教育方法への創意工夫を重ねて行く必要があると感じている。

授業風景



学生が作成した質問表の一例



授業時間外に研究室で作業を継続する学生

その他の特記事項

本学科では、1年次秋学期からゼミ（地域社会学基礎演習）が始まる。本科目を含む、「フィールドスタディの方法」4科目は、ゼミの実践的活動に主体的に取り組むための基礎的知識、学習態度などを涵養することに配慮している。

臨床総合実習

森ノ宮医療大学

保健医療学部 理学療法学科

金尾顕郎

科目の位置づけ	臨床総合実習は科目区分「専門科目 - 臨床実習」に配され、4年次に開講される科目である。これの履修に際し、専門基礎科目・専門科目はほぼ全て履修を終えており、これら科目の中で習得された知識・技術を実践するものである。つまり、学士課程として科学的思考を醸成する上での集大成たる卒業研究と双壁をなし、理学療法士として理学療法実践能力を醸成する上での集大成である。
受講（登録）学生数	60名（4年次） ※時期を分け20名×3クラスにて実施
科目の到達目標	<ol style="list-style-type: none">1. 対象者や職員と適切なコミュニケーションが図れる。2. 対象者に必要な情報を医療面接と検査・測定によって抽出することができる。3. 得た情報に基づいて、対象者の生活機能を構造的、統合的に解釈できる。4. 対象者や家族等の希望を基に適切な理学療法目標を設定し、科学的根拠に基づいた理学療法プログラムが立案できる。5. 実習指導者の指導の下、立案した理学療法プログラムが適切に実施できる。6. 理学療法介入前後の変化に気づき、再度評価を実施し、必要であれば理学療法プログラムの再考ができる。
教育方法の特徴	<ol style="list-style-type: none">1. 学内教育担当である大学教員（以下、本学教員とする）と学外臨床実習担当である理学療法士（以下、臨床実習指導者とする）が連携し、学内教育との一貫性を持った臨床教育を実施することを目的として、実習病院内に「臨学共同参画センター（以下、参画センターとする）」を設置している。2. 参画センターに本学教員が常駐しており、臨床実習指導者による病棟での臨床教育場面にも同行する。これにより本学教員と臨床実習指導者の学生への指導に一貫性を持たせた臨床教育が可能となる。具体的には①知識・技術の指導、②患者評価・治療の理学療法的思考、③学生個々人に生じている課題点、④その他、について大学側と施設側の共通認識をもって学生の指導が行える。3. 学生は参画センターにて本学教員の指導に基づき「調べ物」、「実習シミュレーション」を実施した上で病棟での実習に臨み、臨床実習指導者のもとで評価・治療プロセスを実施する。その後、これに同行した本学教員による「フィードバック」を受ける。4. 上記の取組みの中で学生同士が患者情報を共有し、学生間でのディスカッションを通じて担当患者以外についても積極的に思考する習慣作りを行う。

●専門科目●臨学共同参画センターを活用した教育

	<p>5. 理学療法士養成課程における従来型の臨床実習は 1 人ないし少人数で臨むことが多く、過度なストレスから科目目標に到達できない学生が存在した。集団での実習を実施することによりこれらの軽減を図り、当初の目標に専従することが可能になる。</p> <p>6. 本学教員と臨床実習指導者が密に連携をとることにより、「臨 - 学」間でのギャップが生じることなく、シームレスな学生教育が可能になる。</p>
<p>教室空間の特徴</p>	<p>本学敷地から離れ、相互連携協定先病院敷地内に敷設された参画センター内にて教育を実施する。センター内にはグループディスカッション用に 20 名分の机を備えたセミナー室と「実習シミュレーション」のために必要な 20 名分のベッドを備えた実技室、「調べもの」のために必要な PC・図書がある資料室、ならびに教員待機室を置く。</p>
<p>特定の回の授業の流れ・時間配分</p>	<p>実習開始前：前日に課された課題について教員から指導を受け、「調べもの」についての不足・誤りの修正や「実習シミュレーション」を行う。</p> <p>実習開始：臨床実習指導者の指導のもと病棟での実習を開始する。この間、教員による見学が適宜行われ、臨床実習指導者と本学教員との間で治療方針について意見交換がなされる。臨床実習指導者による臨床教育と本学教員による学習到達度合の確認が同時に行われる。</p> <p>実習終了後：翌日の治療方針について本学教員による「フィードバック」を実施する。フィードバックを受けた内容について、学習の方針を立てるため即座に資料室を利用し、本学教員への確認を当日中に行う。</p>
<p>授業で特に使用しているツールとその活用法</p>	<p>病棟での経験内容を参画センターにて学生同士共有するため、デジタルカメラ・デジタルビデオカメラを用いて「患者の映像記録」を積極的に活用している。これにより、情報共有を受ける側の学生も、患者に対してどのような理学療法を実践するか積極的に思考するようになることが確認されており、教材としての活用効果が高い。</p> <p>また、フィードバック内容についての理解を向上させるため、参画センター内資料室の「専門図書・PC」の利用頻度が高い。</p>
<p>学習成果 (学生は何ができるようになったのか)</p>	<ol style="list-style-type: none">1. 本授業形態の実施により、従来掲げている科目到達目標達成者数が増加した。2. 従来型の実習では過度なストレスのために、発言することすら容易でなかった学生が、患者への理学療法プロセス実施に専念できるようになった。3. 学内の授業では自ら教員の知識を利用することがなかった学生でさえ、積極的・能動的に教員とディスカッションするようになった。4. 理学療法学の学習（＝教育場面）ではなく、理学療法の実践（＝臨床場面）では、教科書や講義など既存の知識から学ぶだけでなく、患者から学ぶ必然性があることが理解できた。

**学習成果の評価・測定
の方法**

1. 評価票
当該科目で従来用いている評価票について臨床場面に関する項目を臨床実習指導者が、学習場面に関する項目を本学教員が分担して評価する。
2. デイリーノート・症例ノート
学生は終業前に本学教員によるフィードバックを受け、この内容をデイリーノート・症例ノートとして記載し、1日の学習内容の整理を行う。後日教員がこの内容を確認し、学生の学習進捗状況を日々確認する。

**本科目についての学生からの
評価**

「わからないことがあった時にすぐに教員に聞けるのが嬉しい.」, 「帰宅後に取り組むべき学習課題が明確になっているため、集中して取り組める.」との評価を得ている。一方で、「学習環境が学内と類似することにより、自分自身で気を付けないと緊張感が損なわれてしまう.」との意見もあった。

**学生の学習のあり方や教授法の
果たす意味等に関する、担当
者の基本的な考え方（教育哲
学）**

理学療法士養成課程として存在する本学、ことに理学療法学の習得のみならず理学療法の実践に関する当科目では「患者」の治療を行うことに主眼が置かれる。そこでは学内教育により得られた知識の全てを横断的に使用し、その上で「患者から」直接学ぶプロセスが最も重要である。そのためには、「臨床実習指導者」に学生指導の大半を委ねる従来型の臨床実習スタイルから脱却を図り、学生個々の能力を熟知した「教員」が患者の治療に必要な情意・知識・技術を必要に応じて教授するスタイルを再構築し、「患者」の治療を行えることに対する喜びを教えなければならない。このような目的意識を持ち、教員が積極的に学生の助力に徹することにより「臨床実習指導者から」あるいは「教員から」学ぶわけではなく、これら教育資源を利用した上で「患者から」学ぶ、という理学療法の本質を教授することが可能になると考える。また、本学教員が臨床実習に関わることで、それまで行われてきた学内教育のあり方の再考にもつながる。そして、臨床実習の場で学生との相補的役割関係を持つことで、教員自身も一人の理学療法士として手本たることが求められると同時に学生の持つ新たな考えも得られることとなり、「臨-学」が融合した臨床実習の新たな形が生まれると思われる。

授 業 風 景



症例を見学した学内教員による
フィードバック風景

●専門科目●臨学共同参画センターを活用した教育



実習開始前の学生達による
実習シミュレーション風景

●専門科目●企業経営ゲームを通して経営人としての総合的な能力の育成を目指す

ビジネスゲーム上級

麗澤大学

経済学部／経営学科

吉田健一郎

科目の位置づけ	当該科目に関連する開設科目はビジネスゲーム中級、ファイナンス基礎、企業金融論、経営戦略論、情報科学などである。また、経営学科と経済学科の学生がチームを組んでこのゲームに参加することが望ましいため、両学科の橋渡しの科目としての意味合いも持つ。
受講（登録）学生数	15名
科目の到達目標	経営戦略論やファイナンス論、データ分析など、他の科目の知識をフル活用しながら、他の会社との競争に打ち勝つことを目的としたビジネスゲームを用いた科目であり、これまでに学んだ知識やスキルを発揮することが目標となる。
教育方法の特徴	ビジネスゲーム基礎・中級と2つの科目を通して上級では、1つの会社を3名（社長、財務・シミュレーション担当、経済・金融担当）で経営する。そして、中級の内容をベースにこれまで扱わなかったプランニング（戦略の設定など）とプレゼン（レビュー）を実施することで、 <u>経営人としての総合的な能力の育成を目指す</u> 。すなわち、異なる科目を履修してきた学生たちが相互に企業経営というシミュレーションに取り組み、意思決定から活動結果の報告までの企業経営の一連のプロセスにおいて、 <u>学生間の相互補完性が発現する仕組みを整えた点</u> が本科目の教育方法の特徴である。
教室空間の特徴	「10」とも関連するが、本科目は可動式の机が配置されている一般教室とPCルームを行き来する。 ●一般教室：可動式の机の部屋ということ以外に特徴はない（30人教室）ゲーム時には机を動かして、プレイヤー（受講者）がゲームキットを取り囲む形となる。⇒ゲーム時に利用 ●PCルーム：通常のPC教室であり、2人に1つ教卓PCが映るモニターが用意されている（同じく30人教室）⇒投資意思決定のためのシミュレーションをExcelで行ったり、経営計画を立案したり、計画と実績の差異について分析・発表する際に利用
特定の回の授業の流れ・時間配分	H25年度においては、基本的に3週で1ゲーム（1年）を形成している。すなわち、経営計画の策定に始まり、計画に基づく実施（ゲーム）、決算、レビューの1サイクルを3週かけて、以下のように行っている（半期で4サイクル実施）。 ○1回目：プランニング（PCルームにて実施） 株式銘柄の選択 ゲームの資金調達～設備投資 戦略決定 マクロデータの分析 広告費金額の決定と入力 研究開発費金額の決定と入力 ○2回目：ビジネスゲーム（一般教室にて実施） 与えられた最大販売個数と販売価格をもとにビジネスゲームを実施

●専門科目●企業経営ゲームを通して経営人としての総合的な能力の育成を目指す

株式投資の損益の把握
 決算処理
 ○3回目：レビュー（PCルームにて実施）
 戦略の評価、競争環境やシミュレーション結果のレビューなどを実施
 プレゼンテーションの準備とプレゼンテーション

授業で特に使用しているツールとその活用法

授業で利用しているツールは以下の通りであり、各ツールが備えている本質的な機能以外で特別な活用は行っていない。

- 本学独自のビジネスゲーム教材：仮想空間の演出
- 表計算ソフトウェア：意思決定のためのシミュレーション・企業業績の計画書作成
- 教員・学生間のコミュニケーションツール、ファイル共有ツールとしての学内 SNS

学習成果
 (学生は何ができるようになったのか)

これまで個々に獲得してきた経営系・ファイナンス系の知識と情報活用能力が結びつくことで、在学中に学習した内容がつながるようになる。例えば、各社は毎期、他社の動向をうかがいながら、戦略（ex：コストリーダーシップか差別化戦略かなど）を決定し、短期計画（当期の計画）を立てるといった経営戦略の内容をもとにして、予想売上、予想売上原価、予想利益などをあらかじめ用意された Excel のフォーマットを用いて算出することで、「経営戦略」と「会計」の内容が強固に結びつくことが期待される。その際、Excel の活用（数値シミュレーション）がいかに必要になるのかを自覚すると同時に、過年度で学習した内容を在学中に実践できる場（知識を確認できる場）ともなる。

なお、次表は他の科目との連動性・関連性に重きをおいている本科目（ビジネスゲーム上級）と他の科目との関連を示した表である。

科目名	内容	ビジネスゲームとの関連
ビジネスゲーム中級	上級の前段階のゲーム	ゲーム上の経営環境基盤の理解
情報科学B	Excelの基本的な利用	
リスク計量分析	株価指標（PER, PBR, ROE等）の理解、数値シミュレーションの実施	シミュレーション能力
企業金融論A	資金需要、B/SやP/Lの見方、キャッシュフローなどの理解	
管理会計論	会計数値を読み解く能力、会計数値を用いた企業分析、プランニング	経営数値の理解
経営戦略論	企業のポジショニングや関係性の理解	意思決定能力

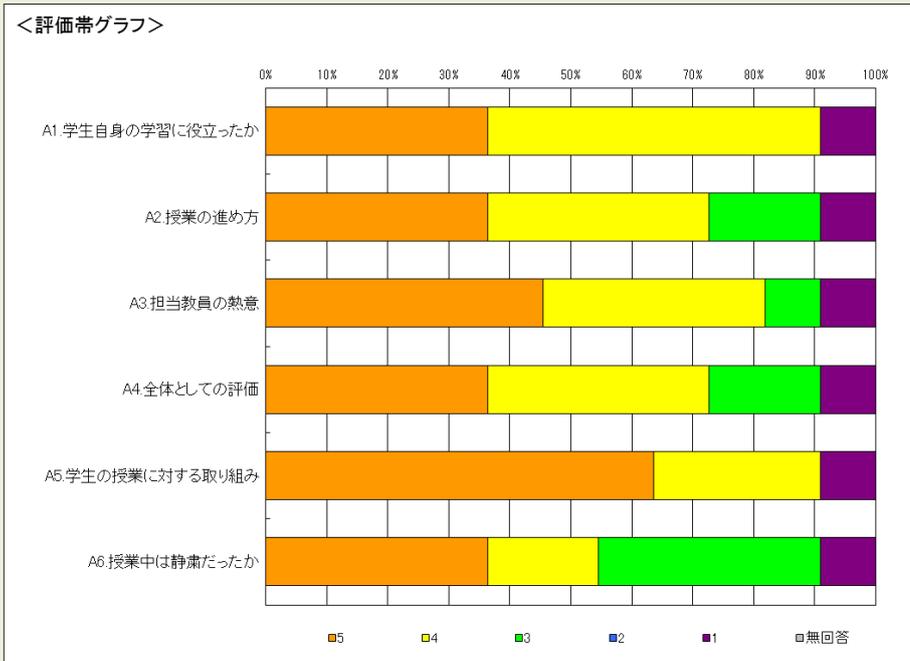
これらの科目をより積極的に履修してきたグループとそうでないグループでは、実際にゲーム結果に開きがあった。わずか 5 サンプルではあったが、少なくとも本 Semester では 多様性得点（チームとして履修してきた科目数×成績）が高いグループほどゲーム上の業績が高く、単に成績が良い学生で構成されたグループであればゲーム業績が良いわけではなかった点を付記しておきたい。

学習成果の評価・測定の方法

学習成果の評価（成績付け）は、次の 3 点によって行っている。

1. ゲーム上の利益（本業の利益である営業利益と最終利益である当期純利益）
2. プレゼンテーション（表現の上手さと質疑の対応）
3. 計画と実績の差異（シミュレーションの質が高ければ、差異は少ないという前提のもと）

本科目についての学生からの評価



学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方（教育哲学）

座学中心の授業が多い中、「勝敗を決めるためのルールや環境または他人との相互作用を元にした普通楽しみのために行なわれる活動」であるビジネスゲームの活用は学生にとってはある種の刺激を得る場である。担当者としては、「17」に示したように段階的なビジネスゲームの活用が経営系学部の学生にとって、ひとつのスパイスになると考えている。なぜなら、基礎レベルでは他の経営系の科目を理解するための場であり、上級レベルでは逆に他の科目を活用できる場として設計しているからである。

ボリュームゾーンである中間層（偏差値 45～55）の大学において、1990 年と比較して大幅に勉強時間が減少しているという現状において、大学生が主体的に学ぶことを促す仕組みが求められているのは殊更強調するまでもない。ゲームという楽しみながら学べる要素を大学教育の中で実施していくことによって、いわゆる学習における「フロー体験（Mihaly1996）」のきっかけとなり、ひいては学力の向上を図ることができると考える。

授業風景



その他の特記事項

本学のビジネスゲームを活用した教育は大きく 3 段階に分かれている。
 1. ビジネスゲーム基礎：ビジネスプロセスや決算処理の理解を促す教材。

●専門科目●企業経営ゲームを通して経営人としての総合的な能力の育成を目指す

2. ビジネスゲーム中級：基礎の内容をベースに金融取引を加えた教材。

3. ビジネスゲーム上級：中級の内容をベースにビジネスとファイナンスの意思決定、それに付随するシミュレーション要素などを加えた教材。

それぞれに特徴があり、難易度や他の科目との連動性が異なる。なお、ビジネスゲーム基礎の成績と会計学の成績について、入試区分で学習習慣をコントロールするダミー変数を入れて回帰分析を行ったところ、仮説「ビジネスゲーム科目の成績が良ければ、会計科目の成績も良くなる」が検証されている。

教授法が大学を変える

編集：日本私立大学協会 教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

(<http://jaed.jp>)

平成27年4月3日 第1版発行

日本私立大学協会

(<http://www.shidaikyo.or.jp>)

〒102-0073 千代田区九段北4-2-25

TEL 03-3261-7048

FAX 03-3261-0769

担当：広報部 小林

koei@shidaikyo.or.jp